

# 東 州 津 遺 跡

—吉野川北岸農業水利事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

徳 島 県 教 育 委 員 会  
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター



調査地遠景



W区現況



E区現況



SM01 出土 龍？を二列の蛇行する竹管文で表現した壺形土器



# 序 文

本書は農林省中国四国農政局による吉野川北岸農業水利事業に伴い、昭和49年度（1974年度）に行った三好市池田町所在の東州津遺跡の調査成果をまとめたものであります。

この事業は農業用水の供給を図る目的で、池田町に建設された池田ダムに取水施設を設けて、池田町から板野町に至る延長7.4kmの水路により導水し、流域の水田補給と畑地灌漑、620haの農地造成を行うものとして計画されました。

調査は徳島県教育委員会に文化振興と文化財保護を所管する文化課が新設された年度に、初めての直営事業として行われたものであります。当時としては県内で類例に乏しい弥生時代の方形周溝墓が発見され、大きな関心が寄せられました。

このたび、徳島県立埋蔵文化財総合センターが保管する出土品や実測図面、写真等の整理・活用を図るため「出土文化財保存整備活用事業」が計画され、その一環として、調査報告書が刊行されることとなりました。

本書が学術・教育に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、調査から長い年月が経ちましたが、発掘調査の実施、報告書作成にあたって多大なご支援、ご協力をいただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成22年11月

公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
理事長 福家 清司

# 例 言

- 1 本報告書は昭和 49 年度に徳島県教育委員会が実施した、農林水産省中国四国農政局の吉野川北岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 発掘調査及び報告書の作成についての実施期間は次の通りである。
  - ・発掘調査 昭和 49 年 12 月 16 日～昭和 50 年 3 月 26 日
  - ・整理業務、報告書作成  
平成 21 年 10 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日
- 3 整理業務は、徳島県より委託を受けた公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 方位の表示は、日本測地系の北を表す。
- 5 第 2 図の歴史的環境図は、徳島県教育委員会が平成 18 年 3 月に発行した『徳島県遺跡地図』より「阿波池田」の S=1/25,000 の地形図を 1/50,000 に縮小転載、加筆したものである。第 3 図は三好市発行の S=1/2,500 都市計画図を縮小転載し、加筆したものである。
- 6 各遺構を示す記号は、公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターが定めたものを使用した。  
SA: 掘立柱建物、SB: 竪穴住居、SD: 溝状遺構、SG: 柵列、SK: 土坑、SM: 墳墓、  
SP: 柱穴・小穴、SR: 自然流路・旧河川、ST: 埋葬施設、SX: 性格不明遺構
- 7 遺構番号は、第 4 図に掲げる主要な遺構に限り改めて通し番号を付けた。それ以外は旧遺構番号である。
- 8 本書の執筆は菅原康夫（I -1・2）、近藤玲（II、III）が行い、近藤が編集した。なお、I -3 は、楠元哲夫・福家清司・森本嘉訓による。
- 9 写真図版は、遺構および遺物の出土状況については、発掘現場の担当者が、出土遺物の写真、遺跡周辺の現況写真については、近藤が撮影を行った。
- 10 整理にあたっては、次の方々のご協力を得た。  
立花聡 立花利子 千賀久
- 11 本書に収録した出土遺物および図面や写真などの記録の一切は、徳島県板野郡板野町犬伏 86 番 2 に所在する徳島県立埋蔵文化財総合センターにおいて保管している。

# 凡 例

- 1 掲載した遺構の平・断面図は基本的に縮尺を以下のように統一した。

遺構配置図 S = 1/200

- 2 掲載した出土遺物の実測図は、土器については S = 1/4 とした。他の遺物の縮尺については以下の通りである。

石器（石鏃・石庖丁・楔形石器・剥片） S = 2/3

石器（石庖丁・スクレイパー・石錘） S = 1/2

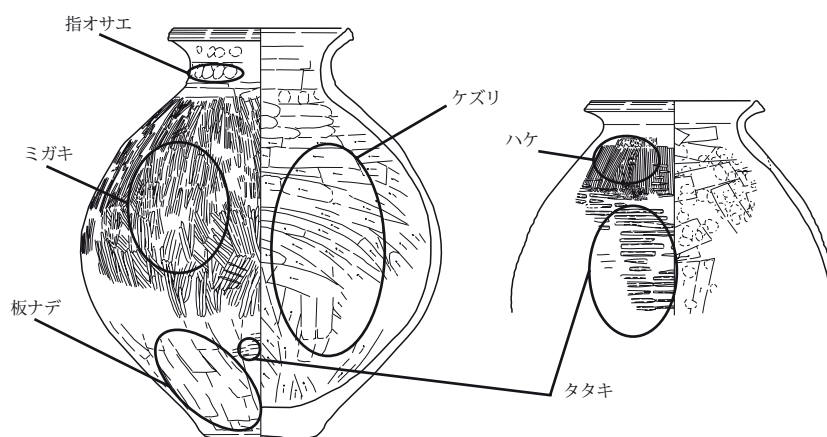
石器（砥石、敲石など大形石器） S = 1/3

土製品 S = 1/2

- 3 土器観察表の器種欄は、特に記載の無い場合は、弥生土器もしくは古式土師器の器種である。また、胎土欄の「石・長・雲・角・結・赤」は、「石英・長石・雲母・角閃石・結晶片岩・赤色斑粒」を省略して表しており、これら六種類以外で胎土中に識別できるが、詳細不明なものを「その他」や、「黒色鉱物」を略して「黒」と記入している。また、残存率欄の網掛けは、口縁部から底部までの破片があり、完形品に近い状態の土器を示している。

なお、調整技法欄内で「→」は技法が行われた前後関係を示し、「・」は技法が並立して各部位に認められる場合を示している。

- 4 土器実測図の表現については、以下のような描画で示した。



- 5 新旧遺構番号については、以下の通りである。下記表の新遺構名以外は、すべて旧遺構名である。

新遺構名	旧遺構名
SB01	SI 01
SB02	SI 02
SD01	SD01
SD02	X
SM01	方形周溝墓

# 本文目次

I	調査と整理の経緯	1
1	調査の経緯	3
2	整理の経緯	9
3	調査日誌	10
II	遺跡の立地と環境	17
1	地理的環境	19
2	歴史的環境	19
3	既往の調査	23
III	調査成果	25
1	基本層序	27
2	遺構と遺物	27
3	まとめ	44



## 挿 図 目 次

第 1 図	東州津遺跡周辺地形分類図……………19	第 26 図	Pit23 出土土器……………41
第 2 図	東州津遺跡周辺歴史的環境図……………20	第 27 図	Pit31 出土土器……………41
第 3 図	東州津・西州津遺跡既往調査地点……………23	第 28 図	Pit5 出土土器……………41
第 4 図	W 区遺構配置図 (S=1/200)……………26	第 29 図	Pit36 出土土器……………41
第 5 図	W 区基本土層模式図 (S=1/20)……………27	第 30 図	Pit56 出土土器……………41
第 6 図	SB01 出土土器 (1)……………30	第 31 図	Pit67 出土土器……………42
第 7 図	SB01 出土土器 (2)……………31	第 32 図	Pit102 出土土器……………42
第 8 図	SB01 出土石器……………32	第 33 図	Pit27 出土土器……………42
第 9 図	SD01 出土土器 (1)……………34	第 34 図	Pit105 出土土器……………42
第 10 図	SD01 出土土器 (2)……………35	第 35 図	W-I 区包含層出土土器(1)……………42
第 11 図	SM01 出土土器 (1)……………36	第 36 図	W-I 区包含層出土土器(2)……………42
第 12 図	SM01 出土土器 (2)……………37	第 37 図	W-Ⅲ区包含層出土遺物……………42
第 13 図	SM01 出土土器 (3)……………38	第 38 図	No.8 トレンチ出土遺物……………42
第 14 図	SM01 出土土器 (4)……………39	第 39 図	No.1 トレンチ出土土器……………42
第 15 図	SM01 出土土器 (5)……………40	第 40 図	No.5 トレンチ出土土器……………42
第 16 図	P17 出土土器……………41	第 41 図	No.4 トレンチ出土土器……………42
第 17 図	P22 出土土器……………41	第 42 図	No.7 トレンチ出土土器……………42
第 18 図	P21 出土土器……………41	第 43 図	No.10 トレンチ出土土器……………42
第 19 図	SK2 出土土器……………41	第 44 図	No.6 トレンチ出土土器……………42
第 20 図	SK01 出土土器……………41	第 45 図	No.9 トレンチ出土土器……………42
第 21 図	土坑 25(SK3) 出土土器……………41	第 46 図	W-II 区包含層出土石器……………43
第 22 図	土坑 101 出土土器……………41	第 47 図	W-I 区包含層出土石器(1)……………43
第 23 図	Pit14 出土土器……………41	第 48 図	W-I 区包含層出土石器(2)……………43
第 24 図	Pit21 出土土器……………41	第 49 図	No.1 トレンチ出土石器……………43
第 25 図	Pit28 出土土器……………41		

## 表 目 次

第 1 表	東州津遺跡周辺埋蔵文化財包蔵地一覧表 (1)…21	第 5 表	出土土器観察表……………46～63
第 2 表	東州津遺跡周辺埋蔵文化財包蔵地一覧表 (2)…22	第 6 表	出土石器観察表 (1)……………62
第 3 表	東州津・西州津遺跡既往調査一覧表……………23	第 7 表	出土石器観察表 (2)……………63
第 4 表	阿波東部と西部の土器編年案……………28		

## 写真図版目次

巻頭図版 1	(1) 調査地遠景	(4) SM01 出土 龍? を二列の蛇行する竹管文で表現した壺形土器
	(2) W 区現況	
	(3) E 区現況	

写真 1	調査地遠景 (三好大橋から)……………66	写真 44	SD01 遺物出土状況 (西から)……………71
写真 2	三好高校 (旧三好農林) から三好大橋を望む…66	写真 45	SD01 P3 地点遺物出土状況……………71
写真 3	調査地遠景 (吉野川南岸井川町から)…………66	写真 46	SD01 遺物出土状況……………71
写真 4	池森神社前の 1974 年 6 月調査区周辺現況 (北から)…66	写真 47	SD01 P4 地点遺物出土状況……………71
写真 5	池森神社前の 1974 年 6 月調査区 (南から)…………66	写真 48	SD02 遺物出土状況……………72
写真 6	池森神社前の 1974 年 6 月調査区 (西から)…………66	写真 49	SM01 遺物出土状況遠景 (北から)…………72
写真 7	吉野川南岸河原から調査地周辺を望む…66	写真 50	SM01 遺物出土状況 (南から)……………72
写真 8	池森神社前の 1974 年 6 月調査区周辺現況 (西から)…66	写真 51	SM01 遺物出土状況 (北から)……………72
写真 9	E 区掘削状況 (西から)……………67	写真 52	SM01 遺物出土状況 (西から)……………72
写真 10	W・E 区現況 (西から)……………67	写真 53	SM01 遺物出土状況 (東から)……………72
写真 11	E 区掘削状況 (東から)……………67	写真 54	SM01 遺物出土状況……………72
写真 12	E 区現況 (西から)……………67	写真 55	SM01 完掘状況 (北西から)……………73
写真 13	E 区掘削状況 (北から)……………67	写真 56	SM01 南北溝完掘状況 (南から)……………73
写真 14	W・E 区現況 (東から)……………67	写真 57	SM01 完掘状況 (北から)……………73
写真 15	E 区遠景 (北東から)……………67	写真 58	SM01 東西溝完掘状況 (東から)……………73
写真 16	E 区現況遠景 (北東から)……………67	写真 59	SM01 ほか完掘状況 (南西から)……………73
写真 17	W 区遠景 (北から)……………68	写真 60	SM01 周溝断面……………73
写真 18	W 区完掘状況 (北から)……………68	写真 61	SM01 完掘状況 (東から)……………73
写真 19	W-I 区遠景 (西から)……………68	写真 62	SM01 周溝断面……………73
写真 20	W 区完掘状況 (西から)……………68	写真 63	SM01 周溝断面……………74
写真 21	W-I 区完掘遠景 (北から)……………68	写真 64	SM01 下層遺物出土状況 (東から)……………74
写真 22	W-III・IV 区遠景 (北から)……………68	写真 65	SM01 遺物出土状況……………74
写真 23	W-I 区周辺現況……………68	写真 66	SM01 東西溝完掘状況 (西から)……………74
写真 24	W-III・IV 区周辺現況……………68	写真 67	SM01 遠景 (西から)……………74
写真 25	SB01 掘削状況……………69	写真 68	SM01 遺物出土状況……………74
写真 26	SB01 掘削状況……………69	写真 69	土坑遺物出土状況……………74
写真 27	SB01 完掘状況……………69	写真 70	土坑遺物出土状況……………75
写真 28	SB01 柱穴……………69	写真 71	土坑断面……………75
写真 29	SB01 掘削状況……………69	写真 72	土坑遺物出土状況……………75
写真 30	SB01 石器出土状況……………69	写真 73	土坑断面……………75
写真 31	SB01 掘削状況……………69	写真 74	三好高校から東州津遺跡を望む 1 (現況北から)…75
写真 32	SB01 掘削状況……………69	写真 75	三好高校から東州津遺跡を望む 2 (現況北から)…75
写真 33	SB01 炉跡検出状況……………70	写真 76	箸蔵ロープウェイから東州津遺跡を望む (現況北から)…75
写真 34	SB02 掘削状況……………70	写真 77	三好大橋から東州津遺跡を望む (現況南西から)…75
写真 35	SB02 完掘状況……………70	遺物写真 1	SB01 出土土器 (壺・甕・鉢・高杯)……………76
写真 36	SB02 完掘状況……………70	遺物写真 2	SD01 出土土器 (壺・甕・鉢)……………77
写真 37	SB01・02、SM01 完掘状況 (東から)…………70	遺物写真 3	SM01 出土土器 (壺)……………78
写真 38	SB02 炉跡検出状況……………70	遺物写真 4	SM01 出土土器 (壺・甕)……………79
写真 39	東州津遺跡遠景と吉野川対岸井川町を望む 1 (現況北から)…70	遺物写真 5	SM01 出土土器 (甕・鉢)……………80
写真 40	東州津遺跡遠景と吉野川対岸井川町を望む 2 (現況北から)…70	遺物写真 6	SM01 出土土器 (鉢・高杯)……………81
写真 41	SD01 遺物出土状況……………71	遺物写真 7	遺構出土土器……………81
写真 42	SD01 完掘状況 (南から)……………71	遺物写真 8	包含層出土土器・石器……………82
写真 43	SD01 P2 地点遺物出土状況……………71	遺物写真 9	遺構・包含層出土土器……………83

# 1 調査の経緯

## 事業の概要

徳島県を東西に貫流する吉野川は延長 194km、流域面積 3,750km<sup>2</sup>の四国第 1 の河川である。吉野川北岸地域は、沿岸でありながら大部分の地域が自然取水が不可能で、降水量が少なく、水利条件に恵まれず、古くから用水確保に努力が払われてきた。

中国四国農政局による吉野川北岸農業水利事業は、吉野川水系の水資源利用の高度化をめざす吉野川総合開発計画の一環として建設される池田ダムに農業用水を依存し、東西 74km の幹線水路の敷設により、用水の安定化を図るとともに、水源施設のない畑、桑園、果樹園への灌漑や農地開発により地域農業の発展を図ることを目的として計画されたものである。事業は当初総事業費 176 億円、工期は 1971 年（昭和 46）～ 1977 年（昭和 52）の 7 カ年で計画された。

## 遺跡確認の発端

池田町・三好町域での幹線水路工は昭和 47 年末に工事着手された。県教育委員会（以下、県という）では当該地域の事業区間における埋蔵文化財包蔵地の把握をしておらず、また、吉野川北岸農業水利事業所（以下、事業所という）との連絡協議が行われていなかったため、工事計画の把握もなされていない状況であった。

昭和 49 年 2 月、徳島県在住の考古学を学ぶ教員等で作る徳島考古学研究グループの会員が州津地区の工事現場において掘削土中から弥生土器・土師器片を採集し、池田町教育委員会及び県に通報したことから、同年 2 月 20 日に県社会教育課の立花 博社会教育主事が現地を確認したうえで、事業所に工事計画の聴取を行っている。

## 州津遺跡の調査

49 年 4 月に県に文化振興班と文化財保護班からなる文化課が新設された。新年度早々、工事未着手の 49 年度事業箇所については、事業者負担により調査を実施する旨の協議を行って、5 月 20 日、49 年度工事区部分の調査について、事業所に委託契約の申し入れを行い、6 月 3 日付けで県と事業所長で調査業務の委託契約を締結している。（昭和 49 年 6 月 3 日付 49 吉北第 372 号「委託契約締結書」契約期間は昭和 49 年 6 月 3 日から 8 月 29 日まで。委託費 971 千円）。

あわせて森 浩一県文化財保護審議会委員への調査指導及び調査員の仲介を依頼するなど、調査体制の準備を行い（昭和 49 年 6 月 10 日付、教文第 70 号「州津遺跡」緊急発掘調査について（依頼））、同年 5 月 31 日、文化庁に発掘調査届出書を提出し（昭和 49 年 5 月 31 日付 教文第 56 号「埋蔵文化財発掘届出書」、調査主任・調査顧問・調査員の承諾書添付）、6 月 3 日から 6 月 22 日まで、委託契約内容にしたがい、州津遺跡調査対象面積 4,000m<sup>2</sup>の内 130m<sup>2</sup>のグリッド調査を実施しているが、遺構は検出されなかった<sup>1)</sup>。

## 東州津遺跡・大柿遺跡の確認

州津遺跡の調査時点において、昭和 49 年度以降の事業については工事着手前に県と十分に検討したうえで着手することが協議されており、県では工事は稲収穫後の予定と聞き及んでいたが、工事着手

の事前打ち合わせは行われなかったとしている。

一方、事業所は州津遺跡の経験を生かし、以東の工事にあたっては、20cm ずつ 2 回にわたり表土除去を行い、遺構・遺物等の出土があれば、遺跡発見届けを提出し、指示を受ける方針のもと、独自に作業を進めたようである。同年 10 月 28 日、昼間字大柿内において表土掘削に伴い多量の土器・石器が出土するとともに、ブルドーザーのキャタピラ痕をとどめた遺構が徳島考古学研究グループ会員によって確認された。この結果は県とともに直接文化庁にも連絡されたようである。11 月 3 日には東州津地区においても弥生土器・土師器の出土が確認された。

事業所の方針である工事中における埋蔵文化財の確認はこの 2 例によっても、現実的に不可能であり、また仮に県が主張するように工事着前の協議が行われていたとしても、埋蔵文化財調査体制は未整備であり、表土除去時に常駐し立会、包蔵地の確認及び取扱い等についての措置することは難しく、これも現実には対応が困難であったと判断される。

### 東州津遺跡の調査

県では 11 月 5 日に森浩一・秋山泰県文化財保護審議会委員の現地視察を要請し、その結果、発掘調査実施の方針が決定された。

この決定を受け、県では調査計画を立て、文化庁記念物課長に事業経過について報告するとともに、11 月 19 日付教文第 249 号で遺跡発見届出書を、12 月 26 日付教文第 285 号で秋山泰委員を調査担当者、森浩一委員を調査顧問として、発掘調査届出書を文化庁に提出している。

発掘調査の委託については事業所と県との委託契約は 12 月 28 日に締結され（昭和 50 年 1 月 6 日付 49 吉北第 1130 号「委託契約締結書」 契約期間 昭和 50 年 1 月 6 日から同年 3 月 26 日まで、委託費（負担限度額）2,800 千円）、これに県費 1,000 千円を加えた 3,800 千円で実施することとなった。

文化庁への報告事項には徳島考古学研究グループとの協力体制の検討も含まれたようであるが、工事期間の関係上、緊急性を要するため、発掘調査体制未確立のまま州津遺跡に続いて同じ人員編成で行われた。

東州津遺跡の調査は、対象面積 4,000㎡のうち、グリッド調査で遺構が検出された 600㎡について行うこととし、昭和 49 年 12 月 16 日に開始し、50 年 3 月 13 日に終了している。その間の 2 月 21 日には現地説明会が行われた。50 年 3 月 15 日付 教文課第 47 号で埋蔵文化財発見届が出されている。

大柿遺跡については 9,150㎡の調査必要個所のうち、西端部の調査を 3 月 10 日から 26 日まで行った。

### 分布調査と北岸用水関連調査

前述のように本事業の影響を受ける埋蔵文化財包蔵地の把握はなされていなかったため、東州津遺跡・大柿遺跡の調査と併行して、県では国の昭和 49 年度文化財保護費補助金の交付を受け、昭和 50 年 2 月 1 日から 3 月 31 日まで、吉野川北岸用水路事業区域、池田～美馬の幅 2km、延長 30km の詳細分布調査を秋山 泰委員を調査主任に、徳島考古学研究グループ会員を調査員として実施した（事業名：吉野川北岸用水路線分布調査 総事業費 600 千円）。

その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、88 カ所の包蔵地が明らかになった。

昭和 50 年 6 月には大柿遺跡の 49 年度調査区に隣接する区域で初めて自前の調査体制が採られたが、県文化財調査員や教員派遣による応急措置であり、以後この体制で、昼間遺跡、足代遺跡などの調査が



継続する<sup>2)</sup>。

本事業に加え、本四架橋関連事業や県道鳴門・池田線改良工事等の事業増加により、県教育委員会初の埋蔵文化財専門職員が配置されたのは、昭和 53 年である。本事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は昭和 60 年度まで継続された<sup>3)</sup>。

#### 調査体制

調査は以下の体制で実施された。(所属は当時)

州津遺跡 三好郡池田町州津字堂面所在

東州津遺跡 三好郡池田町州津所在

大柿遺跡 三好郡三好町大字昼間字大柿内所在

調査団長 藤野井親仁(県教育委員会文化課課長 故人)

副団長 滝下忠夫(州津遺跡・東州津遺跡 池田町教育長 故人)

三室正典(大柿遺跡 三好町教育長 故人)

調査顧問 森 浩一(同志社大学文学部教授・県文化財保護審議会委員)

調査主任 秋山 泰(県文化財保護審議会委員 故人)

調査員 楠元哲夫(元榎原考古学研究所嘱託 故人)

石川重平(石井町文化財保護審議会委員長 故人)

調査補助員 福家清司(県教育委員会文化財調査員) 現：県教育委員会教育長

森本嘉訓(県教育委員会文化財調査員)

事務局 立花 博(県教育委員会文化課社会教育主事 故人)

青木哲人(県教育委員会文化課庶務係長)

東州津遺跡・大柿遺跡調査参加者(同志社大学文学部文化史学専攻生)

岩崎 広

門田栄二 現：岡山県倉敷市立東中学校校長

吉川和則 現：滋賀県野洲市教育委員会文化財保護課課長

岡田章一 現：兵庫県立考古博物館整理保存課課長補佐

菅原康夫 現：公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター常務理事

#### 註

(1) 州津遺跡については『吉野川北岸水利事業関係埋蔵文化財発掘調査報告— I — 州津遺跡発掘調査概要』徳島県教育委員会 中四国農政局吉野川北岸水利事業所 1974 18p が出されている。

(2) 昭和 50 年調査の大柿遺跡については『大柿遺跡発掘調査概報—吉野川北岸農業水利事業に伴う緊急発掘調査—』徳島県教育委員会 三好町教育委員会 吉野川北岸農業水利事業所 1976 24p が刊行されている。

(3)本事業については、昭和51年度以降、「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財保護との関係の調整について」（昭和50.10.20庁保記第211号）に基づき、農家負担分経費を文化財担当部局が負担し（国補事業）、発掘調査が実施されてきたが、出土品の整理、報告書の刊行については等閑に付されたままであった。これは県の埋蔵文化財保護体制の不備とも相まって、他の事業でも同様であり、不十分なながら整理業務まで含めて予算計上されたのは県事業では昭和59年度から、国等の事業では本州四国連絡橋公団関係事業の整理業務が開始した昭和61年度からである。したがって、註(1・2)を除き、文化課発足以降、59年までに徳島県教育委員会から刊行された調査概報や報告書は、調査担当者個々の勤務時間外での努力によるものである。

## 付 記

本事業については1970年代前半の徳島県の埋蔵文化財保護措置とあわせて、「地域考古学界の動向—徳島県」『考古学ジャーナル』118 1976 (p91～p93)に徳島考古学研究グループの見解が示された。

開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに係る現在の判断基準からみれば、本事業の発掘調査を要する範囲や記録保存のあり方に不備があったことは否めないが、批判対象となった県および調査関係者から報文への評言は行われなかった。

調査に関わった方々の多くが鬼籍に入れ、県が初めて大規模公共事業に直面し、教育委員会事務局・調査現場それぞれが対応を迫られた当時の状況を知る徳島県内の文化財関係者はほとんどいない。ことがら古すぎる憾みがあり、見解に答えるべき当事者もおられず、報文への評言にも今更の感もなはないが、調査成果を纏めるにあたって、これに触れておかなければ記述事項が将来にわたり事実となるおそれもある。調査に参加した立場から、県の保管文書に抛り、あえて指摘内容について言及した。ご賢察をお願いする次第である。

I 報文では州津遺跡の「調査は県教委の依頼により、同志社大学考古学研究室が当たった。が、結局、何一つの遺構も検出されないで終わった。」とある(p92)。

本文記載のように、発掘調査は事業所長と徳島県知事の間で委託契約がなされ<sup>1)</sup>、文化財保護法57条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届は県文化財保護審議会委員 秋山泰氏を調査主任とし、県教育長名で出され<sup>2)</sup>、同年6月25日に許可されている<sup>3)</sup>。

調査団方式を採り、実態は調査員と調査補助員、実測図作成のために参加した学生の編成であったが、調査補助員に県文化財調査員（非常勤特別職）を充て、事務局を県文化課に置くなど、県直営の調査であったことは瞭かである。調査に至る過程において、再三県とやり取りを行った方々が、そのあたりについて不明であったとは思えない。

遺構が検出されずに調査が終了した理由としては、「調査着手時点が遅く、工事が進行し、遺構面まで削り取られていた部分があったことと、また、一部分のグリッド調査で完了となったこと」を挙げている(p92)。調査概要では「発掘調査区域の南にあたる微高地の地表<sup>4)</sup>では土器細片の散布度が高く・・・(略)・・・州津遺跡の中心部と推定される。この度の調査区域は遺跡北西の周縁部外にあたると思われる。」と記している。

工事は幹線水路埋設部分に加え、工事用道路・掘削土仮置場を含む作業ヤードを確保する必要上、該当耕作地全筆の表土が除去されたため、州津遺跡では幹線水路埋設部外側についてもグリッドを設定し

ている。東州津遺跡でも当初、同様の手法が採られたようであり、それが報文の「12月に発掘調査が開始されたが全面ではなく、一部にグリッドを入れるという方法がとられた。それも、通過路線から離れた地点に入れたこともあって、農政局の担当官から「路線内を掘ってもらわねば困る」という指摘がなされたほどである。」という一文 (P92)に繋がったと思われる。

49年2月20日の県の概況調査以降、5月27日付の事業所との委託契約締結までの間の動きは現存資料では確認できないが、委託契約書添付の「業務実施要領」には発掘面積130㎡、2×5×0.8mのトレンチ13カ所を設定し、調査を行うことが定められている。当時の県文化課が、幹線水路埋設部の外側へのグリッドで遺構が検出された場合、調査面積の拡大の協議など、いかなる対応をするつもりであったかを伺うものはないが、工事の影響を受ける範囲についての確認措置は一応は採られていたと理解される<sup>5)</sup>。

幹線水路埋設部分に限って、全面調査を行う方針が決定されたのは50年度の調査からである<sup>6)</sup>。

Ⅱ 「調査担当者の姿勢が一貫して「遺構が出たら困る」であり、出るはずの遺構も出ないのでは、と疑念を抱かざるを得ないほどである。が、その願いも虚しく、この調査で初めて遺構が発見された」(p92)と批判された調査担当者とは誰を指すのか、現地に不在の発掘届出上の調査主任か、県から再三請われて火中の栗を拾った一調査員なのか、この一文では瞭かではないが、「同志社大学考古学研究室が当たった」とする前提からは、後者を示しているのであろう。

県は当初、東州津遺跡の調査をグリッド調査により12月16日着手、28日を予備日として、年内に終了させる計画であったようだから<sup>7)</sup>、調査面積が増大し、遺構の検出と図面作成等に手間取った段階で計画が破綻したことになるが、事業所と工程調整を行った記録はない。また調査現場とどのような調整を行ったかを伺う記録はみあたらない

50年2月後半の現場では事業所との最終引き渡し期日を2週間以上延伸し、大柿遺跡の調査と併行して最終の詰をしており、事業所の工務官や請負業者が連日のように来場し、厳しく急かしていた記憶がある。

報文では主語の不明や県と調査団の使い分けがみられるが、「調査団の目は大柿遺跡に向けられ、3月に入ると東州津遺跡の調査は終了となった。なにかが狂っていると思わざるを得ない調査であった」という一文は(p92)、調査員達に向けられたものであろう。現場では休日もなく、厳寒のなか暖をとる施設・設備もない過酷な状況のもと、決定された期間の中でも中間報告や現地説明会を行い、調査終盤では、大柿遺跡の調査も併行して進められていた。このことは周知の事実である。

報文のねらいは「わずかしが行われなかった発掘調査そのものは、徳島県の文化財保護の歩んできた姿を如実に示している」(p91)と書かれたように、県の埋蔵文化財保護の姿勢や取組への批判と在野研究者の保護活動の宣揚にあったと解されるので、調査を批判することよりも、県や事業所の埋蔵文化財保護・記録保存への認識を整理し、それに対する見解や提言を統合的に示すことが肝要であったのではないだろうか。

Ⅲ 「この遺跡の集落は谷を隔てた大柿遺跡であろうとの見解が最終記者会見で発表された。皮肉にも終了間際、住居址4基が発見され、現地説明会段階での「墓址群」という意義付けは虚しく消えた」(p92)と書かれた竪穴住居は、指摘のように現地説明会終了後の無遺物層確認のためのトレンチ掘り下げによ

り確認されたものである。

公式記録として認定すべき現地説明会資料<sup>8)</sup>では、「遺跡周辺の土取遺跡、大垣遺跡<sup>9)</sup>とは、時期が異なり、墓址群を形成した集団の生活址である集落、およびその拠ってたった生産基盤の解明が今後の課題である」(中略)と記されている。

1975年段階において徳島県の弥生土器様相は把握されていなかった。岡本健児氏による四国編年でも徳島県域は瞭かではなく、吉野川上流の後期土器断片をもとに上野Ⅰ・Ⅱ式が設定されたのみである<sup>10)</sup>。したがって土器編年上の不明については致し方ないところであるが、方形周溝墓と竪穴住居は同時期ではないので、意義付けが消えたことにはならないだろう。

なお、東州津遺跡の「検出された住居4」は住居2の、大柿遺跡の「住居址5」(p92)は住居状の落ち込み3の誤認ではないかと思われる。

Ⅳ 大柿遺跡において「発掘終了1ヶ月後現地を訪れると、打製石斧・土器がそのまま放置されていた」(p93)という点については、どのような状態でどの程度放置されていたのか、調査区内や遺構内にあったものか、耕作土の仮置あるいは掘削土に含まれた遺物を示すのか不明である。調査以前から調査区周辺の水田や農道には広範囲に土器や石器の散布がみられたが、少なくとも遺構面や遺構内に遺物が放置したことは、報文が掲載された時点において調査参加者に思いあたるところはない。調査員に確認する機会はなかったが、どうなのであろうか。

## 註

(1) 本文前掲

(2) 昭和49年5月31日付 教文第56号「埋蔵文化財発掘調査届出書」

(3) 昭和49年6月25日付 委保第5の917「埋蔵文化財の発掘について」(通知)

(4) 工事路線外の地点を指す。

(5) 委託契約書添付発掘調査詳細位置図及び州津遺跡発掘調査概要第2図の1TR、6TR、7TRが該当するとみられる。

(6) 『大柿遺跡発掘調査概報—吉野川北岸農業水利事業に伴う緊急発掘調査—』徳島県教育委員会 三好町教育委員会 吉野川北岸農業水利事業所 1976に記述。

(7) 吉野川北岸農業水利事業埋蔵文化財発掘調査(その2)業務実施要領「契約締結等通知書」添付資料他

(8) 「池田町東州津遺跡発掘調査現地説明会資料」1975.2.21 徳島県教育委員会(楠元哲夫調査員作成)

(9) 大柿遺跡は前年に工事中に確認され、昭和49・50年段階では大垣遺跡と表記し、前期後半の遺跡と認識されていた。

(10) 岡本健児「入門講座・弥生土器—四国1・2・3・4・5—」『考古学ジャーナル』88・89・90・92  
93・1973・1974



## 2 整理の経緯

前節に記載のように農林水産省所管の事業及び昭和 59 年以前に調査された出土遺物については、未整理である。現在においても国・県営ほ場整備事業については調査対象面積が限定されていることもあり、事業全体にわたる整理計画は未確立である。県では平成元(1989)年度に県単独事業として、吉野川北岸農業水利事業関係出土遺物の基礎整理業務(洗浄・注記)を発足後間もない財団法人徳島県埋蔵文化財センターに委託して実施したが、報告書の刊行が課題として残っている。

このため、県教育委員会では平成 21・22 年度に、国の緊急雇用創出事業により、報告書未刊行資料を中心に、再度出土品の基礎整理を行うとともに、出土品の展示・活用を目的として、出土文化財保存整備活用事業を計画した。東州津遺跡は県教育委員会が実施した最初の直営調査であるため、特に報告書刊行を含め事業化されたものである。

本遺跡については調査終了時において報告書作成の方向性が定まらず、そのため出土遺物の収納場所も確定しなかったようである。そのいきさつは不明であるが、出土遺物は埋蔵文化財事務担当であった立花博社会教育主事宅で保管された。調査終了後も調査員や調査参加者の幾人かが来徳し、遺物の洗浄を行っていたことを、筆者が県教育委員会に採用された昭和 53 年に立花氏からうかがったことがある。また、楠元哲夫氏も報告書の作成を気にかけておられ、予算措置の可否や刊行に向けての計画案をいくどか相談されたこともある。昭和 60 年に立花氏は退職されたが、遺物はそのまま立花宅で保管され、県との関係が断ち切れた状態になった。

筆者は平成元年に新設された財団法人徳島県埋蔵文化財センター派遣となり、平成 7 年に楠元氏、平成 8 年に立花氏が亡くなられてからは、遺物が注意されることは少なくなっていたが、15 年ぶりに県教育委員会に戻ったのを契機として、懸案であった本件の整理に努めた。平成 19 年 4 月に遺物の取扱いについて、立花氏のご家族と相談させていただくことができ、同年 8 月に県立埋蔵文化財総合センターに遺物を搬入した。そして今回の事業化により、報告書の作成となった。

長年にわたり遺物を保管いただき、また搬出について快諾いただいた立花家の方々に厚くお礼申し上げる次第である。

整理体制は以下のとおりである。

平成 21 年度

県教育委員会文化財課

課長 竹原紀幸

主幹 菅原康夫

副課長 西浦敏文

企画指導担当係長 山田正之

平成 22 年度

県教育委員会教育文化政策課

課長 竹原紀幸

副課長 山中久美子

課長補佐 石井伸夫

文化財企画担当係長 山田正之

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

専務理事兼所長 阿部修三

常務理事兼事務局長 近松克仁

総務課長 三好修基

総務係長 氏家敏之

事業課長 石井伸夫

整理係長 栗林誠治

公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

専務理事兼所長 平尾恭二

常務理事兼事務局長 菅原康夫

総務課長 三好修基

総務係長 氏家敏之

事業課長 藤川智之

整理係長 近藤 玲

### 3 調査日誌

12月16日(月) 晴

調査開始。昼過ぎより表面の整理作業。水路の中央線上に杭打ち。立花、森本、福家

12月17日(火)

楠元、石川現場へ。昼過、文化財専門委員会秋山先生現場へ。午前中、昨日に引き続き、表面の整備。整備後、遺構確認の精査を行うも検出されなかった。区域中央部に南北のトレンチ(東西3m×南北10m)を設定。第一層を取り除く作業にかかる。この土層中より弥生土器片(細片)多数出土。秋山、楠元、石川、立花、森本、福家 新聞社等の取材を受ける。

12月18日(水)

昨夜末より雨。コンディション悪く作業中止。

12月19日(木) 曇

昨日の雨水を排出する為、現場南方に排水路を掘る。昨日に引き続き、No.1トレンチ内の作業を続行。No.1トレンチの北隅を80cm程下げる。楠元、石川、立花、森本、福家

12月20日(金) 曇時々晴

寒い1日。No.1トレンチ内の作業を続行。遺構と思わしきものは確認されず。排水路の壁に検出されたピットのセクション図とNo.1トレンチ北壁セクション図を作成。楠元、立花、石川、森本、福家

12月21日(土)

昨日設定したNo.2、No.4トレンチの作業。午後No.3を設けていづれも第3層まで下げる。考古学研究グループ(天羽、岡山)見学。

12月22日(日)

No.4トレンチ内の作業。色黒の礫層を掘り下げるが、地山と思える褐色土層まで到らず。昼過ぎ、立花先生現場着。佐藤組関係者と打ち合わせ。(森本、石川休み)

12月23日(月)

No.1トレンチを1/500の地図中のおとし、平面図も作成。又、No.1トレンチ東壁セクション図作成。10時 石川現場帰着。本日より表土削除。No.4トレン

チは地山と思える層に到達。

12月24日(火)

早朝、折目主任と息子さん来る。午前中、No.3、No.4を掘り下げて、No.4は終了。引き続きNo.5、No.6、No.7を設定。No.5を掘り下げるも砂利層が厚い為、とりあえず中断しNo.7トレンチに移る。今日、No.1トレンチを設けた地点のすぐ横にて、ブル作業中、土器片多数出土。

12月25日(水) 晴時々曇

No.5、6、7トレンチ精査継続。No.7トレンチでは第三層の黄褐色にピットがいくつか入りこまれている。第三層のピット群とする。実測完了。1/500図のNo.2～No.7トレンチを入れる。

12月26日(木) うす曇のち晴

午前中No.2～No.4トレンチの東、南壁に水系を張る。No.5トレンチの掘り下げ。

12月27日(金) 晴

工事作業中のブルが焼土遺構をひっかける。トレンチNo.1の南東である。焼土面は赤褐色に焼け、炭化物がびっしり入っている。下半がすでに削りとられているが、一辺約1mほどのプランを呈するものか。掘り下げ、写真撮影、実測、完了。No.5、No.7トレンチ掘り下げ。No.3トレンチ東、南壁実測。

12月28日(土) 雨

雨のため、作業はとりやめ。器材を小屋に格納。

1月5日(日)

夜、みどりのセンターに集合。(楠元、福家)

1月6日(月)

調査再開。No.2、No.4トレンチの東、南壁セクション図の作成。昼、立花先生来る。又、少し遅れて森本氏も到着。午後、北岸用水事業所の工務官現場視察。今後の打ち合わせ。No.5、No.7トレンチのセクション図、考古学研究グループ見学。

1月7日(火) 晴後一時雨

No.4トレンチのセクション図作成及び各トレンチの写真をとる。午後、No.8トレンチをさらに東側の田

に設定。(4 × 4 m) 佐藤組と打ち合わせ。四国放送 etc. の記者、現場へ。

1月8日(水) 雨時々

昨夜未よりの雨にてコンディション悪く作業中止。

1月9日(木) 晴

午前中No.8トレンチ内の作業。土器の極細片を多数含む黒色土層の上面まで下げる。午後、ユンボにて、焼土層確認の為にトレンチを掘り下げる。午後遅く調査区域の西側の第二次調査予定地域内がブルによって掘り下げられているのを見つける。発見時までかなりの面積が荒され、事態の重大さに驚く。早速、関係者に申し入れると共に夜、立花先生に連絡を取る。

1月10日(金) 晴れ、後曇一時雪

昨日に続いて、No.9トレンチ内の作業。黒褐色土層を取り除く作業を行うが、この層は攪乱されているものと思え、この下層に遺構検出の可能性のある模様。

1月11日(土) 曇時々雪

No.9トレンチ内の作業。炭層上面が確認されるころまで全面にわたって掘り下げる。午後、明日の図作成に備えて断面整備。後、No.8トレンチに再びかかり、土器片を多数含む層を更に掘り下げる。今日は雪の舞う寒い1日であった。明日、同大学生一名来るとの事。楠元、森本、福家

1月12日(日) 雪後曇

朝5センチ程の積雪。午前中、No.8、No.9トレンチ及び最上部の除雪作業。午後No.9トレンチのセクション図作成。これに並行してNo.10、11トレンチを設定し、No.10の第1層(砂利層)を掘り下げる。今日は積雪の為もあり、作業が能率的に進められないので、午後3時前に作業を切り上げる。楠元、森本、福家、吉川

1月13日(月) 曇時々雪

No.9トレンチ第Ⅱ焼土遺構を露出する為、あぜを取り除く作業。又、1/500 図中に位置をおとす。午後炭層を掘り下げ、意外に薄く、土器片もほとんどなし。炭層中より出土した土器片は奈良時代のものと思え、

第Ⅱ焼土遺構は弥生のものでない可能性もありそうである。

No.10トレンチ内は、砂利層を引き続き掘り、桑畑当時の耕土面と思えるところまで掘る。

今日も雪の舞う寒い1日であった。夜、今後の作業の打ち合わせ。楠元、吉川、森本、福家

1月14日(火) 晴

No.8、No.10トレンチ内の作業を続行。No.8は多数の土器細片を含む層の下層に到達。No.8内の土器片は奈良期、弥生と様々。本日、No.9内の焼土遺構実測完了。No.10もまだ粘土層には到らない為、明日も続けて下げる必要あり。10時過ぎ、石川到着。4時前、楠元氏、神戸へ一時帰る。三好中学校よりツル1本、スコップ3本借り受ける。楠元、石川、吉川、森本、福家

1月15日(水) 晴後曇

No.9トレンチ終了。焼土遺構を取り除いた時、性格不明のピット検出さる。焼土遺構の平面図に入れる。無遺物層まで掘り進んだので、No.9トレンチの所は工事側へ渡す事になる。石川、立花、吉川、森本、福家

1月16日(木) 雨

昨夜の雨にて作業休み。石川、吉川、福家徳島へ。森本留守番。

1月17日(金) 雨後雪

朝、雨が降っていたが、現場へ。昼前、意に反して雨が激しくなり作業続行を断念。今日の作業 No.10、11内の作業。No.10は層が変化したところでおき、No.11は10cm程掘り下げる。午後、掘削に立ち会う。夕方、門田到着。石川、吉川、森本、福家

1月18日(土) 雪時々曇

10センチ余りの積雪のうえ、降雪止まない為、中止。

1月19日(日) 曇時々雪

昨日の積雪がそのまま残っているが、天候が少し良くなったので、作業にかかる。No.11内の作業が中心となる。午前中は、大部分雪かきに費やす。

1月20日(月) 曇時々晴

No.8、No.10、No.11の作業。No.8は相変わらず砂利

層の為、ユンボを使用し、3 m近く掘り下げる。No. 10 は東、南壁の線引きを終え、明日セクション図を作成する予定。No. 11 も 1 m掘り下げる。

1月21日(火) 晴

No. 8 壁面の整備。No. 10 終了。No. 11 東南壁セクション図の作成。

1月22日(水) 雨

一日中雨にて作業休む。昼、慰労会。

1月23日(木) 曇後晴

午前中、No. 11 の写真撮影とNo. 8 の南壁セクション図、写真撮影及び全景写真を撮って、E 地区内の作業を全て終了。これに並行して、W 地区の整備作業。水が随分たまっているのので、ポンプを借りてきて、水抜きを行う。今日の作業は泥まみれとなる。課長、生野班長、立花先生来る。夕方、石川先生帰宅。

1月24日(金) 晴

W 地区内の整備作業 2 日目。比較的新しい土壌を掘り下げる。これは壁土を取ったものか。

1月25日(土) 曇

W- II 地区の精査。

多数のピットと思われる遺構を検出するが、現段階では性格不明。天候悪化を予想し、午前中で作業を打ち切る。

1月26日(日) 晴後曇

調査開始以来初めての日曜休日。楠元、吉川、門田、福家は遺跡見学。

1月27日(月) 晴後曇

W- III、IV 区の整備作業。両区とも床上下の黒褐色土層まで掘り下げるが、この面では遺構の確認はできず。W- IV 区内の炭化物と石を併なうのは、遺構かどうか、が課題。

1月28日(火) 雨時々雪

曇天の下、作業開始。しかしながら、間もなく雨が降り出し、地面が著しく濡れて、泥んこの状態となり、作業困難と判断し中止。午後、石川先生、森本、福家帰宅。

1月29日(水) 晴

W- II 地区の精査と W- IV 地区の焼土遺構(?)の実測。

W- II 地区には、土器の出土がない。

午後、焼土と石は取り除く。

1月30日(木) 曇

W- II 地区の精査と W- IV 地区の土器群の露出作業。

W- IV 地区より数個体分の土器出土。溝状に置かれた状態であり、何らかの遺構に併なうものか。土器は第V様式のものと思われる。吉川帰宅。

1月31日(金) 快晴

昨日に引き続いて W- III 地区の整備と W- IV 地区の土器群の露出作業。昨日までのところ、溝状に規則正しく土器が出土していたので、その延長を図るが溝状に出土しないことが判明し、事態の理解に苦しむ。特に、明確に意味づけできる遺構も全く検出されないので、今後、十分な検討が必要。

2月1日(土) 雨

早朝より雨。午前 10 時過ぎまで断面整備と、W- IV 地区の精査を行うも雨足募り、止むなく作業中止。

2月2日(日) 雨

昨日末の雨止まず、時折雪となる悪天候。現場一帯は水びたしとなっており、明日も順調な作業は不可能となってしまった。

2月3日(月) 曇時々雨

昨日の雨で、仕事不可能。午前中、楠元、石川、福家で排水作業。午後、加藤監督官と現場事務所と打ち合わせ。今年度中の掘削を I P 6 より 45 m の地点まで延ばすとの事。石川帰宅。

2月4日(火) 雨時々曇

今日も雨。9 時頃、現場へ行くが、昨日の雨の排水作業が無駄になってしまった。加藤氏と立会いの予定であったが、雨の為に中止。森本氏、吉川、門田来る。立花先生とは会えず。

2月5日(水) 曇

午前中、排水作業を行い、午後は W- III 区の土坑を掘り下げて、写真まで終了。又、W- IV 区の北隅の一部を下げて地層を観察するが、黒褐色土層の下、黄褐色土層中にも土器が包含されている事がわかり今後の課題となる。福家、夕方帰宅。同大生 3 名(岡田、菅原、岩崎)来る。立花先生、現場へ。



2月7日(金) 曇

作業休む。午後、排水作業。

2月8日(土) 曇後晴

午前中、排出作業。W-IV区の土器群及びW-Ⅲ区の土坑の図作成。土坑は終了。W-I、Ⅱ区の精査をひきつづいて行い、ピットを検出。W-I区内のピット内より灯明皿出土。

2月9日(日) 晴

昨日に続きW-IV区の土器群の図作成及び写真、完了。W-Ⅱ、Ⅲ区の精査、W-Ⅲ区ではピット及び土坑を掘り下げる。又、これに平行してⅡ、Ⅲ区内のやり方を組む。石川来る。

2月10日(月) 晴

W-I区のピット群の図作成。W-Ⅲ区の精査、長方形の土坑1、ピット若干数、焼土遺構を検出。午後、現場にて、中間報告会。新聞社、池田町教委、北岸用水関係者及び、文化課長、立花先生臨席。

2月11日(火) 晴

W-I区のピット群の図作成。(昨日に続き) W-Ⅲ区の焼土遺構を掘り、写真撮影。

W-IV区の土器取り上げ、又、W-IV区西半を少し下げて精査。明日も続行の予定。

2月13日(木) 晴

楠元、石川、吉川、門田、岩崎、菅原、岡田、森本、福家 W-Ⅲ、Ⅳ区の図完了。W-IV区内の散布土器、写真了、取り上げ。W-Ⅱ区の溝状遺構の内、南北分のみ掘り了。土坑の畔観察の後、畔削除。又、一部土坑の拡張。W-Ⅱ区の溝の中からは、高杯脚部、口縁端に凹線文を施した土器口縁部、ほぼ原型をとどめる壺 etc. を検出。

2月14日(金) 曇後雨

楠元、石川、吉川、門田、岩崎、岡田、菅原、森本、福家 W-Ⅱ区 溝状遺構、東西部分の一部を掘る。土器、多数出土。W-Ⅲ区の土取り土坑内の清掃、及び、各断面の線引き。

午後、雨にて作業を中止。夕方より雪が激しく降る。

2月15日(土) 曇時々雪

作業中止。

2月16日(日) 曇後晴

東州津地区の排水作業。後昼間地区にて、マキ集めと、仮小屋の建設。

2月17日(月) 曇時々雪

楠元、石川、吉川、門田、岩崎、岡田、菅原、森本、福家 W-Ⅱ、Ⅲ区に連なる溝状遺構を更に掘り進める。各断面図の作成(西壁、南壁)一部完了。昼間地区、作業なし。溝状遺構は、更に東へ伸びて、Ⅲ区のほぼ中央で、南北に連なる溝となる。土層の見分けがかなり困難なので、テスト・トレンチを2.3設定。溝中より多数の土器出土。中には全く完璧のもの、数個、大型の壺形土器なども見られる。尚、今日の作業段階で、この溝状遺構を方形周溝墓とみなして、今後調査を進める事となる。

2月18日(火) 晴

W-Ⅱ区 周溝の土器図作成(吉川、岩崎、菅原)。  
W-Ⅲ区 周溝の延長(福家)各断面図の作成。(森本、門田) 昼間大垣の立会い(石川、岡田)。上記図作成は、明日も引き続いて行う。周溝は、Ⅲ区内でわずかに曲折の気配を見せながらも、南北方向へ延長しておらず、途切れたものと、判断せざるを得ない。立花先生来る。

2月19日(水) 曇時々雨又は雪

W-Ⅱ、Ⅲ区周溝の土器図完成(吉川、岩崎、菅原)。試験的に掘った箇所を埋め戻し(門田、岡田、福家)。大垣の立会い(石川、森本)。今日は作業員さんの仕事もあまりなく、目下の所、図の完成待ち、といったところ。立花先生来る。石川帰る。

2月20日(木) 曇後晴 夜雪

昨夜の雨により、現場のコンディション悪く、作業が若干予定より遅れてしまう。午前中、排水作業。排水の後、周溝内の土器レベルを記入。午後、W地区全域を清掃後、地区別、全景の写真撮影。大垣立会い(森本)夜、明日の説明会資料作り。

2月21日(金) 雪

現地説明会(於公民館、現場)(参加者)文化課長、青木係長、立花先生(県関係者)秋山先生、石川、楠元(調査員)天羽氏、北川氏(考古学研究グルー

プ) 池田町教委、文化財保護委員、報道陣、調査補助員など。

2月22日(土) 曇時々雪

今日も作業中止。排水のみを行う。東州津地区の調査も大詰めの段階となっているが、2日間のロスの為、気分的にも重苦しい。

2月23日(日) 曇後晴

雪はほとんど消えていないが、作業が遅れている関係上、作業を再開。まず、排水を行い、土器取り上げと、W-IV区の掘り下げを行う。土器の取り上げは、翌日も続行。W-IV区は10cm程下げる。考古学研究グループ(小林、岡山氏)見学。

2月24日(月) 晴

久し振りの快晴。昨日に引き続き、周溝内の土器取り上げ作業。埋まっている土器数、予想外に多く、完了する事ができなかった。又、W-IV区の掘り下げ作業の結果、W-III、IV区にかけて、住居跡と思わしき掘り込みを確認し、明日の作業終了を延期せざるを得なくなった。同大生他1名見学。

2月25日(火) 晴

周溝内の土器取り上げ。午後2時頃全て完了。周溝内の2箇所 - 埋葬の可能性のある個所 - を作図。W-IV区の住居跡にかかる。

2月26日(水) 晴

周溝全て完了。住居跡の一部を床面直上まで下げ、W-III、IV区を画する畦を取り払う。楠元、福家、穴喰へ。<sup>1)</sup>

2月27日(木)

住居跡の内W-III区分を床面直上まで下げる。

2月28日(金)

住居跡の検出作業を続行。床面の検出。意外に深く60数cmまで下がる。森先生、課長現場へ。記者取材。

3月1日(土)

床面を整備し、柱穴検出。(4個)及び、周溝検出。畦の断面図を作成後、取り払い中央の炉跡検出。土器取り上げ後、全景写真撮影。本日で調査完了の予定であったが、新たに周溝内に於いて、住居跡と思しき遺構の一面を検出。この遺構については、後日

の作業にする。

3月9日(日) 晴後曇

夜、調査再開に備え、宿舎へ集合(楠元、森本、岩崎、門田、菅原)。

3月10日(月) 曇

SI-01の作図。SI-02の検出にかかる。昼から、大垣へ森本氏行く。福家、吉川現場へ。

3月11日(火) 晴

SI-02の床面をほぼ検出。午前中SI-01清掃後、写真撮影。又、W-I区、II区に於いて土坑検出。

3月12日(水) 晴

SI-02内の作業

・床面・柱穴・周溝の検出・畦断面図(西壁)作成・住居跡内の溝状遺構(性格不明)の写真、図完了・畦を取り除く・大垣班 遺構検出作業。

3月13日(木) 晴

SI-02の実測及び南壁断面図作成完了。全景撮影後、住居跡検出等の追加があった為、再度、全景写真の撮影。今日の作業にて東州津の調査完了。午後、楠元氏大垣へ、後の者、宿舎変更。東州津の出土遺物を池田公民館へ運ぶ。立花先生来る。

3月14日(金) 晴後曇

大垣、調査区域の整備。調査区域は便宜上、次の様に区別。

3月15日(土) 晴

A地区の整備に続いて、B、C地区の整備完了。目下の所、南北に走る溝、二条、大小の土坑、及び多数のピットが検出される。午後遅く楠元氏帰宅。本日、文化庁の水野正好技官、発掘現場視察、課長、折目主任、青木係長、立花先生同行。

3月16日(日) 晴

休養日として作業休み。門田、岩崎、菅原氏等、徳島県博物館その他を見学。

3月17日(月) 晴

今日からA地区内の遺構を掘り始める。溝状遺構は約20センチ程下がって、砂層となる。水の流れによる堆積か。土が極めて堅く掘る作業ははかどらず。

3月18日(火) 晴

昨日に引き続き遺構を掘る作業。土坑は非常に浅いものから1m余も下がるものもある。

遺物は、土器片及び石器の剥片、石鏃。

3月19日(水) 曇

昨日と同様の作業。土坑より骨片検出。或いは土壌墓か。A地区は大部分掘了。しかしながら、全ての遺構をほりきってしまうまでは、まだ2日程必要か。

岩崎、吉川、門田一時帰京。楠元氏現場帰着。立花先生来る。

3月20日(木) 雨時々曇

雨の為、作業中止。

3月21日(金) 曇

天候状態悪い上に、現場のコンディションも昨日の雨の為、悪いので作業中止。午前中、我々だけで排水作業を行い、明日に備える。

3月22日(土) 晴

作業員さんには引き続き、土坑を掘ってもらい、我々はトラバース組み始める。レベルの基準点がなかなかわからず、午前中はレベル捜しに費やす。A地区の遺構の大半はほぼ掘了。最大の土坑と、非常に深い長方形土坑を残すのみ。今日よりC地区にもかかる。C地区内の深さ25cm程の土坑には、比較的上器片多く、明日写真を取る事にする。夜、岩崎、門田、現場帰着。

3月23日(日) 薄曇

昨日同様トラバース組と遺構掘り。トラバースは、4m間隔に全域に渡り組み、今日で完了。掘る作業はA地区最大の土坑と、深い長方形土坑が、明日に残り、C地区は大半完了。D地区の溝を始める。尚、岩崎、門田氏は、各遺構の断面検討。写真、図作成にあたる。考古学研究グループ見学。夜、吉川氏到着。

3月24日(月) 晴

A区 各遺構の断面検討。写真及び図の作成後、畦を払う。SD-01 一砂の推積層を取り除き底を出す。最大の土坑は、今日も掘了には至らず。A区北東部のSD-01と切り合う深い土坑は、東側に二段の階段が見られる。畦の断面図、写真完了。C区 土坑、全て終了。D区 SD-02 掘了。D区東側の石群、写

真撮影。今日、全ての遺構掘了。

3月25日(火) 曇

A区 土坑の断面図、写真完了。畦の取りはずし。SD-01:砂層(2~3cm程)を掘り底面検出。壁面を整備し、線引き、レベルを落とす。D区 SD-02 断面検討用畦の図作成(2ヶ所)立花先生現場へ。

3月26日(水) 晴時々曇

A区 土坑(P26)内の土器取り上げ。最大の土坑の清掃。各土坑の写真完了。C区 実測及び写真完了。D区 実測完了。遠景写真(東州津、大垣)撮影。立花先生、現場へ。

註

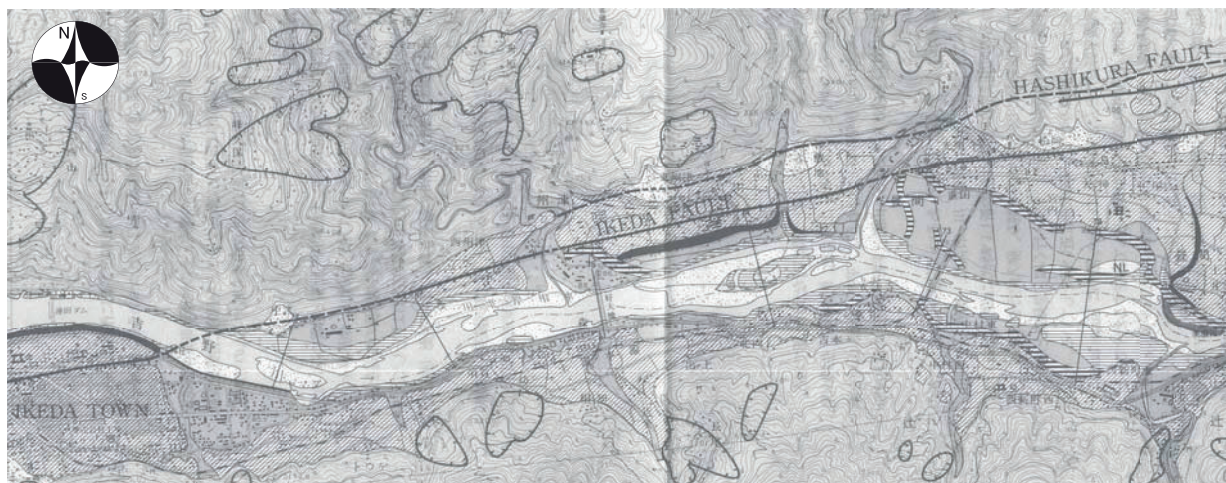
- 1) 県教育委員会の要請で、穴喰古墳の移築に伴い、石室残欠の測量調査に出向いたもの。

## Ⅱ 遺跡の立地と環境



# 1 地理的環境

東州津遺跡が所在する三好市池田町は、徳島県では北西端部に位置している。東州津遺跡が立地する吉野川左岸の段丘は、地質学的には、中生代の白亜紀（およそ1億4,500万年前～6,500万年前）に形成された和泉帯（和泉層群）であり、砂岩と泥岩で構成されている。この和泉帯と南側で接し、広域変成作用により形成された結晶片岩で構成される三波川帯が存在し、この二帯の間を縫うように日本有数の流域面積を誇る吉野川が西から東へと流れている。吉野川は、四国山地の愛媛県と高知県境にある瓶ヶ森（標高1,896m）に源流があり、ここから東流して高知県長岡郡大豊町で北に向きを変え、徳島県三好市池田町に至る。池田町で前述したように東流して、紀伊水道へと注ぎ込んでいる。吉野川の流域面積は3750km<sup>2</sup>、流路総長194kmを測り、地理学的には、源流の瓶ヶ森から池田町までを上流域、池田町から阿波市阿波町岩津までを中流域、岩津から徳島市河口までを下流域として区分している。東州津遺跡は、吉野川上流域と中流域の境目にあたる河口から約75km西の北岸（左岸）、標高80～90mの低位段丘上に位置している。東州津遺跡のすぐ北側約200mには池田断層が、約500mには箸蔵断層が東西に走っている。



第1図 東州津遺跡周辺地形分類図〔大矢雅彦他1995〕

# 2 歴史的環境

三好市池田町で、現在までのところ76カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。旧石器時代の包蔵地は5カ所である。サヌカイト製のナイフ形石器等が採集されている。続く縄文時代の遺跡は山田(I)遺跡が、四国縦貫自動車動建設に伴う発掘調査で確認されている。岩陰遺跡であり、山形の波状口縁部をもつ深鉢片や爪形文を付けた深鉢片やサヌカイト製石鏃、結晶片岩製敲石・磨石などが見つかっており、縄文時代早期末から前期初頭と考えられる。

弥生時代の包蔵地は9カ所見つかっており、そのうちウエノ遺跡（上野遺跡）は、上野台地上に所在する。現在では、徳島県立池田高校や徳島県警池田警察署が建ち並んでいるが、大正時代に池田高校の前身である旧制池田中学校の建設に伴い縄文土器や弥生土器が出土し、古くから埋蔵文化財の包蔵地として知られていた。このウエノ遺跡は、池田警察署建て替え工事に伴う平成6～7年度の発掘調査で、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の竪穴住居が8棟見つかった。

また、平成10～14年度にかけて、一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が、

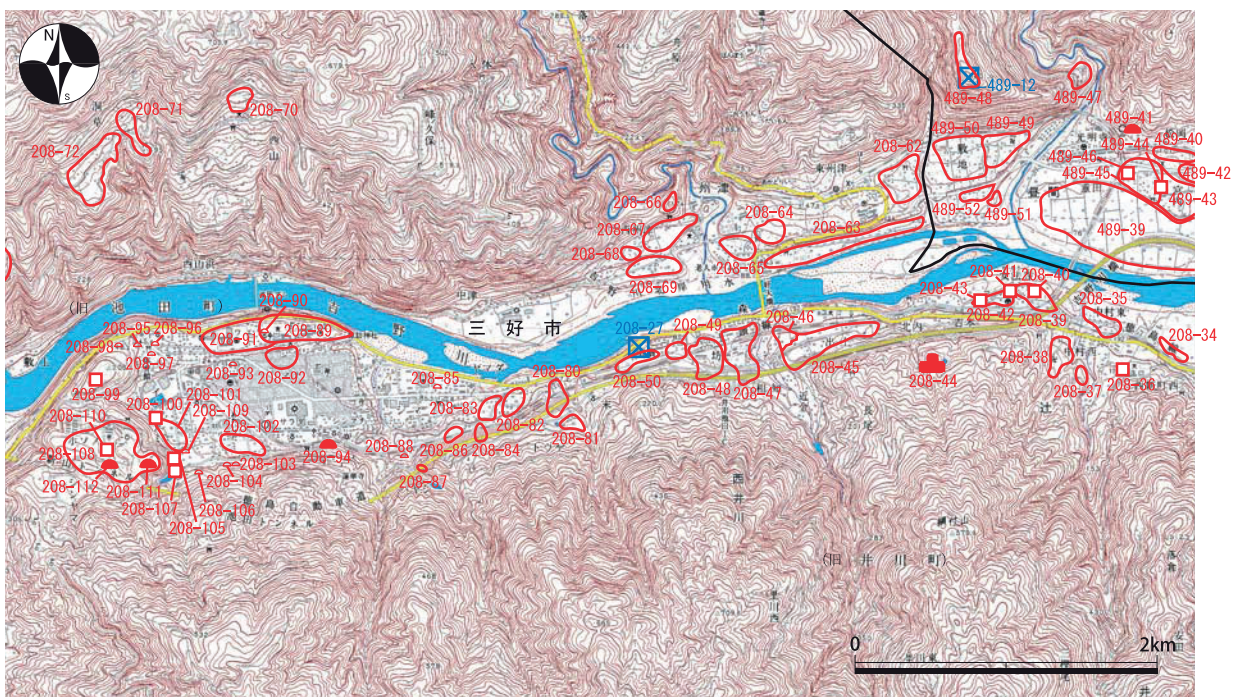


東州津遺跡と西州津遺跡部分において行われた。この発掘調査地点は、今回報告する昭和 49 年度吉野川北岸水利事業関係で発掘調査された東州津遺跡の W 区調査地点から、直線距離にして 900m 西に位置している。この 5 ヶ年度にわたる調査では、縄文時代、弥生時代、中世の遺構と遺物が確認されている。平成 11・12 年度の調査地点の溝 SD1002 から深鉢片が、土坑 SK2002 からは、サヌカイト製石器と土器片が出土しており、縄文時代晩期の遺物である。この SD1002 は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の区画溝と考えられ、多量の土器片が出土している。また、鎌倉時代の土坑や柱穴が見つかり、包含層からではあるが西村窯系の須恵器椀片が数多く見つかり、

一方、西州津遺跡では、縄文時代晩期の土器片が包含層中から見つかり、東州津遺跡と同じく西州津遺跡も縄文時代晩期から人々の生活痕跡が認められる。続く弥生時代には、中期後半の竪穴住居が 1 棟確認されている。古墳時代、古代の明確な遺構と遺物は確認されていないが、中世の土壌墓が 90 基見つかり、12 世紀から 16 世紀にわたる土壌墓の変遷を考える上で重要な遺構である。

この西州津遺跡は、最近も平成 21・22 年度にかけて一般国道 32 号改良工事関連事業により、前述した調査地点から北側の中位段丘面を発掘調査している。縄文時代晩期前半の堅果類（ドングリ）を貯蔵した貯蔵穴が 32 基確認されている。30 基以上の貯蔵穴群の発見は四国で初めてである。また、縄文時代晩期の河川からは、石英製石鎌が見つかり、弥生時代の磨製石斧や土器片などの遺物は確認されているが、明確な遺構は見つからない。なお、今までの調査で確認されていなかった 9～10 世紀の平安時代の河川から須恵器や土師器片などの遺物が比較的まとまって出土している。

池田町内では古墳時代の包蔵地は 2 カ所、古代の包蔵地は 3 カ所程度と非常に少ないが、中世の包蔵地は 71 カ所確認されており、鎌倉時代以降の遺跡数が多い。西州津遺跡の段丘背後にある小山は、州津城に比定されており、『阿波誌』に「州津谷西、小山の上にある。其麓に千尋祠あり。」との記載があり、その祠は現在の千尋衣神社を指すものと考えられる。『日本城郭大系』によれば、州津城は南北朝期に小笠原氏により築城されたとも推定されている。



第 2 図 東州津遺跡周辺歴史的環境図

市町村 記号	新番号	遺跡名	種類	年代	主な遺構	主な遺物
208	34		散布地	中世		須恵器、土師器、陶器
208	35		散布地	中世		須恵器、土師器、陶器
208	36	安養寺経塚	経塚	中世		銅製経筒、銅鏡（梅花蝶鳥鏡）
208	37	中村	散布地	旧石器		
208	38		散布地	旧石器、中世		須恵器、土師器、陶器
208	39	女法寺	集落、寺院	古代、中世		須恵器、土師器、陶器、磁器
208	40	女法寺経塚	経塚	中世		銅製経筒、銅鏡（菊花双鳥鏡）
208	41		墳墓	中世		
208	42		散布地	弥生、中世		土師器、陶器、サヌカイト
208	43		墳墓	中世		
208	44	山下城跡	城館	中世		
208	45	井出上	集落	弥生、中世	竪穴住居	弥生土器、土師器、サヌカイト
208	46		散布地	中世		須恵器、土師器、陶器
208	47	相知	集落	弥生、古代、中世	竪穴住居、掘立柱建物	弥生土器、弥生石器、須恵器、土師器、石帯
208	48	相知	集落	弥生、古代、中世	竪穴住居、掘立柱建物	弥生土器、弥生石器、須恵器、土師器、石帯
208	49	坊	集落	中世	掘立柱建物、土坑	土師器、陶器、磁器
208	50	須賀	集落	中世	掘立柱建物、土坑	土師器、陶器、磁器
208	62		散布地	古代、中世		須恵器、土師器、陶器
208	63	東州津	集落	弥生、中世	方形周溝墓、竪穴住居、土坑、溝状遺構	弥生土器、陶器、土師器、磁器
208	64		散布地	弥生、中世		弥生土器、陶器、土師器、磁器
208	65	東州津	集落	中世		土師器、陶器、磁器
208	66	州津城跡	城館	中世		
208	67		散布地	弥生、中世		土師器、陶器、サヌカイト
208	68		散布地	中世		土師器、陶器
208	69	西州津	集落	弥生、古代、中世	竪穴住居、掘立柱建物、土坑、埋葬（土壙墓）、自然流路	弥生土器、須恵器、土師器、磁器
208	70		散布地	中世		土師器、陶器
208	71		散布地	旧石器、中世		須恵器、土師器、サヌカイト
208	72		散布地	旧石器、古代、中世		須恵器、土師器、陶器、サヌカイト
208	80	トウゲⅠ	集落、墳墓	中世	埋葬（集石墓）	土師器、陶器、磁器
208	81	トウゲⅡ	墳墓	中世、近世	埋葬（集石墓）	土師器、陶器、磁器
208	82	トウゲⅢ	墳墓	中世、近世	埋葬（集石墓）	土師器、陶器、磁器
208	83	山田古墓	墳墓	中世、近世	埋葬（集石墓）	土師器、陶器、磁器
208	84	供養地	墳墓	中世、近世	埋葬（集石墓）	土師器、陶器、磁器
208	85	シマ古墓	墳墓	中世		
208	86	山田（Ⅱ）	集落、墳墓	中世	埋葬（集石墓）	土師器、陶器、磁器
208	87	山田（Ⅰ）	岩陰	縄文		縄文土器、石器
208	88	比丘尼塚古墓	墳墓	中世		
208	89	大西城跡	城館	中世		
208	90	姫塚古墓	墳墓	中世		
208	91	ウエノ	集落	弥生	竪穴住居、土坑	弥生土器、弥生石器
208	92	マチ	集落	弥生、中世	竪穴住居、土坑	弥生土器、弥生石器、土師器、陶器
208	93	矢塚古墓	墳墓	中世		

第1表 東州津遺跡周辺埋蔵文化財包蔵地一覧表（1）

市町村 記号	新番号	遺跡名	種類	年代	主な遺構	主な遺物
208	94	荒神さん古墓	墳墓	中世		
208	95	上野古墓	墳墓	中世		
208	96	上野塚古墓	墳墓	中世		
208	97	丸山塚古墓	墳墓	中世		
208	98	長塚古墓	墳墓	中世		
208	99	お塚さん古墓	墳墓	中世		
208	100	宝蔵寺跡	寺院	中世		
208	101		寺院、散布地	弥生、古墳、中世		須恵器、土師器、陶器、磁器、サヌカイト
208	102		散布地	中世		土師器、陶器、磁器
208	103	山伏塚2号墳	墳墓	中世		
208	104	山伏塚1号墳	墳墓	中世		
208	105	宝蔵寺経塚	経塚	中世		銅鏡（秋草双雀鏡、松嶋鶴鏡）、銅製経筒
208	106	池南塚古墓	墳墓	中世		
208	107	山伏塚寺跡	寺院	中世		
208	108		散布地	弥生、古墳、中世		須恵器、土師器、陶器
208	109	山伏塚古墓	墳墓	中世		
208	110	妙蓮寺跡	寺院	中世		
208	111	宝蔵寺塚古墓	墳墓	中世		
208	112	新山古墓	墳墓	中世		
208	27	須賀古墳	古墳	古墳		
489	39	大柿	集落、生産	縄文～中世	水田、竪穴住居、土師器焼成土坑	縄文土器、弥生土器、須恵器、磁器
489	40		散布地	古代、中世		須恵器、土師器、陶器
489	41	坪井谷山上古墳	古墳	古墳	古墳（円墳）	
489	42		散布地	中世		須恵器、土師器、磁器
489	43	昼間（京伝地区）	集落	弥生、古代、中世	竪穴住居、土坑	弥生土器、弥生石器
489	44	立法寺跡	寺院	古代		瓦
489	45		散布地	古代、中世		須恵器、土師器、磁器
489	46	光明寺跡	寺院	古代		
489	47	土取	集落	旧石器、弥生	竪穴住居	旧石器（ナイフ形石器、サヌカイト剥片）、弥生土器、弥生石器（石鏃）、鉄器（鉄鏃）
489	48	東山城跡	散布地	中世		
489	49		散布地	弥生、古代、中世		須恵器、土師器、陶器、磁器、サヌカイト
489	50		散布地	弥生、中世		須恵器、土師器、磁器
489	51	田ノ岡城跡	城館	中世		
489	52		散布地	中世		須恵器、土師器、陶器、磁器
489	12	東山城跡	城館	中世		

第2表 東州津遺跡周辺埋蔵文化財包蔵地一覧表（2）

（参考文献）

猪木幸男・服部仁 1991 『日本地質図大系 中国・四国地方』朝倉書店

大矢雅彦他 1995 『吉野川水害地形分類図』建設省徳島工事事務所

湯浅良幸他 1979 『日本城郭大系 第15巻 香川・徳島・高知』新人物往来社



### 3 既往の調査

今回報告する東州津遺跡は、昭和49年（1974年）12月16日調査開始、昭和50年（1975年）3月13日調査終了したE・W区の調査区に関するものである。なお、日誌にあるA・B・C・D区は、大柿遺跡の調査区である。以下では、調査区位置図と調査地点内容の一覧表を掲げる。なお、位置図上の調査区に付している番号は、徳島県遺跡地図システムの管理コード番号と同じである。



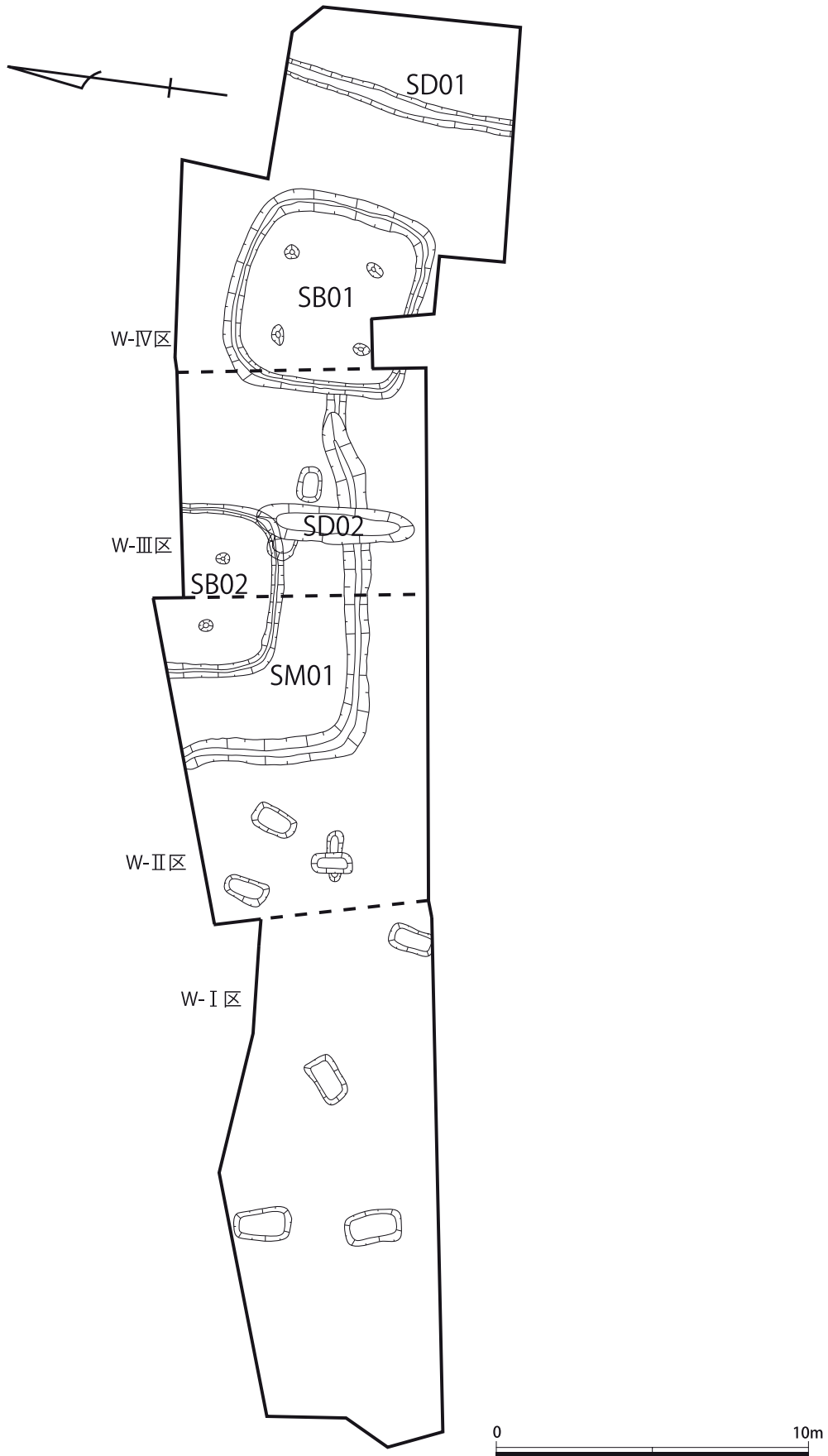
第3図 東州津・西州津遺跡既往調査地点

管理コード	年度	住所1	住所2	調査歴	調査主体	調査担当者	本報告書編集・執筆者	刊行本報告書タイトル	発行機関	報告書刊行年	参考文献	種類
768	1974	州津	雛田	発掘調査	徳島県教育委員会文化課	藤野井親仁 滝下忠夫 森浩一 秋山泰 楠元哲夫 石川重平 森本嘉訓 福家清司		本報告書	公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	2011	徳島県教育委員会文化課『池田町東州津遺跡発掘調査現地説明会資料』 徳島県教育委員会文化課 1974. 立花博『池田町史上巻』徳島県三好郡池田町 1983	集落・墳墓
778	1974	州津	堂面223他	発掘調査	徳島県教育委員会文化課						徳島県教育委員会・中四国農政局吉野川北岸水利事業所『吉野川北岸水利事業関係埋蔵文化財発掘調査報告1 州津遺跡発掘調査概要』徳島県教育委員会・中四国農政局吉野川北岸水利事業所 1974	遺物包含層
836	1999	州津	西ノ久保341-1他	試掘調査	財団法人徳島県埋蔵文化財センター	島田豊彰 妹尾健司						遺物包含層
1062	1998	州津	乳の木1256-1他	試掘調査	財団法人徳島県埋蔵文化財センター	佐野耕市 相原聡	大北和美	西州津遺跡 東州津遺跡一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	2006	佐野耕市「西州津遺跡・宮ノ北遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 vol.10 1998年度』財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1999	遺物包含層
1760	2002	州津	西ノ久保309-1	発掘調査	財団法人徳島県埋蔵文化財センター	近藤佳人 前田綾博	大北和美	西州津遺跡 東州津遺跡一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	2006	近藤佳人「東州津遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.14 2002年度』財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2003	集落
2049	2001	州津	西久保295番地1	発掘調査	財団法人徳島県埋蔵文化財センター	深田晃司 井藤良雄	大北和美	西州津遺跡 東州津遺跡一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	2006	深田晃司「東州津遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 vol.13 2001年度』財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2002	集落
2171	2000	州津	滝端1257の1	立会調査	池田町教育委員会							
2172	2000	州津	滝端1313の1	立会調査	池田町教育委員会							
2181	1999	州津	滝端1256他	発掘調査	財団法人徳島県埋蔵文化財センター	中島博子 大橋有順	大北和美	西州津遺跡 東州津遺跡一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	2006	大橋有順「西州津遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 vol.11 1999年度』財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2000	集落
2413	1999	州津	西ノ久保341-1他	発掘調査	財団法人徳島県埋蔵文化財センター	島田豊彰 妹尾健司	大北和美	西州津遺跡 東州津遺跡一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	2006	島田豊彰「東州津遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 vol.11 1999年度』財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2000	集落
2443	1995	州津	大深田720番地	試掘調査	徳島県教育委員会文化財課	清重泰良 松永雅行						

第3表 東州津・西州津遺跡既往調査一覧表

### Ⅲ 調査成果



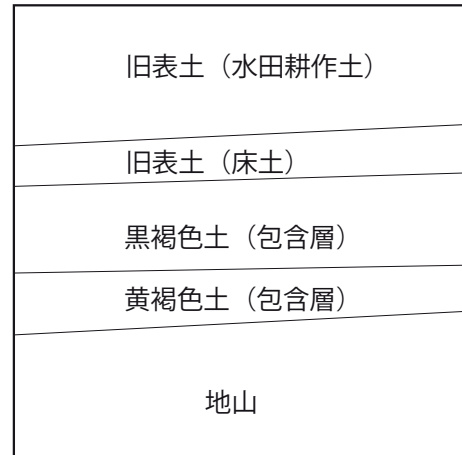


第4図 W区遺構配置図 (S=1/200)

# 1 基本層序

E区は、平面4m×4mの正方形のトレンチを基本にNo.1～No.11まで設定し、必要に応じてトレンチを拡張した。層序は、旧表土（水田耕作土・床土）、黒色土（または、黒褐色土）の遺物包含層、地山となっている。地山までの深さは概ね50cmであり、平成10～14年度まで（財）徳島県埋蔵文化財センターが調査した東州津遺跡の層序と似ている。

W区も基本的にE区と同じ層序であり、旧表土から地山までは50～80cm程度で、黒褐色土の遺物包含層、一部には黄褐色土の遺物包含層が存在している。なお、包含層中の土器量はE区に比べW区は多い。



第5図 W区基本土層模式図 (S=1/20)

# 2 遺構と遺物

W-I区、W-II区、W-III区、W-IV区からは、溝2条、土坑10基、竪穴住居2軒、方形周溝墓1基、小穴数十基が見つかった。土坑、小穴のなかには、古代から中世の遺物が出土している遺構も存在する。現場で測量した図面の中には、35年という月日の中で劣化したものも多いため、遺物が出土した遺構を特定する作業は、非常に困難を極めた。写真や日誌等で遺物が出土した遺構の位置を特定できたものもあるが、結局、出土位置がわからなかったものもある。以上の事由により、遺構の詳細平面図と断面図、遺物出土状況図は割愛し、遺構配置全体図 (S=1/200) を掲げる。

それでは以下で、発掘当時の現地説明会資料と実績報告書で判明している弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構を中心に報告したい。報告の際の遺構番号は、整理作業の段階で名付けた新しい遺構番号であるが、調査日誌には、旧遺構番号で表記されているので注意していただきたい。

遺構の時期を決定する根本の土器編年は、徳島県埋蔵文化財センター報告書第33集『矢野遺跡 (I)』(第二分冊)所収の「V考察 3 矢野遺跡出土土器編年案」である。したがって、弥生時代後期末と表現されることもある庄内式併行期段階の土器は、古墳時代前期初頭とする立場であることを断っておきたい。既往の編年案との対比表を掲げるので参考にしていきたい (第4表参照)。

なお、E区からは、実測可能な遺物が出土しておらず、遺構検出時にも明確な遺構は確認されていないことを付け加えておく。

## 竪穴住居

### 竪穴住居 (SB01)

W-III区、W-IVで検出された竪穴住居である。平面形態は隅丸方形で、東西方向5.7m、南北方向5.5mを測る。幅0.35m、深さ0.2mの周壁溝が、住居壁体に沿って全周で検出されている。竪穴住居の検出面から床面までの深さは、0.6mを測る。床面中央には、直径0.8mの円形範囲で浅い掘り込み状遺構があり、遺構内部には、焼土、炭化物が散らばっており、炉跡と考えられる。

時期大区分	時期中区分	時期小区分	阿波（東部）における様式区分の主たる指標	時期区分	阿波（東部）近藤（2002）	時期区分	阿波（東部）菅原（2000）	阿波（東部）菅原（1987ほか）	阿波（西部）菅原（2002）	阿波					
弥生時代後期	前半	前葉	特大形壺・特大形台付鉢・垂下口縁高杯の消滅。凹線文の退化（凹線状沈線）。	V期	弥生時代後期前半	V-1	V-2	V-1	V-1	上野 I					
			広口の細頸壺・無頸壺の消滅。広口長頸壺の出現。鉢の増加が認められる。												
		中葉	広口長頸壺の顕在化。鉢の増加が認められる。器種比率で1~2割まで鉢が増加する。												
	後半	後葉	二重口縁壺の出現。器種比率で鉢が2割を超え安定的になる。東阿波型土器の甕の祖形が出現し、甕全体の中の比率で1割ぐらいを占める。	VI期	弥生時代後期後半	VI-1	VI-2	V-4a	黒谷 I	V-3	上野 II				
			東阿波型土器の甕の祖形が型式変化し、体部はラグビーボール形のものが出てくる。甕全体の中の比率で1~2割ぐらいを占める。					V-4b							
		後葉	東阿波型土器の甕の祖形が型式変化し、体部はラグビーボール形のものが出てくる。甕全体の中の比率で1~2割ぐらいを占める。	VI-2	V-5	+	V-4								
古墳時代前期初頭	庄内式併行期	前半	東阿波型土器の成立。東阿波型土器の広口壺と甕の体部は倒卵形で共通したプローションをもつが、底部は平底である。有孔鉢出現。	古墳時代	弥生時代終末期	庄内0	庄内1	VI-1	黒谷 II	VI-1					
			前土器様式からさらに東阿波型土器の壺と甕の倒卵形体部は球形化が進む。												
		後半	東阿波型土器に限らず、タタキ技法を色濃く残す一群も含め、全器種で器壁の厚みが3~5mm程度まで薄くなる傾向がより加速する。また、さらに壺、甕、鉢とも体部球形化が進み、底部の平底部分の直径は3cm以下となる。									庄内2	VI-2	VI-3	黒谷 III
	前土器様式からさらに東阿波型土器の壺と甕の倒卵形体部は球形化が進み、体部最大径が器高の中間付近まで下がってきて、倒卵形と言っても、かなり上下から圧縮されたイメージで捉えられる。壺、甕、鉢の底部はわずかに平底部分が存在する尖底タイプが目立ち、平底タイプは減少していく。	庄内3	VI-3									黒谷 III	VI-2		
	布留式併行期	布留0式併行期	甕口縁はわずかに内湾し、口縁端部をわずかにつまみあげる、布留式影響下の甕の生産。壺、甕、鉢の体部は球形化し、底部は丸底が主流になる。									布留0	古墳時代（布留式併行期）	黒谷 IV	

編年案1 近藤(2002)より。 編年案2 菅原(1987・2000・2002)より。 編年案3 佐原編(1983)の阿波は岡本健児による。

編年案1 近藤(2002)より。

編年案2 菅原(1987・2000・2002)より。

編年案3 佐原編(1983)の阿波は岡本健児による。

なお、各編年案の小様式の併行は必ずしも一致しているわけではない。各小様式での主たる内容での大まかな併行関係である。

#### 第4表 阿波東部と西部の土器編年案

##### (参考文献)

大北和美 2006 『西州津遺跡・東州津遺跡 一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第67集 財団法人徳島県埋蔵文化財センター

佐原真編 1983 『弥生土器 I』ニューサイエンス社

近藤玲 2002 『矢野遺跡（I）一般国道192号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 財団法人徳島県埋蔵文化財センター

菅原康夫 1987 『黒谷川郡頭遺跡II 昭和60年度発掘調査概報』徳島県教育委員会

菅原康夫・瀧山雄一 2000 「阿波地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社

菅原康夫 2002 「弥生時代」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

また、支柱穴は4基確認されている。うち3基の平面形態は、長軸0.3m、短軸0.2mの楕円形であり、深さは0.6mを測る。残りの1基は、直径0.25mの円形で、深さ0.6mである。支柱穴間の距離は、2.6m～2.8mで、床面形状と同様に、ほぼ正方形の配置となっている。

実測可能な出土遺物は、土器が55点、石器が8点である。土器は壺が12点、甕が33点、鉢が7点、高杯が3点出土しており、器種比率を示すと、壺22%、甕60%、鉢13%、高杯5%である。甕の割合が高いことがわかる。壺の頸部から口縁部の形状を見ると、朝顔の花弁状に外傾しながら外反するもの(3・5)が見られることから、古墳時代前期初頭の年代が考えられる。甕、鉢の体部は球形化(13・14・46・50)が進んでおり、底部は平底であっても、底部径は小さい。鉢の中には有孔鉢(48)が含まれており、甕の中には体部の器壁を3ミリ程度までに薄く仕上げたもの(16・28・29・34)や、高杯の杯部で浅い碗形状のもの(53)が見られる。こうした壺以外の器種の特徴からも古墳時代前期初頭の土器様式の中でも布留式併行期であると考えられる。

また、甕の中には、口縁部が直立し、受け口状になる特徴が見られ、胎土に角閃石を多く含むことから、岡山(備中と備後の境界地域?)で作られた土器の搬入品と考えられるもの(22)も存在する。あるいは、口縁端部を内側につまみ上げるような特徴を示す布留式土器の影響を受けたもの(16・17・25)も認められる。

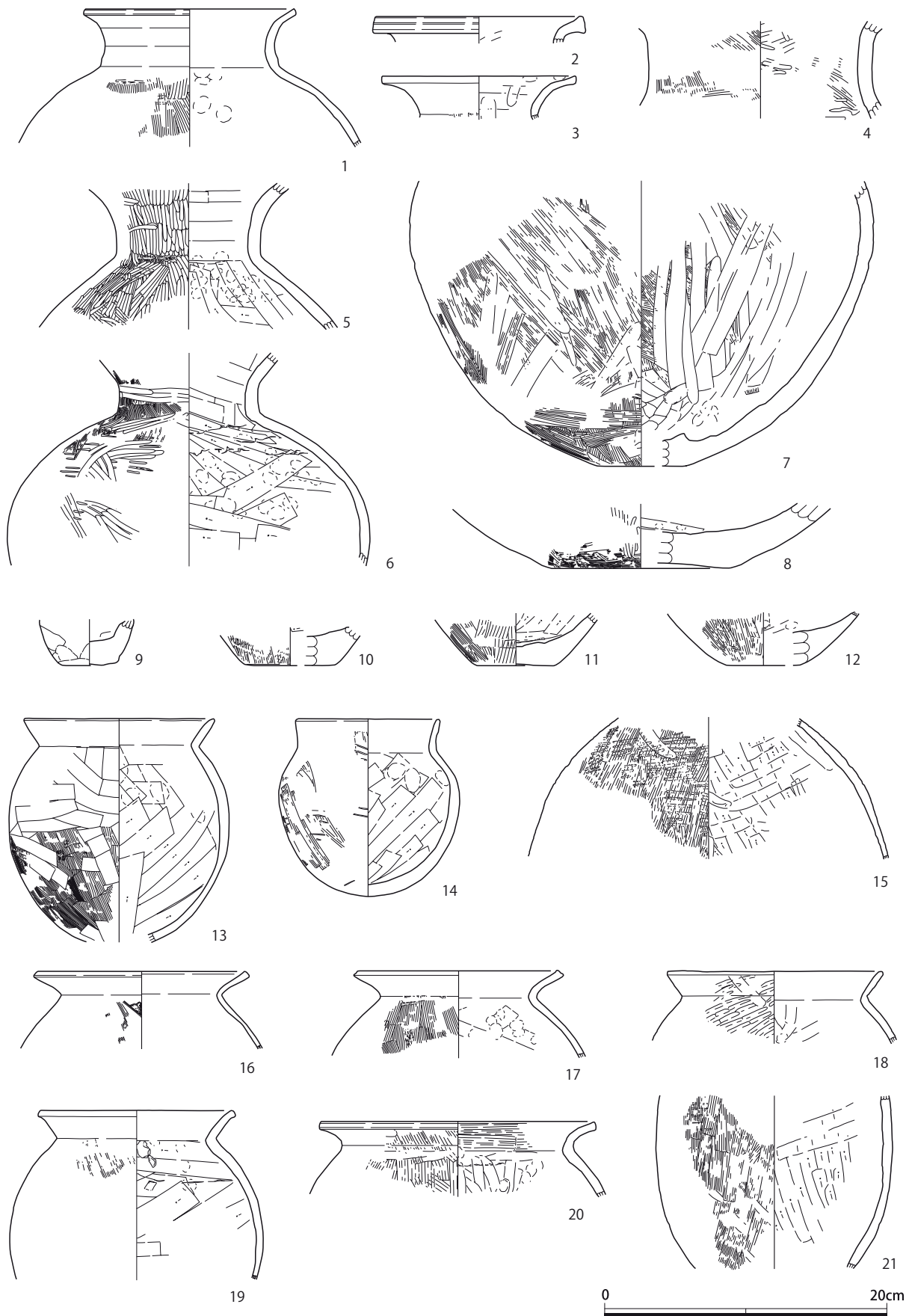
一方、石器は、サヌカイト製剥片、結晶片岩製石庖丁、敲石、磨石が出土している。石庖丁(59)には、刃部にガラス質の光沢が認められることから、稲穂などの刈り取りの際にコーングロスが付着したと考えられる。砂質片岩製の敲石・磨石(61)は手のひらに収まる扁平な円礫であるが、縁辺部には細かな敲打痕があり、表裏には網掛けで図示した部分に研磨痕が認められる。

#### 竪穴住居(SB02)

W-Ⅱ区、W-Ⅲで検出された竪穴住居である。方形周溝墓の主体部周辺を破壊して構築されている。調査区外の北側へ遺構はまだ続いており、竪穴住居の南側3/5ほど検出された。平面形態は前述のSB01と同じく隅丸方形で、東西方向5.1m、南北方向3.5mである。おそらく、一辺が5m前後の隅丸正方形の竪穴住居であろう。幅0.2m、深さ0.1mの周壁溝が、住居壁体に沿って検出されている。竪穴住居の検出面から床面までの深さは、0.6mを測る。床面中央になると推定される調査区北壁近くには、炭化物、焼土が散らばっている部分が認められ、炉跡と考えられる。

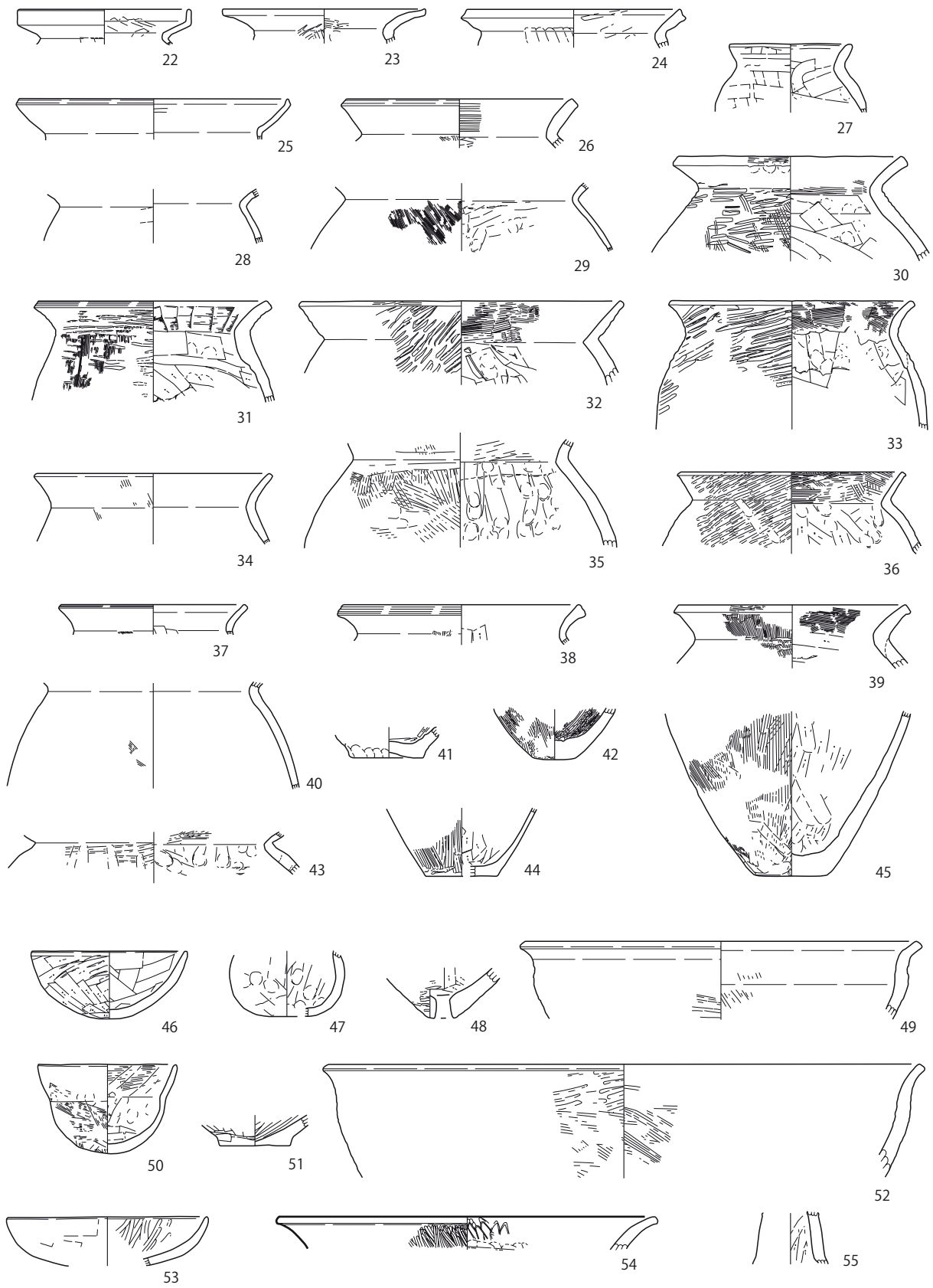
支柱穴は南側の2基確認され、本来は北側にも2基あり、4基あったと考えられる。検出された2基の平面形態は、長軸0.25m、短軸0.2mの楕円形であり、深さは0.3m程度であろうと推測される。支柱穴間の距離は、2.1mで、床面形状と同様に、ほぼ正方形の配置となることが予想される。

図示できるような出土遺物はないので、竪穴住居の時期を判断し難いが、後述する弥生時代後期後半の方形周溝墓のマウンドを壊して造られていることや、前述のSB01と平面・断面形状、支柱穴の構造など非常によく似ていることから古墳時代前期初頭の竪穴住居と考えられる。



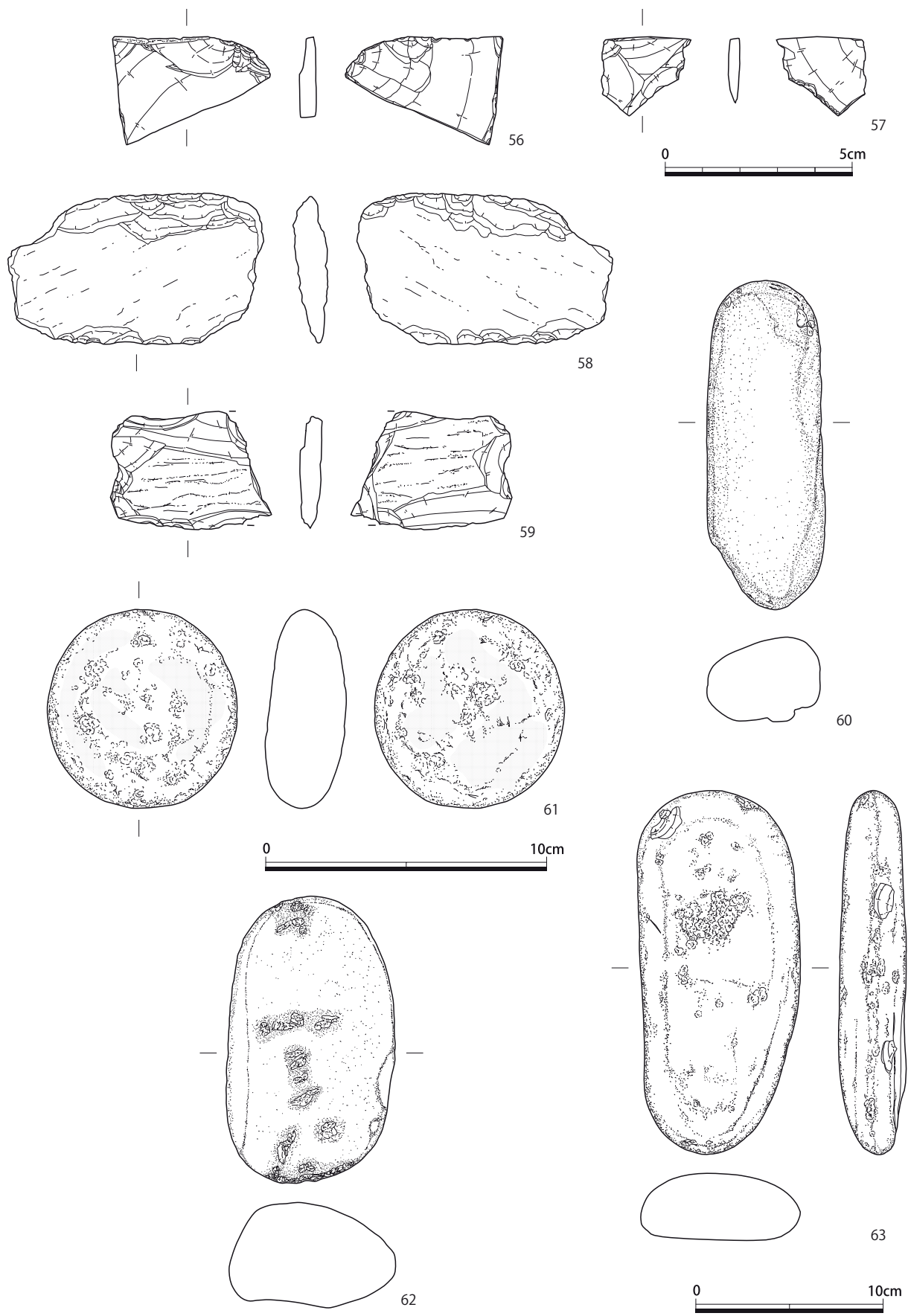
第6图 SB01 出土土器(1)





0 20cm

第7图 SB01 出土土器 (2)



第 8 图 SB01 出土石器

## 溝

### 溝 (SD01)

W－Ⅳ区で見つかった溝である。主軸はほぼ南北方向で、調査区内の長さ 7.6m、最大幅 0.6m、深さは約 0.2m を測り、断面形状は、浅い皿形である。竪穴住居 (SB01) の東側約 5m に位置している。居住空間の排水や区画が目的と考えられる溝である。

実測可能な出土遺物は土器が 49 点である。壺が 17 点、甕が 21 点、鉢が 10 点、高杯が 1 点で、器種比率を示すと、壺 35%、甕 43%、鉢 20%、高杯 2% であり、壺と甕の割合は、全体の約 8 割を占めている。

二重口縁壺 (67) の口縁部に波状の櫛描文が見られる特徴や、甕体部が倒卵形のもの (81・84・84・85・86・87) が多く見られること、有孔鉢 (108) があることから古墳時代前期初頭の土器様式を示すと考えられる。ただし、前述の SB01 に比べて、壺、甕、鉢とも器壁が分厚いものが多く、また、壺、甕、鉢の底部が丸底のものがやや少ないという特徴から、古墳時代前期初頭でも、SB01 よりはやや古い庄内式併行期の土器様式を示していると考えられる。なお、甕 (90) は胎土に角閃石を多く含むことから讃岐からの搬入品の可能性が高い。

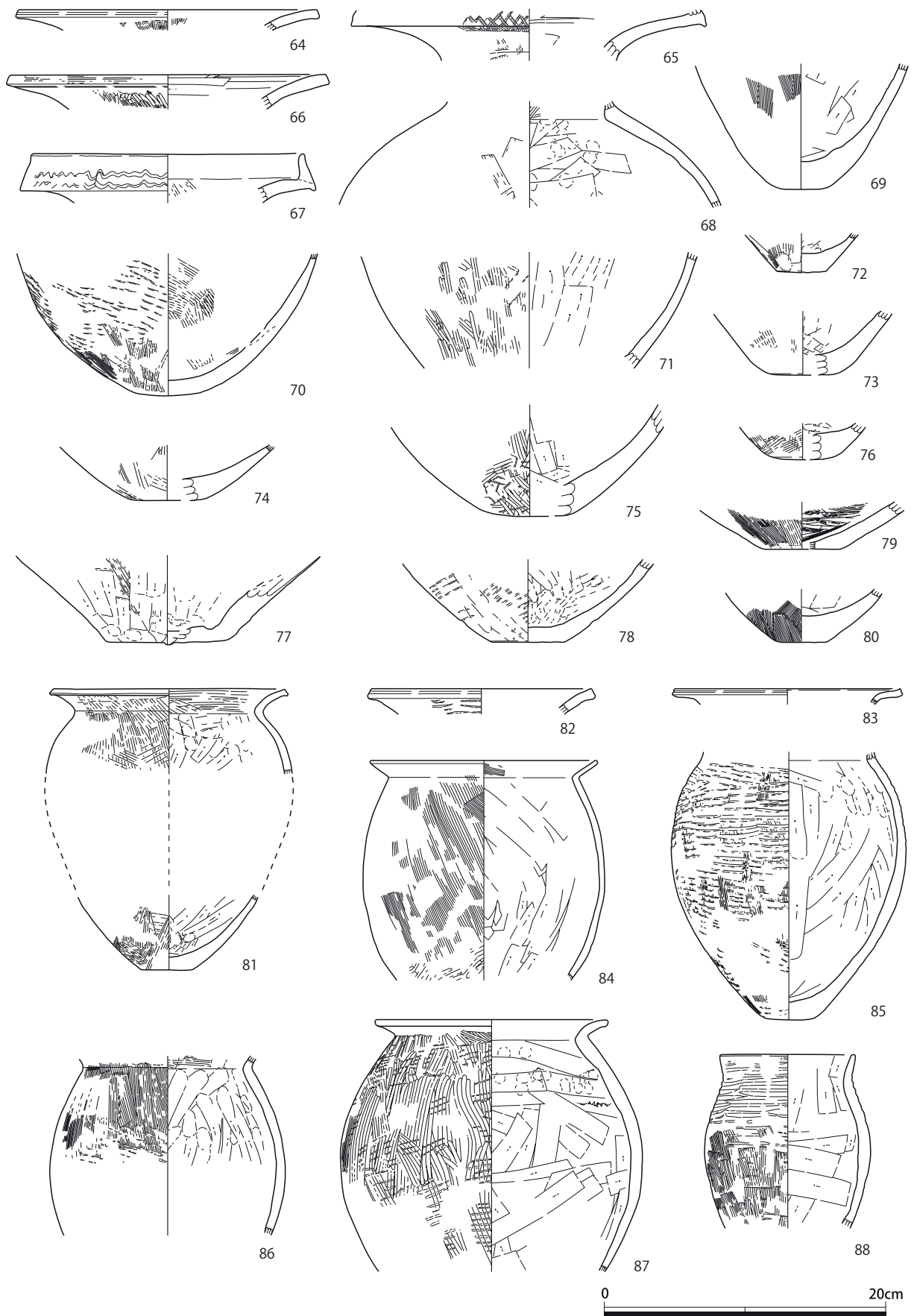
## 方形周溝墓

### 方形周溝墓 (SM01)

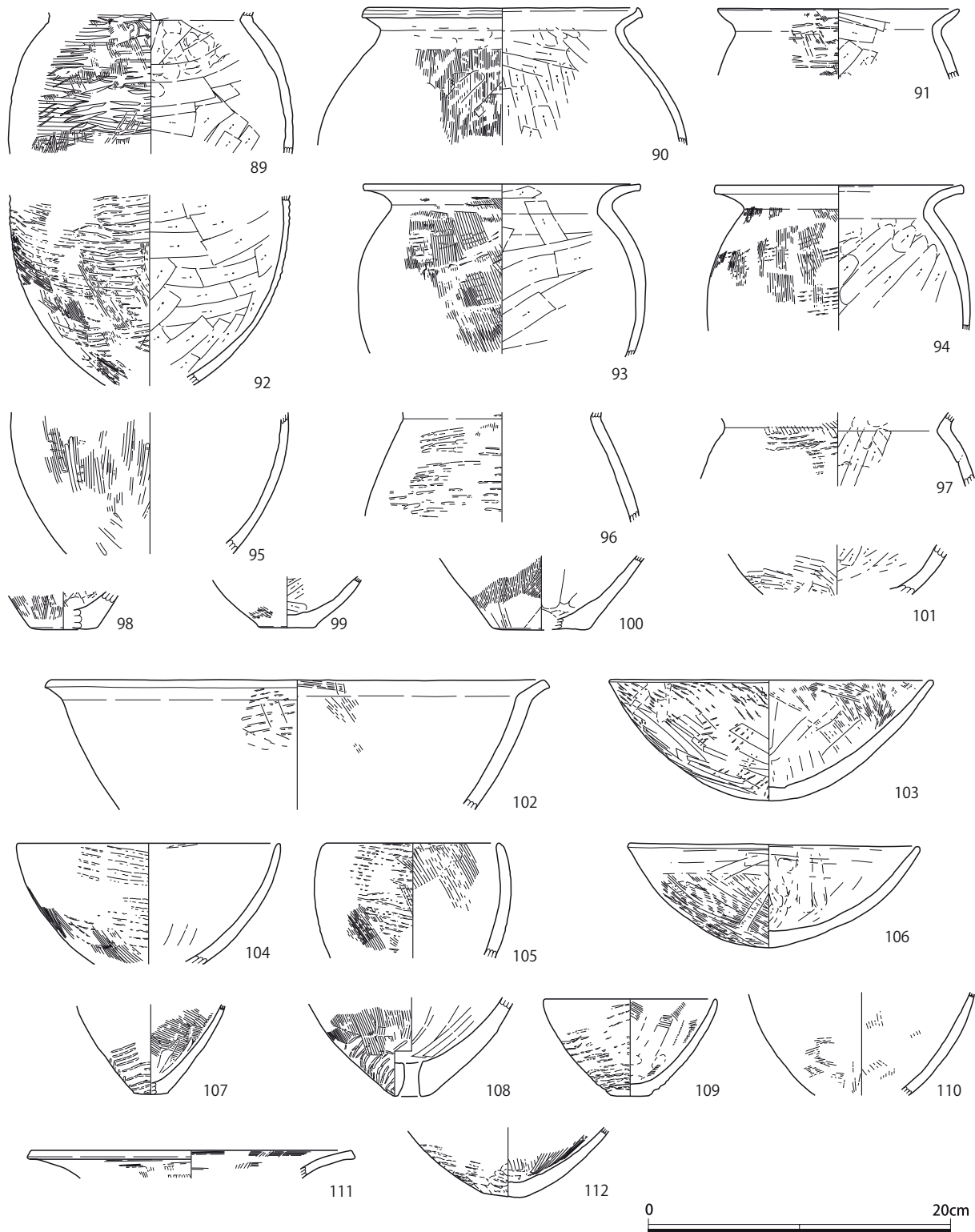
W－Ⅱ区、W－Ⅲで検出された L 字状の溝である。幅 0.3～0.5 m で、ほぼ東西方向に 11m 延び、東側は、前述の竪穴住居 (SB01) に壊され、西端の部分で直角に北へ 5.5m 折れ曲がり、調査区外へと続いている。溝の断面形状は南北方向部分では皿形で、深さ 0.2m 程度と浅いが、東西方向部分の断面形状は逆台形で、東へ向かうほど深くなり、最深部では 0.6m を測る。

L 字状の溝全体から遺物が比較的大きな破片で割れた状態で、折り重なって出土している。実測可能な出土遺物は土器で、壺が 30 点、甕が 53 点、鉢が 9 点高杯が 8 点で、器種比率を示すと、壺 30%、甕 52%、鉢 9%、高杯 9% であり、竪穴住居 (SB01) と溝 (SD01) と同様に壺と甕の割合が 8 割を占める傾向に変わりはない。壺 (113) は、周溝底から完形に近い状態で横倒しになって出土している。この壺 (113) ほど大形ではないが、おそらく同じような長頸広口壺のプロポーシオンをもつと考えられる壺 (131) の体部上半には、二列の竹管文を蛇行させて龍を表現していると考えられる紋様が施されている。また、甕 (176) は、胎土色調が若干チョコレート色をしており、他の土器が明褐色を呈する中で目立っており、讃岐からの搬入品と考えられよう。上記の壺、甕の形態的特徴に加えて、平底を呈する小形の鉢 (200) や、杯部の大きく外反する口縁部外面に心電図の波形状のミガキを施す高杯 (207) などの土器が共伴することから、方形周溝墓の年代は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

なお、方形周溝墓の埋葬主体部にあたると想定される L 字状の溝の北東部分に、竪穴住居 (SB02) が構築されているので、主体部の構造は不明である。また、周溝内側の盛土部分に関しても、中世以降の削平を受けており、ほとんど残存していないと考えられる。

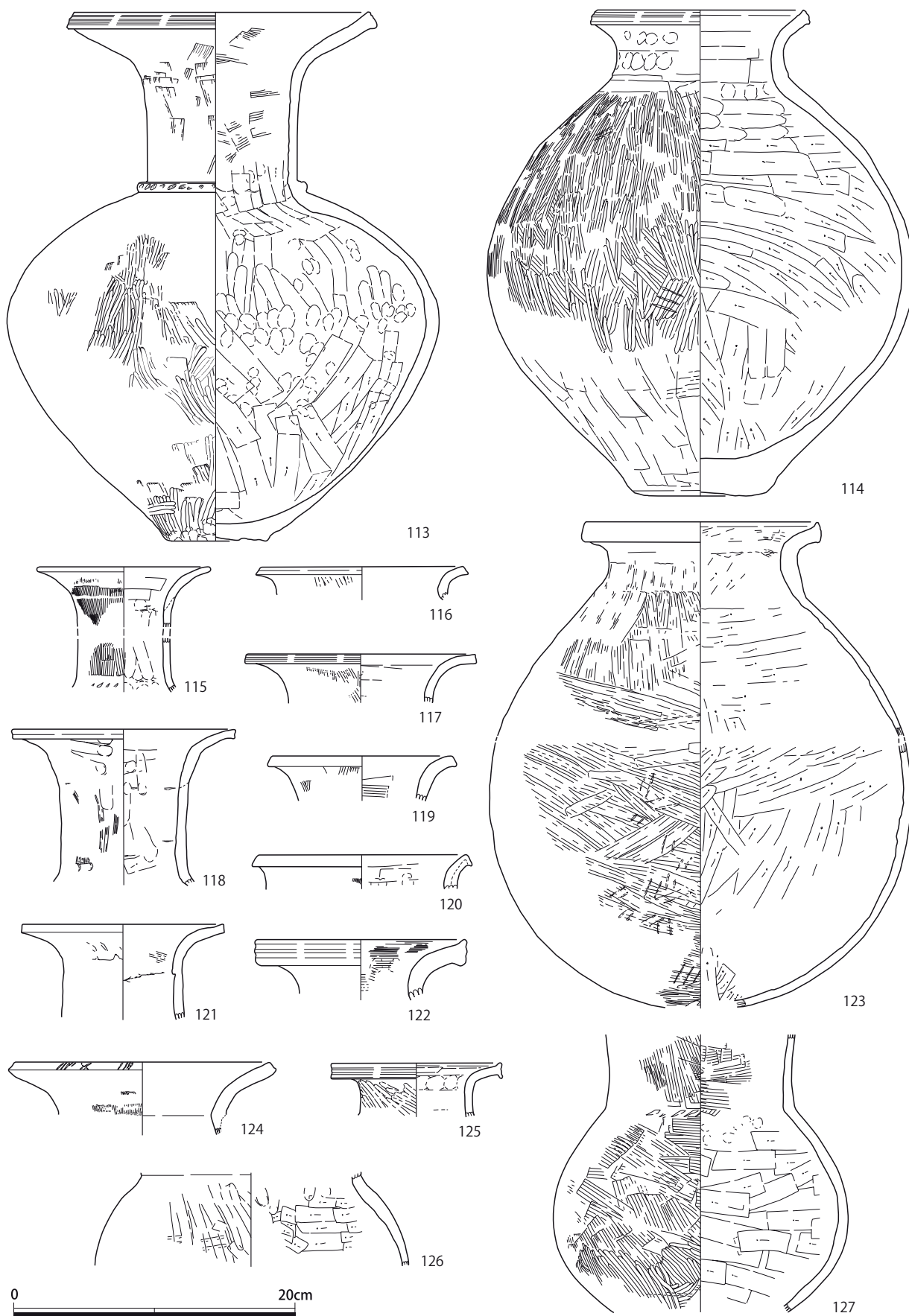


第9图 SD01 出土土器 (1)

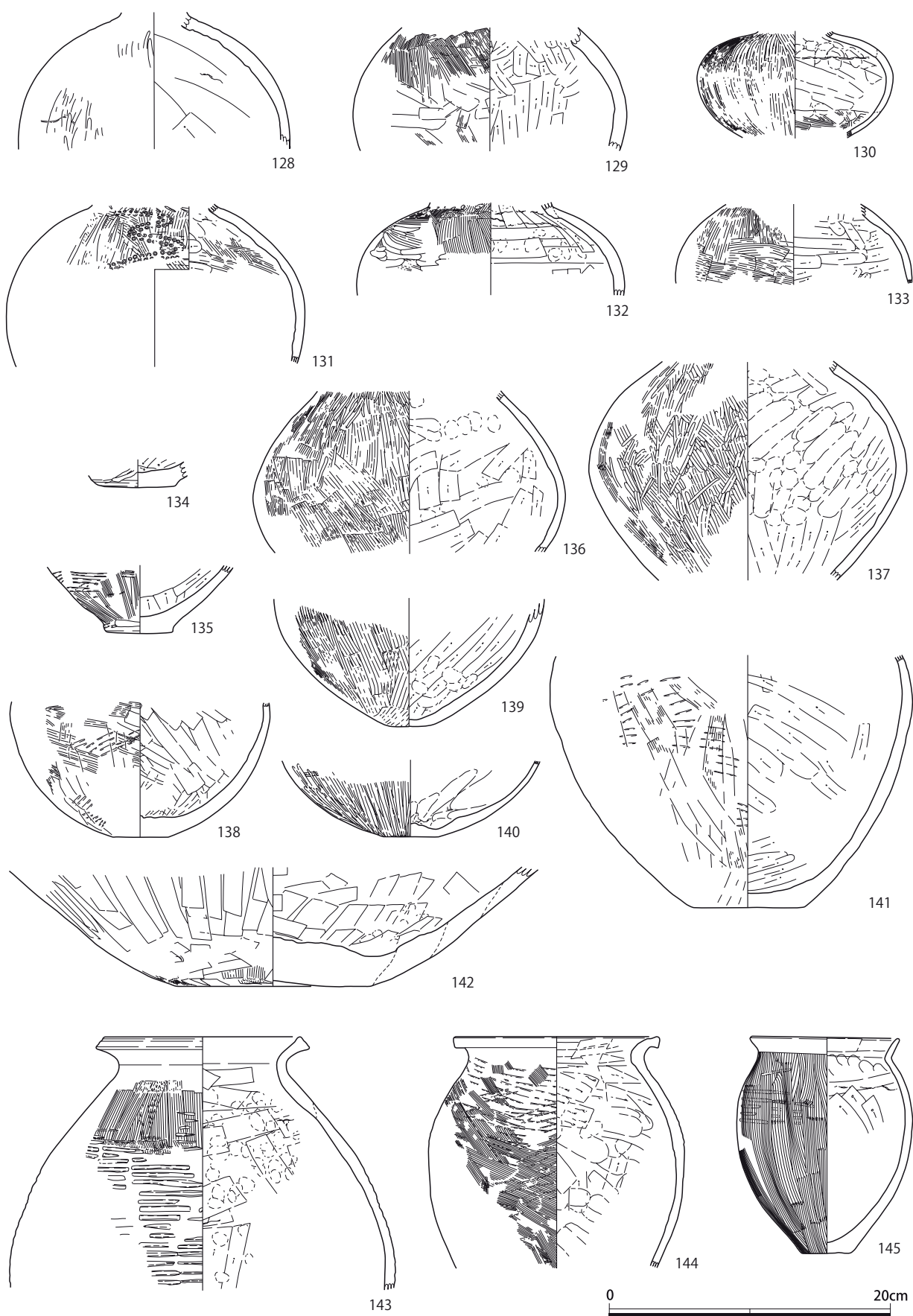


第10图 SD01 出土土器(2)

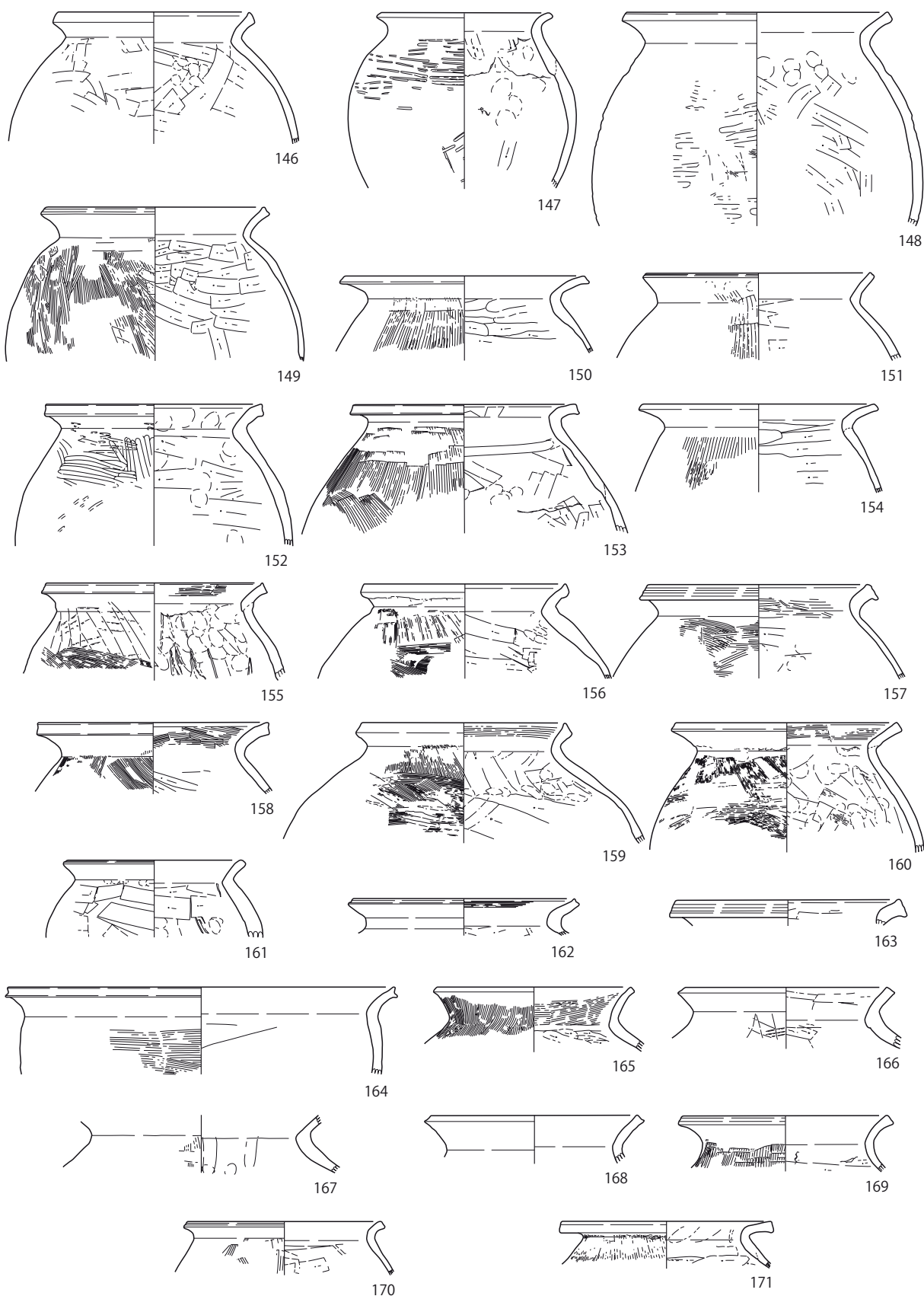




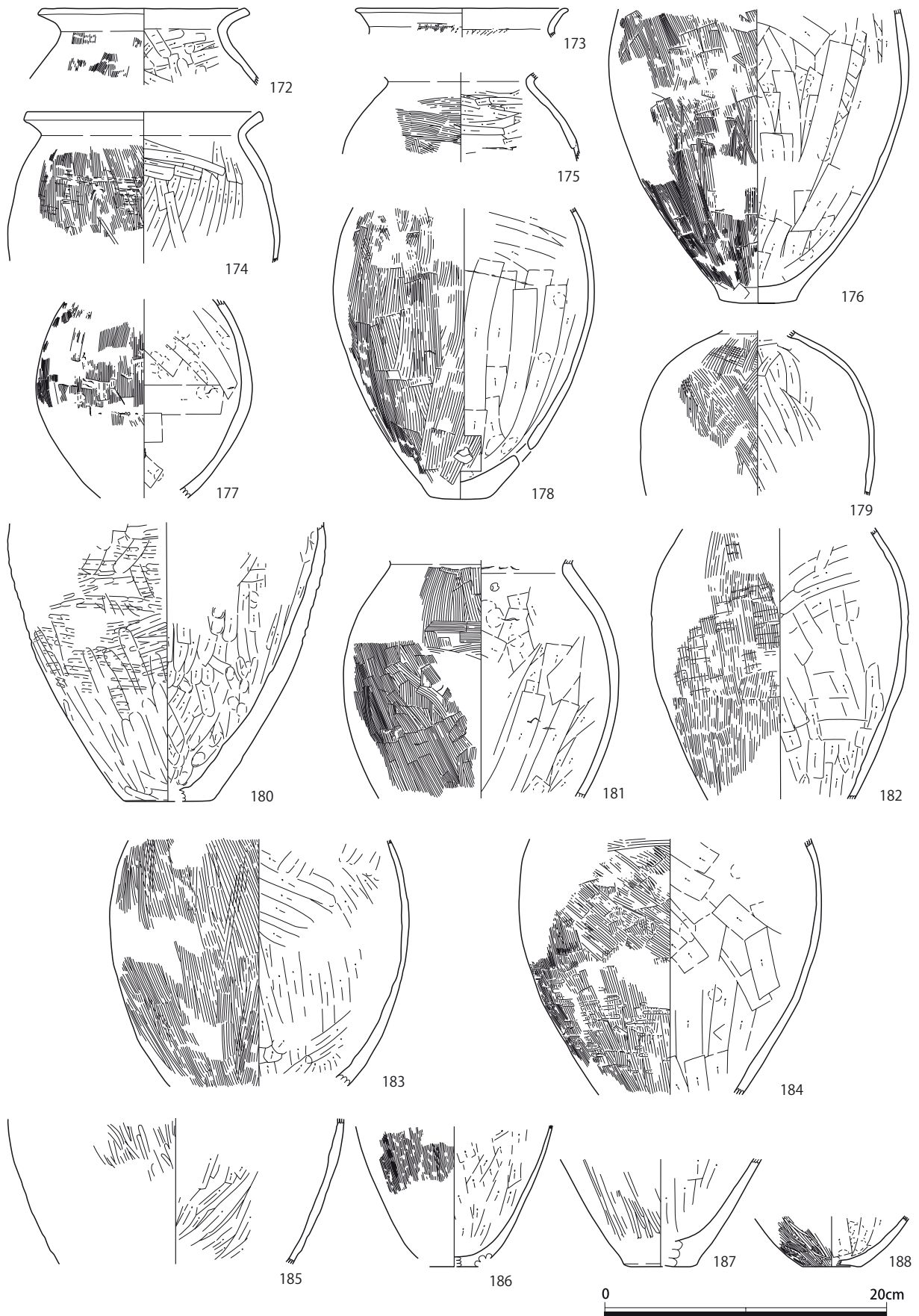
第11图 SM01 出土土器(1)



第12 图 SM01 出土土器(2)

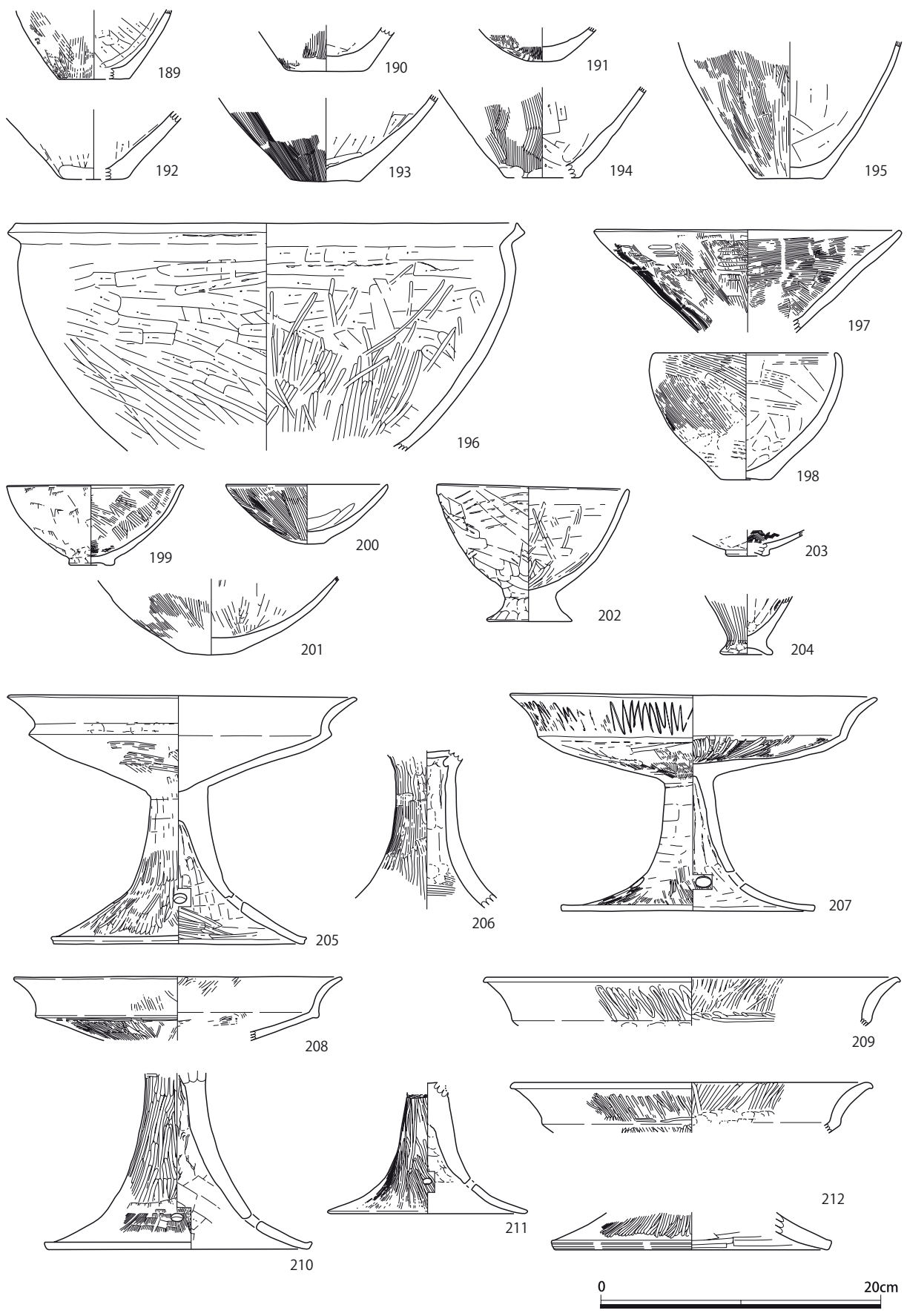


第 13 图 SM01 出土土器 (3)



第14图 SM01 出土土器(4)





第15图 SM01 出土土器(5)

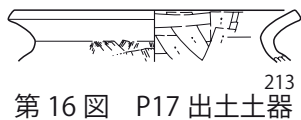


## その他の遺構、包含層出土遺物

以下に掲げる遺物は、包含層や土坑、小穴出土遺物である。主に古墳時代以降の遺物を中心に掲載しているが、挿図タイトルにある遺構番号は、発掘当初に付けられたものである。正確な出土位置情報はわからないが、遺跡全体の年代幅を見る上で重要になると考えられる。これらの遺物は鎌倉時代の13世紀のものが数多く認められる。

須恵質土器(221)は、東播系の捏鉢の底部であり、底部糸切り痕が確認できる13世紀のものである。土師質土器皿(223)は、14～15世紀のものと考えられ、土師質土器杯(224・228)は、底部回転ヘラ切りで、口縁部には強いヨコナデが施されている。何れも、体部から口縁部の立ち上がりが外側へ開いていくような形状を示すことから14～15世紀のものと考えられる。

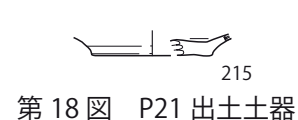
土師質土器杯(233・239)は、何れも底部回転ヘラ切り技法を用い、(233)は板目痕を留め、13世紀のものと考えられる。土師質土器皿(240)は、吉野川下流域で、徳島市眉山南麓に所在の寺山遺跡出土の13世紀土師質土器皿と同様の形態を示している。



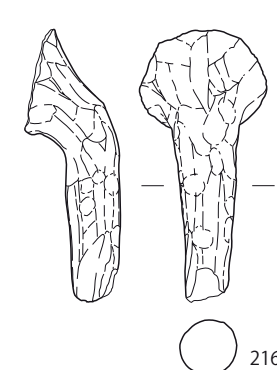
第16図 P17 出土土器 213



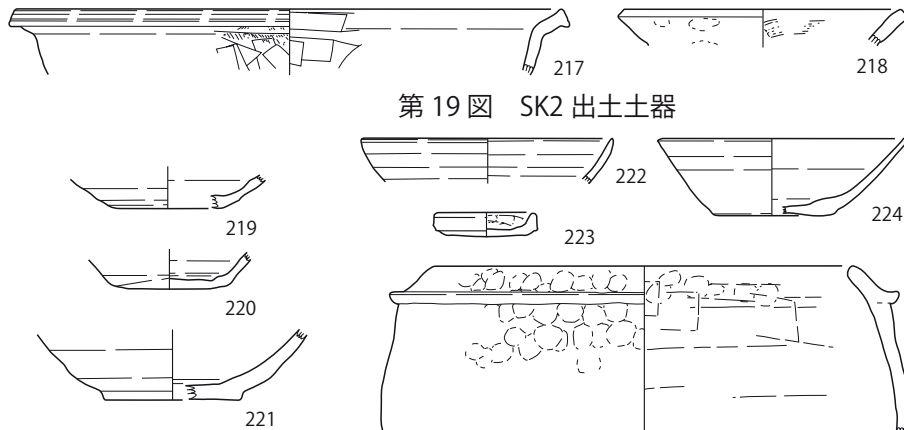
第17図 P22 出土土器 214



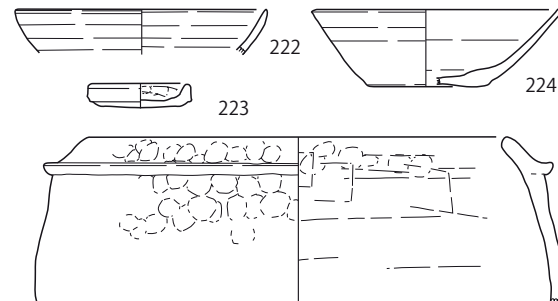
第18図 P21 出土土器 215



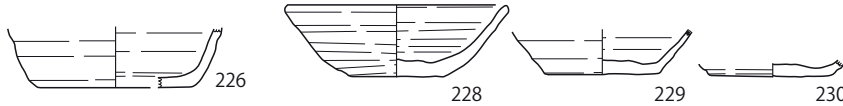
第20図 SK01 出土土器 216



第21図 土坑25 (SK3) 出土土器 217 218 219 220 221



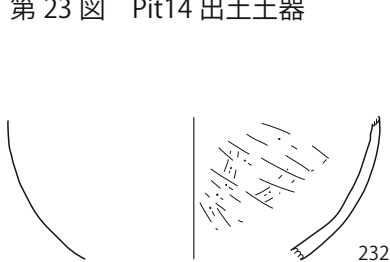
第22図 土坑101 出土土器 222 223 224 225



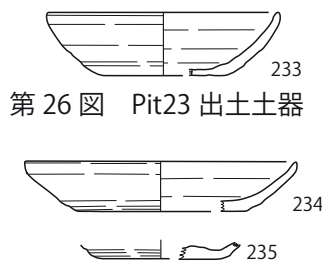
第23図 Pit14 出土土器 226 227 228 229 230

第24図 Pit21 出土土器 231

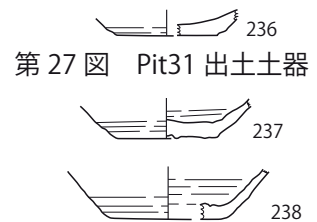
第25図 Pit28 出土土器 232



第28図 Pit5 出土土器 232



第26図 Pit23 出土土器 233 234 235

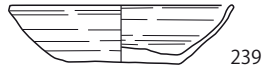


第27図 Pit31 出土土器 236 237 238

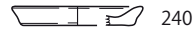


須恵質土器捏鉢(248)は、13世紀の東播系である。須恵質土器椀(252)は、高台を貼り付ける際に、目安になるように4条の沈線を引いている。12世紀前後のものと考えられる。

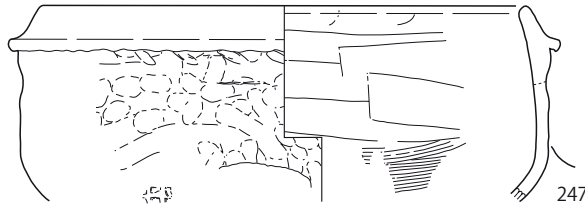
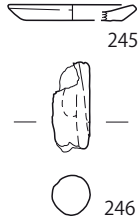
須恵器皿(255)は、9～10世紀のものと考えられる。縄文土器深鉢(257・258)は、晩期前半のものと考えられ、三加茂町の稲持遺跡に出土例がある。須恵質土器椀(267)は、西村窯系の13期前



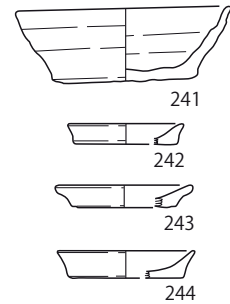
第31図 Pit67出土土器



第32図 Pit102出土土器



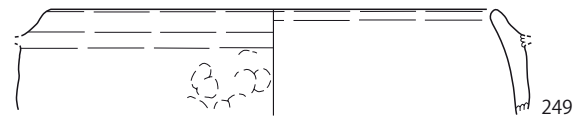
第33図 Pit27出土土器



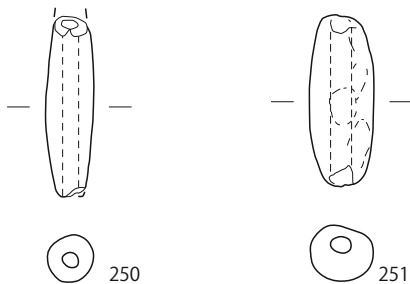
第34図 Pit105出土土器



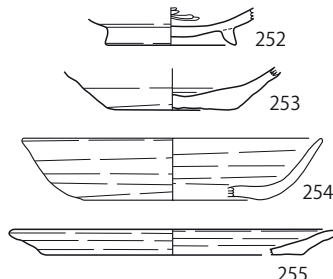
第35図 W-I区包含層出土土器(1)



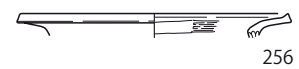
第36図 W-I区包含層出土土器(2)



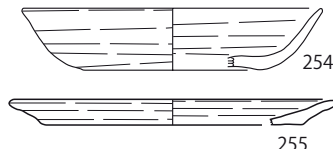
第37図 W-Ⅲ区包含層出土遺物



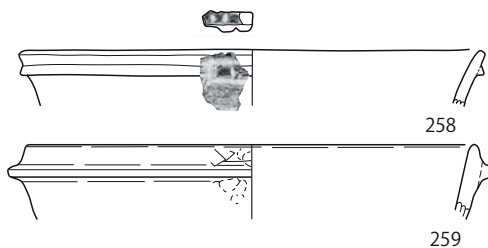
第38図 No.8 トレンチ出土遺物



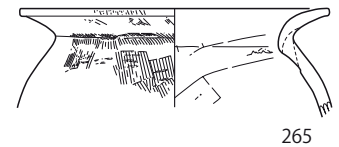
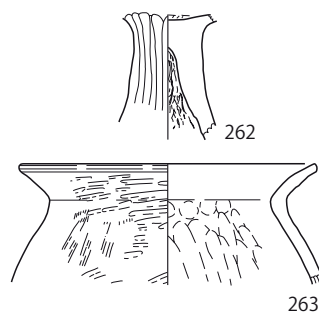
第39図 No.1 トレンチ出土土器



第40図 No.5 トレンチ出土土器



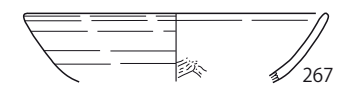
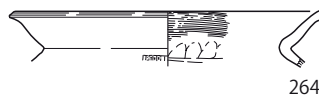
第41図 No.4 トレンチ出土土器



第42図 No.7 トレンチ出土土器

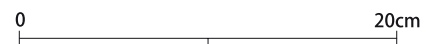


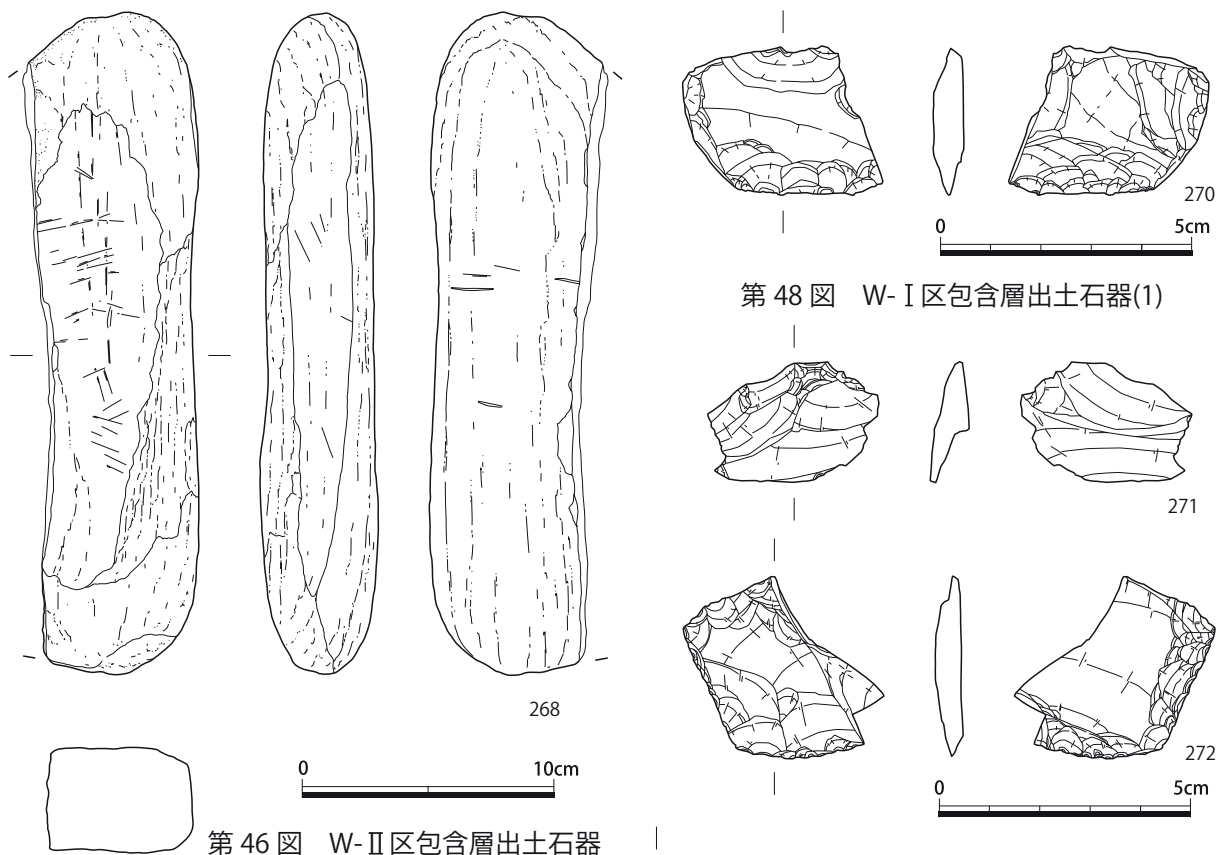
第43図 No.10 トレンチ出土土器



第44図 No.6 トレンチ

第45図 No.9 トレンチ出土土器

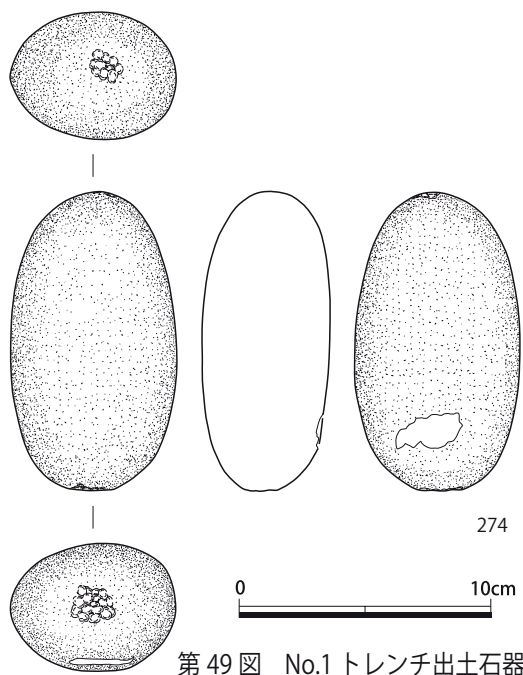




第47図 W-I区包含層出土石器(1)

半のものと考えられる。

砥石(268)は、結晶片岩で粒子が緻密であり、図示した3面は非常に良く使い込まれて研磨痕が観察できる。



### 3 まとめ

今回の東州津遺跡の調査は、W区約450㎡、E区約150㎡の合計約600㎡の調査範囲であった。決して充分とは言えない限られた調査期間と調査体制の中で、多くの成果を挙げることができた。

遺物は最も古いもので、縄文時代晩期前半の深鉢形土器が2点確認できた。同じ東州津遺跡の範囲内では、平成10～14年度にかけて一般国道32号井川IC関連改良工事に伴う発掘調査で検出された溝、自然流路内からは縄文時代晩期の土器が出土している。この平成になってからの調査地点は、昭和49年度6月調査区（州津遺跡として概報で報告）から西へ約300m、本報告の東州津遺跡W調査区から西へ約1.1kmに位置し、吉野川北岸の同一の河岸段丘低位面に展開している。このように東西に長く伸びる標高80～90mの同一低位段丘上に広がる東州津遺跡は、今回、縄文時代晩期深鉢形土器が出土していたことを考え合わせると、古く3,000年以上前には人々の生活圏となっており、本調査地周辺に竪穴住居などを伴う集落が存在していたことが予想される。

続く弥生時代前期から中期の明確な遺構、遺物は、今回の調査地点も含めて東州津遺跡では確認されていない。縄文時代から弥生時代にかけて低位段丘上での集落立地について、近隣の大柿遺跡や西州津遺跡との関わりの中で整理していく必要がある。

弥生時代後期後半になると、調査地近辺では遺構、遺物が増えて、今回、報告した方形周溝墓の発見が最大の成果と言える。調査範囲の制約のため、全体を検出することはできず、南北5.5m、東西11mのL字形の区画溝として把握された。現在、徳島県下では、徳島市名東遺跡や庄・蔵本遺跡など眉山北麓遺跡群を中心に、30基以上見つかっている。これら、吉野川下流域で見つかっている方形周溝墓の所属時期は、中期後半が主体で、区画溝形態も四隅が切れるタイプであり、東州津遺跡と異なるタイプである。本調査地で見つかった区画L字形溝断面は、南北方向のものは浅く0.2mほどの皿形で、東西方向は逆台形で西から東へ傾斜し、深いところで0.6mを測る。溝の中からは完形に近い壺などが出土し、中には祭祀に使用された可能性のある龍を記号化した紋様を付す壺形土器片も見つかっている。方形周溝墓の盛土部分や、主体部があると考えられる部分には、古墳時代布留式併行期の隅丸方形の竪穴住居が構築されており、周溝墓として、残存状況は良好ではないが、徳島県東部地域の墓制と異なる墓制が東州津遺跡周辺では弥生時代後期後半には存在していたと考えられる。今後は、L字形区画溝という方形周溝墓の中では類例が少ない点や、溝の断面形状の特徴、さらに単体で方形周溝墓が構築されていることなどについて、徳島県での類例の増加を見極めていくことが重要である。

その後、本調査地では、古墳時代前期初頭の竪穴住居や集落を区画する溝が検出されている。東州津遺跡全体を見ると、前述の平成における発掘調査地点で、同様の時期である古墳時代前期初頭の区画溝が見つかっており、集落の縁辺部に調査トレンチが及んでいると理解できる。今後は、本調査地点で確認できた竪穴住居が北側の調査範囲外へどのように展開しているのか、周辺の調査や、微地形の復元から古墳時代の集落の具体像を引き出すことが課題である。

本調査地点で、次に遺構、遺物が多くなるのは中世の段階で、鎌倉時代13世紀代の柱穴や土坑が多く見つかっており、遺物では、香川県の西村系須恵質土器椀や兵庫県南西部の東播系捏鉢が、在地の土師質土器椀に混じって散見される。古墳時代後期から古代にかけて東州津遺跡では人々の生活痕跡は極端に少なくなり、鎌倉時代から再開されていたことがわかる。平安時代から鎌倉時代の荘園制との関わりを周辺の遺跡との比較検討から東州津遺跡の中世段階での位置づけを行うことも必要であろう。

# 觀察表



第5表 出土土器観察表

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
1	W-IV	SB01	壺	14.8	6	-	-	9.5	1/7	1.5	中	石・長・赤	2.5YR5/3	2.5YR5/8	口縁残り少なく体部歪み大きい ため不正確。体部外面摩耗気味。東隅土器群・SEブロック第1層・SEブロック第2層。
2	W-IV	SB01	壺	14.6	-	-	-	1.8	1/9	2.8	少	石・雲・結・赤	10YR7/3	7.5YR7/4	NWブロック。
3	W-IV	SB01	壺	13.7	8.4	-	-	2.9	1/8	3	少	石・長・雲・赤	2.5YR6/6	10YR6/6	
4	W-IV	SB01	壺	-	15.8	-	-	5.5	1/3	1.5	中	石・雲・結・赤	7.5YR7/4	5YR7/6	内外面磨減著しく調整不明。東隅土器群・畦出土。
5	W-IV	SB01	壺	-	10.2	-	-	9.8	1/4	4.5	中	石・長・雲・黒	2.5YR6/6	5YR6/4	外面煤付着。SEブロック第2層。
6	W-IV	SB01	壺	-	9.9	25.8	-	14.7	1/3	7	中	石・雲・結・赤・黒	10YR4/1	10YR7/4	体部外面煤付着。外面部分的に磨減のため調整不明。東隅土器群・SEブロック第2層・畦出土。
7	W-IV	SB01	壺	-	-	33	6.4	20.3	2/5	7.2	中	石・雲・結・赤	2.5Y4/1	7.5YR7/4	焼成時破裂痕あり。東隅土器群・SEブロック第1層・畦出土。
8	W-IV	SB01	壺	-	-	-	12.8	4.2	1/4	8.5	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/4	5YR6/6	外面煤付着。内外面磨減のため調整不明。SEブロック。
9	W-IV	SB01	壺(甕?)	-	-	-	4	3.3	1	3	中	石・赤	7.5YR6/4	7.5YR6/6	底部外面に黒斑あり。SEブロックPit3。
10	W-IV	SB01	壺	-	-	-	6.5	2.2	1/5	4.4	中	石・雲・結・赤	10YR8/2	10YR7/3	SEブロック床面直上。
11	W-IV	SB01	壺	-	-	-	5.6	3.3	1/3	3.5	中	石・雲・結・赤・黒	7.5YR5/4	5YR5/4	NEブロック第1層・第2層。
12	W-IV	SB01	壺	-	-	-	5.3	3.7	1/8	1.4	少	石・雲・結・赤	5YR5/6	7.5YR7/6	二次焼成。NEブロックPit2。
13	W-IV	SB01	甕	13.4	11.4	15.6	-	15.9	2/5	4.5	多	石・長・雲・赤・黒	10YR7/4	5YR7/4	外面煤付着。器形に歪みがあるため口径等は誤差あり。炉周辺土器群・NWブロック床面直上・NEブロックPit2。
14	W-IV	SB01	甕	10	9.9	12.8	0.4	12.6	4/5	3	多	石・雲・結・赤・黒	7.5YR6/4	7.5YR7/6	一部外面部分的に磨減のため調整不明。NEブロック床面直上・畦出土。
15	W-IV	SB01	甕	-	-	-	-	9.9	1/4	4.4	中	石・雲・結・赤	10YR7/3	7.5YR7/3	上下逆の可能性あり。33と同一個体?
16	W-IV	SB01	甕	14.6	11.4	-	-	5.5	1/6	1.5	中	石・雲・結・赤	7.5YR7/4	10YR7/4	内外面ともに磨減著しく調整不明。口縁部内外面一部煤付着。布留甕の影響? SEブロックPit3。
17	W-IV	SB01	甕	14.1	11.1	-	-	6.1	1/8	3	少	石・雲・結・赤	7.5YR5/4	7.5YR5/6	布留式甕の影響? 内外面煤付着。内外面磨減のため調整不明。東隅土器群。
18	W-IV	SB01	甕	15.2	13.2	-	-	4.9	1/7	3	少	石・雲・結・赤	10YR7/3	7.5YR7/4	畦出土。
19	W-IV	SB01	甕	13.5	11.3	18	-	12	1/2	5	中	石・長・雲・結・赤	5YR6/6	7.5YR6/6	器形に歪みがあるため反転復元とした。口径等に誤差あり。一部合成復元。外面煤付着。炉周辺土器群・NEブロック床面・畦出土。
20	W-IV	SB01	甕	19.3	16.4	-	-	5.1	1/6	2.8	少	石・雲・結・赤	7.5YR7/6	7.5YR6/6	35と同一個体? NEブロック床面直上。
21	W-IV	SB01	甕	-	-	16.8	-	12.3	1/8	5.6	多	石・雲・結・赤	2.5YR6/6	10YR7/3	上下逆の可能性あり。東隅土器群・SEブロックPit3。
22	W-IV	SB01	甕	11.9	8.9	-	-	2.4	1/10	1.4	少	石・雲・角・赤	7.5YR6/4	7.5YR6/4	小破片のため口径の誤差は大きいと思われる。備中から備後にかけての搬入品と思われる。SWブロック。
23	W-IV	SB01	甕	14	9.8	-	-	2.2	1/11	1	中	石・雲・赤	10YR7/4	7.5YR7/4	外面磨減のため調整不明。SWブロック床面直上。
24	W-IV	SB01	甕	14.7	12.9	-	-	2.5	1/6	1.2	少	石・雲・結・赤	5YR7/4	7.5YR7/3	口～頸部外面被熱・煤付着。NWブロック。
25	W-IV	SB01	甕	18.6	15.1	-	-	2.8	1/16	1.1	少	石・長・雲・角・赤	5YR5/4	7.5YR6/4	破片のため径・傾きに誤差の可能性あり。讃岐? 布留式甕の影響? 口～頸部外面被熱。SWブロック。
26	W-IV	SB01	甕	15.5	13.6	-	-	2.9	1/10	1.5	少	長・雲・赤・黒	5YR6/6	5YR5/6	外面煤付着。SEブロック第2層。
27	W-IV	SB01	甕	8.3	7.5	-	-	4.8	1/4	3	多	石・雲・結・赤・黒	10YR7/4	10YR7/4	外面剥離のため調整不明。NWブロック第1層。
28	W-IV	SB01	甕	-	13	-	-	3.3	1/9	3	多	石・長・雲・赤	10YR4/2	5YR6/6	内外面ともに磨減のため調整不明。SEブロック第1層。
29	W-IV	SB01	甕	-	16.2	-	-	4.4	1/12	0.8	少	石・雲・角・赤	5YR6/6	7.5YR5/4	外面焼成・煤あり。25と胎土似ている。同一個体? 讃岐? 小破片のため頸部径の誤差は大きいと考えられる。NEブロック床面直上・SEブロックPit3。

番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
1	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	タタキ→ハケ →ナデ・タタキ →ハケ(7条/cm)	指オサエ→ナ デ	-	-	-	-
2	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	-
3	ナデ	指オサエ→ナ デ	ナデ	板ナデ	ハケ(10条/cm) →ナデ	板ナデ	-	-	-	-
4	-	-	ハケ(5条/cm) →ナデ	ハケ(5条/cm) →ミガキ(3mm)	-	-	-	-	-	-
5	-	-	ハケ(5条/cm) →ミガキ(2~ 3mm)	板ナデ(幅1.5 cm)	タタキ(3条/cm) →ハケ(7条/0.5 cm)→ミガキ(2 ~3mm)	指オサエ→ケ ズリ	-	-	-	-
6	-	-	ハケ(6条/0.5 cm)→ミガキ(4 mm)	板ナデ(幅1.5 cm)	タタキ(3条/1 cm以上)→ハケ (6条/0.5cm)→ ミガキ(3~5mm)	指オサエ→ケ ズリ	-	-	-	-
7	-	-	-	-	ハケ(8条/cm)→ ナデ	ハケ(8条/cm) →ナデ	タタキ(2条/cm) →ハケ(8条/cm) →ナデ	ハケ(8条/cm) →ナデ	ハケ(8条/cm) →ナデ	指オサエ→ナ デ
8	-	-	-	-	-	-	ハケ(9条/cm)→ ミガキ(2~3mm)	指オサエ→ケ ズリ	ハケ(9条/cm) →ミガキ(2~3 mm)	指オサエ→ケ ズリ
9	-	-	-	-	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ	ナデ	ナデ
10	-	-	-	-	-	-	ハケ(6条/cm)→ ナデ	ケズリ→ナデ	ナデ	ケズリ→ナデ
11	-	-	-	-	-	-	ハケ(7条/1.4 cm)	ケズリ	板ナデ	ケズリ
12	-	-	-	-	-	-	ハケ(8条/cm)→ ナデ	指オサエ→ナ デ	ナデ?	指オサエ→ナ デ
13	板ナデ・凹線 状沈線1条	板ナデ	板ナデ	板ナデ	ハケ(8条/cm) →板ナデ(幅1.1 cm以上)	指オサエ→板 ナデ(幅1.8cm)	ハケ(8条/cm) →板ナデ(幅1.1 cm以上)	指オサエ→ケ ズリ	-	-
14	ナデ	ナデ	タタキ(3条/ cm)→ハケ(6 条/cm)	ナデ	タタキ(3条/cm) →ハケ(6条/cm)	ケズリ→指オ サエ	タタキ(3条/cm) →ハケ(6条/cm)	ケズリ→指オ サエ	タタキ(3条/ cm)→ハケ(6 条/cm)	ケズリ→指オ サエ
15	-	-	-	-	タタキ(3条/cm) →ハケ(8条/cm) →ナデ	ケズリ→ナデ	タタキ(3条/cm) →ハケ(8条/cm) →ナデ	ケズリ→ナデ	-	-
16	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(14条/cm)	指オサエ?	-	-	-	-
17	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(8条/cm)	指オサエ→ケ ズリ	-	-	-	-
18	ナデ	磨減不明。ハ ケ?	タタキ(2条/ cm)→ナデ	磨減不明。ハ ケ?	タタキ(2条/cm) →ナデ	指オサエ→ナ デ	-	-	-	-
19	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(9条/cm)→ ナデ・ハケ(9条/ cm)?	指オサエ→ケ ズリ	ハケ(9条/cm)?	指オサエ→ケ ズリ	-	-
20	ナデ	ハケ(5条/cm) →ナデ	ハケ(5条/cm) →ナデ	ハケ(5条/cm) →ナデ	ハケ(5条/cm)→ ナデ	指オサエ→ナ デ	-	-	-	-
21	-	-	-	-	タタキ(3条/cm) →ハケ(9条/cm)	ケズリ→ナデ	ハケ(9条/cm)→ ナデ	ケズリ	-	-
22	ナデ	ナデ	ナデ	板ナデ	板ナデもしくは ハケ(単位不明)	板ナデ	-	-	-	-
23	ナデ	ハケ(5条/cm) →ナデ	タタキ→ハケ (5条/cm)	指オサエ	-	-	-	-	-	-
24	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	-	-	-	-
25	ナデ	ハケ(4条/cm) →ナデ	ナデ	ハケ(4条/cm) →ナデ	ナデ	ハケ(4条/cm) →ナデ	-	-	-	-
26	凹線状沈線2 条	ナデ→ハケ(9 条/cm)	ナデ	ナデ→ハケ(9 条/cm)	ハケ(9条/cm)	ケズリ	-	-	-	-
27	板ナデ(幅0.8 cm以上)	指オサエ→板 ナデ(幅0.8cm 以上)	板ナデ(幅0.8 cm以上)	指オサエ→板 ナデ(幅0.8cm 以上)	板ナデ(幅0.8cm 以上)	指オサエ→板 ナデ(幅0.8cm 以上)	-	-	-	-
28	-	-	-	-	板ナデ?	-	-	-	-	-
29	-	-	ナデ	ナデ	ハケ(17条/cm) →ナデ	指オサエ→ナ デ	-	-	-	-

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
30	W-IV	SB01	甗	15.4	12.7	-	-	6.8	1/4	3	中	石・雲・結・赤・黒	10YR7/3	10YR7/3	東隅土器群・SEブロック床面直上・畦出土。
31	W-IV	SB01	甗	15.8	13.5	-	-	6.9	1/5	3	多	石・雲・結・赤	2.5Y6/6	2.5Y6/6	外面煤付着。外面磨滅のため部分的に調整不明。SEブロックPit3。
32	W-IV	SB01	甗	22.1	19	-	-	5	1/9	2	少	石・雲・結・赤	10YR6/2	7.5YR7/4	内外面煤付着。2力所深い工具痕あり。SEブロック床面直上。
33	W-IV	SB01	甗	16.6	14.7	-	-	9	1/3	5	多	石・雲・結・赤・黒	7.5YR7/4	10YR7/4	体部外面煤付着。東隅土器群。
34	W-IV	SB01	甗	16.2	14.2	-	-	4.7	口縁破片	1.5	中	石・雲・赤	7.5YR7/6	5YR6/6	破片のため径・傾き不正確。SEブロック第1層。
35	W-IV	SB01	甗	-	15	-	-	7.3	1/7	3.4	少	石・雲・結・赤	7.5YR7/4	7.5YR6/6	20と同一個体？破片のため径・傾きに誤差の可能性あり。畦出土。
36	W-IV	SB01	甗	15.2	15.3	-	-	5.2	1/4	3.2	少	石・雲・結・赤	10YR8/3	7.5YR7/4	SEブロック第2層。
37	W-IV	SB01	甗	12.7	11.1	-	-	2.1	1/18	3	少	石・雲・黒	10YR5/3	10YR5/3	口縁外面煤付着。SEブロック床面直上。
38	W-IV	SB01	甗	16.3	14.5	-	-	2.5	1/13	3	中	石・長・雲・赤・黒	7.5YR6/6	5YR6/6	内外面磨滅のため調整不明。SEブロック床面直上。
39	W-IV	SB01	甗	15.7	13.5	-	-	4.1	1/18	3.5	中	石・雲・結・赤	2.5Y7/2	10YR8/3	外面煤付着。
40	W-IV	SB01	甗	-	14.6	-	-	7.2	1/8	2.5	中	石・雲・結	2.5YR5/8	2.5YR5/8	内外面磨滅著しく調整不明。2.5ミリ大の礫あり。NEブロックPit2。
41	W-IV	SB01	甗	-	-	-	5.1	1.7	1	5	少	石・長・赤	2.5Y3/1	5YR5/4	SEブロック第2層。
42	W-IV	SB01	甗	-	-	-	2.8	-	3/5	2	中	石・雲・赤・黒	5YR5/6	5YR5/6	外面黒斑あり。NWブロック第1層。
43	W-IV	SB01	甗	-	16.4	-	-	2.2	1/8	3.4	少	石・雲・結・赤	10YR8/3	10YR7/4	小破片のため頸部径の誤差が大きいのと思われる。SEブロック床面直上。
44	W-IV	SB01	甗	-	-	-	5	4.7	1/3	2.5	少	石・雲・赤・黒	2.5Y4/1	10YR6/4	外面煤付着。SWブロック床面直上。
45	W-IV	SB01	甗	-	-	-	5	11.3	2/5	5.2	少	石・雲・結・赤	10YR8/2	10YR8/3	一部体部外面被熱。SEブロック第1層・東隅土器群。
46	W-IV	SB01	鉢	10.7	-	-	1.2	4.7	2/3	2.5	中	石・雲・結・赤・黒	5YR6/6	7.5YR6/4	体部外面煤付着。
47	W-IV	SB01	鉢	-	-	8	-	4.3	1/4	4.1	少	石・雲・結・赤	10YR7/3	10YR7/2	破片のため傾き・径に誤差あり。SWブロック床面直上。
48	W-IV	SB01	(有孔)鉢	-	-	-	1.9	2.8	1/2	2	中	石・長・雲・結・赤・黒	7.5YR6/4	7.5YR6/6	一部合成・一部外面磨滅のため調整不明。底部外面煤付着。SEブロック第2層・SEブロック床面直上。
49	W-IV	SB01	鉢	27.1	-	-	-	5.4	1/20	2	中	石・雲・赤	5YR6/8	5YR7/8	内外面ともに磨滅著しく調整不明。小片のため径不正確。SEブロック第1層。
50	W-IV	SB01	鉢	9.6	-	-	1	6.2	3/4	4	少	石・雲・赤	7.5YR8/3	10YR8/2	内面体部から底部に黒斑あり。SEブロック第2層。
51	W-IV	SB01	鉢	-	-	-	4.8	1.5	1/4	2	少	石・雲・赤・黒	10YR3/1	7.5YR4/2	SEブロック床面直上。
52	W-IV	SB01	鉢	41	-	-	-	7.9	1/27	5.8	中	石・雲・結・赤	5YR7/6	5YR6/6	磨滅・剥離のため内外面ともに調整不明。東隅土器群。
53	W-IV	SB01	高杯(鉢?)	13.8	-	-	-	3.4	3/4	8	中	石・雲・結・赤	5YR5/8	5YR5/8	器形に歪みがあり口径は誤差あり。内外面磨滅のため調整不明。NEブロック床面直上・SEブロックPit3。
54	W-IV	SB01	高杯	25.9	-	-	-	2.2	1/24	3	中	石・長・雲・黒	5YR6/4	5YR5/4	畦出土。
55	W-IV	SB01	高杯	-	3.9	-	-	3.5	1/9	2.2	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/4	5YR6/4	破片のため径・傾き等に誤差の可能性あり。NEブロック第2層。
64	W-IV	SD01	壺(高杯?)	20.9	-	-	-	1.5	1/12	3	少	石・長・雲・黒	5YR6/6	5YR6/6	内外面とも磨滅のため調整不明。上下逆？高杯脚端部の可能性がある。P10・11。
65	W-IV	SD01	壺	25.3	-	-	-	3.6	1/2	2.6	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/4	7.5YR7/4	西部瀬戸内(山口県?)地域の模倣？北方土器群NEブロック。
66	W-IV	SD01	壺	22.4	-	-	-	2.5	1/4	2	中	石・雲・結・赤・黒	5YR6/6	5YR6/6	内外面ともに部分的に磨滅のため調整不明。内面に黒斑あり。高杯の杯部または脚部の可能性あり。P1。
67	W-IV	SD01	壺	19.7	-	-	-	3.5	1/4	5	中	石・雲・結・赤	10YR7/2	2.5YR6/6	伊予東部の影響。P3。
68	W-IV	SD01	壺	-	-	-	-	7.5	1/5	8	多	石・長・雲・結・赤	10YR6/4	7.5YR6/4	外面磨滅のため調整不明。内面部分的に磨滅のため調整不明。内面黒斑あり。P3。

番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
30	ハケ(4条/0.5cm)	ハケ(4条/0.5cm)	ナデ→口縁部指オサエ	ハケ(4条/0.5cm)	タタキ(3条/1cm以上)→ハケ(4条/0.5cm)	指オサエ→ケズリ・ナデ	-	-	-	-
31	凹線状沈線3条	ナデ→ハケ(19条/1.2cm)	タタキ(3条/cm)→ナデ	ナデ→ハケ(19条/1.2cm)	タタキ(3条/cm)→ハケ(6条/0.5cm)・ハケ(9条/0.5cm)	指オサエ→ケズリ	-	-	-	-
32	ハケ(7条/cm)	ハケ(7条/cm)	タタキ(3条/1cm以上)	ハケ(7条/cm)	タタキ(3条/1cm以上)	指オサエ→ケズリ	-	-	-	-
33	ナデ	ハケ(5条/0.6cm)	タタキ(4条/2cm)	ハケ(5条/0.6cm)	タタキ(4条/2cm)	指オサエ・板ナデ	-	-	-	-
34	ハケ(6条/cm)	ナデ	ハケ(6条/cm)	ナデ	ハケ(6条/cm)	指オサエ→ナデ	-	-	-	-
35	-	-	ハケ(5条/cm)→ナデ	ハケ(5条/cm)→ナデ	ハケ(5条/cm)→ナデ	指オサエ→ナデ	-	-	-	-
36	ナデ→ハケ(10条/cm)	ハケ(10条/cm)→ナデ	タタキ(3条/cm)→ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ	タタキ(3条/cm)→ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ	-	-	-	-
37	凹線状沈線1条	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(14条/cm)	ケズリ	-	-	-	-
38	凹線状沈線2条	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(6条/0.7cm)	ケズリ	-	-	-	-
39	ハケ(7条/0.6cm)	ハケ(7条/0.6cm)	ハケ(7条/0.6cm)	ハケ(7条/0.6cm)	ハケ(7条/0.6cm)	ケズリ	-	-	-	-
40	-	-	ナデ	ナデ	ナデ・ハケ(7条/0.6cm)	ナデ	-	-	-	-
41	-	-	-	-	-	-	指オサエ	ケズリ	指オサエ	ナデ
42	-	-	-	-	-	-	ハケ(7条/cm)	ハケ(7条/cm)	ナデ→ハケ(6条/cm)	ハケ工具による押さえ
43	-	-	ナデ	ハケ(6条/cm)→ナデ	タタキ(2条/cm)→ナデ	指オサエ→ナデ	-	-	-	-
44	-	-	-	-	-	-	ハケ(5条/cm)	ケズリ	ハケ(5条/cm)→ナデ	ケズリ
45	-	-	-	-	ハケ(7条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	ハケ(7条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	ナデ	ケズリ→ナデ
46	ナデ	ナデ	-	-	タタキ(2条/cm)→指オサエ→ケズリ	板ナデ(幅1.5cm)	タタキ(2条/cm)→指オサエ→ケズリ	板ナデ(幅1.5cm)	タタキ(2条/cm)→指オサエ→ケズリ	板ナデ(幅1.5cm)
47	-	-	-	-	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	-	-
48	-	-	-	-	-	-	タタキ(3条/1.5cm)	ケズリ	タタキ(3条/1.5cm)	ケズリ
49	ナデ	ナデ	-	-	ナデ・タタキ(2条/cm)	ハケ(4条/cm)→ナデ	-	-	-	-
50	ナデ	ハケ(10条/cm)→ナデ	-	-	ハケ(10条/cm)→ナデ	指オサエ→ナデ	ハケ(10条/cm)→ナデ	指オサエ→ナデ	ケズリ→ナデ	板ナデ
51	-	-	-	-	-	-	板ナデ(幅0.6cm)	ミガキ(5mm)	板ナデ(幅0.6cm)	ミガキ(5mm)
52	ナデ	ナデ	-	-	タタキ(2条/cm)→ナデ	ハケ(6条/cm)→ナデ	タタキ(2条/cm)→ハケ(6条/cm)	ハケ(6条/cm)	-	-
53	ナデ	ナデ	-	-	板ナデ(幅1.2cm?)	ケズリ→ミガキ(3mm)	板ナデ(幅1.2cm?)	ケズリ→ミガキ(3mm)	-	-
54	ナデ	ナデ→ミガキ(4~6mm)	ミガキ(1~2mm)	ナデ→ミガキ(4~6mm)・ナデ→指オサエ→ハケ?	-	-	-	-	-	-
55	-	-	-	-	-	-	ナデ	ケズリ→ナデ	-	-
64	凹線状沈線1条	ナデ	ナデ・ハケ(10条/1.2cm)	ハケ(単位不明)	-	-	-	-	-	-
65	ナデ→刺突文・ハケ(7条/cm)・ハケ(7条/cm)→ナデ	板ナデ	-	-	-	-	-	-	-	-
66	ハケ(5条/0.5cm)	板ナデ(幅1.5cm)	-	板ナデ(幅1.5cm)	指オサエ→ナデ 凹線状沈線1条・ハケ(条数不明)→ミガキ(1~3mm)	板ナデ(幅1.5cm)	-	-	-	-
67	ナデ→波状文	ナデ	ナデ	ハケ(7条/cm)→ナデ	-	-	-	-	-	-
68	-	-	-	ハケ(条数不明)	ハケ(条数不明)	指オサエ→ケズリ	-	-	-	-

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
69	W-IV	SD01	壺	-	-	-	4	9	4/5	15	中	長・結	5YR4/6	2.5YR5/6	P10・11。
70	W-IV	SD01	壺	-	-	-	4.7	10.1	1	8	少	石・雲・結・赤	7.5YR7/6	5YR6/6	一部内面体部下から底部磨滅のため調整不明。P9。
71	W-IV	SD01	壺	-	-	-	-	8.3	1/10	3	中	石・雲・結・赤	2.5Y5/1	5YR6/6	内面黒化している。75と同一個体？P10・11。
72	W-IV	SD01	壺(甕?)	-	-	-	3.6	2.8	1/2	3	中	石・雲・結・赤	N4/0	10YR5/2	内面黒化している。外面煤附着。北方土器群SWブロック。
73	W-IV	SD01	壺	-	-	-	4.6	4.4	1/6	2.8	中	石・雲・角・赤	7.5YR6/6	2.5YR6/4	北方土器群SEブロック。
74	W-IV	SD01	壺	-	-	-	5.4	3.8	1/3	3.2	中	石・長・雲・赤	7.5YR6/6	5YR5/6	内面磨滅のため調整不明。P10・11。
75	W-IV	SD01	壺	-	-	-	2	6.4	2/3	2	中	石・雲・結・赤・黒	2.5Y4/1	5YR5/6	一部外面磨滅のため調整不明。外面ハケの工具痕が深く入る。外面煤附着。71と同一個体？P10・11。
76	W-IV	SD01	壺	-	-	-	4.4	2.6	7/8	6	多	石・長・雲・結	10YR8/2	10YR7/2	内外面(底部外面は全体)に黒斑あり。北方土器群SWブロック。
77	W-IV	SD01	壺	-	-	-	8.4	6.3	1	4.8	多	石・雲・結・赤	2.5Y6/1	5YR6/6	一部内面に黒斑あり。P2。
78	W-IV	SD01	壺	-	-	-	5.4	5.6	1/5	5.8	中	石・雲・結・赤	2.5Y6/1	10YR8/3	焼成時破裂痕あり。北方土器群NWブロック。
79	W-IV	SD01	壺	-	-	-	5.6	2.3	1/2	5.4	中	石・長・雲・角・赤	5YR6/6	5YR6/6	外面底部に黒斑あり。讃岐？北方土器群SWブロック・P7。
80	W-IV	SD01	壺	-	-	-	3.6	3.8	1	5	中	石・長	5YR5/6	2.5YR4/6	外面煤附着。P10・11・P4。
81	W-IV	SD01	甕	16.4	13.4	-	3.6	20	1/2	8	中	石・長・雲・角・赤	5YR6/6	5YR5/6	口縁部反転復元・底部一部口縁部外面に煤附着。外面体下部から底部にかけて煤附着。内面に一部お焦げ附着。讃岐？上下別個体の可能性もある。P6。
82	W-IV	SD01	甕	15.6	-	-	-	1.8	1/12	2	多	石・雲・結・赤	5YR7/6	5YR7/6	内面磨滅のため調整不明。外面煤附着。北方土器群SEブロック。
83	W-IV	SD01	甕	16	-	-	-	1.1	1/8	7	中	石・長・結	5YR6/6	5YR5/6	内外面磨滅のため調整不明。布留甕の影響？北方土器群SWブロック。
84	W-IV	SD01	甕	16	13.6	17.2	-	15.7	1/3	1.5	中	石・長・雲・角・赤	2.5YR5/8	5YR6/8	内外面ともに磨滅のため調整不明。外面体部下半煤附着。讃岐？P6。
85	W-IV	SD01	甕	-	-	16.8	3.7	19.1	1/2	7	多	石・雲・結・赤	5YR5/6	5YR6/8	P5。
86	W-IV	SD01	甕	-	12	16.8	-	12.6	1/2	2.2	中	石・雲・結・赤	7.5YR5/4	5YR5/6	一部合成・P7。
87	W-IV	SD01	甕	16.4	13.7	21.5	-	18	2/5	3	中	石・長・雲・角・赤	7.5YR6/4	5YR6/6	内面部分的に欠損・磨滅のため調整不明。外面煤附着。讃岐？(B類土器とは角閃石の量が違うか) P10・11。
88	W-IV	SD01	甕	9.4	9.2	11.8	-	12.4	1/2	6	多	石・雲・結・赤	5YR5/6	5YR5/6	体部内外面に黒斑あり。歪みのため体部最大径の誤差は大きいと思われる。P8。
89	W-IV	SD01	甕	-	13.4	18.8	-	9.4	1/6	3.5	中	石・長・雲・結・赤	7.5YR6/6	5YR6/6	外面胴部中位にたてに2本の線刻？あり。体部外面煤附着。外面磨滅のため部分的に調整不明。
90	W-II	SD01	甕	18	16.1	-	-	9.2	1/6	4.2	中	石・長・雲・角・赤	10YR7/4	7.5YR6/3	外面口縁から頸部にかけて煤附着。讃岐？
91	W-IV	SD01	甕	15.9	13.6	-	-	4.5	1/12	3	少	石・雲・結・赤・黒	5YR6/4	5YR6/6	外面磨滅のため調整不明。外面煤附着。北方土器群SEブロック。
92	W-IV	SD01	甕	-	-	18.6	-	12.6	1/3	3	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/3	10YR6/4	外面全体に煤附着。内面に黒斑あり。P1。
93	W-IV	SD01	甕	18.2	14.6	19.1	-	11.3	1/8	6.5	多	石・雲・結・赤・黒	10YR7/4	5YR6/8	外面煤附着。内面磨滅のため調整不明。P2。



番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
69	—	—	—	—	—	—	ハケ(11条/cm)	ケズリ	ナデ	ケズリ
70	—	—	—	—	タタキ(2条/cm)→ナデ	ハケ(6条/cm)	タタキ(2条/cm)→ハケ(9条/cm)→ナデ	ハケ(6条/cm)	ナデ	ハケ(6条/cm)
71	—	—	—	—	—	—	タタキ(単位不明)→ハケ(6条/cm)→ミガキ(3mm以上)	ケズリ	—	—
72	—	—	—	—	—	—	指オサエ→ハケ(9条/cm)→板ナデ(幅1cm以上)	指オサエ→板ナデ	板ナデ	指オサエ→板ナデ
73	—	—	—	—	—	—	ハケ(6条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	ナデ	ケズリ→ナデ
74	—	—	—	—	—	—	ハケ(単位不明)→ミガキ(2mm)	—	ハケ(単位不明)→ミガキ(2mm)	—
75	—	—	—	—	—	—	タタキ(2条/0.8cm以上)→ハケ(単位不明)→ミガキ(2~3mm)	ケズリ	ハケ(単位不明)→ミガキ(2~3mm)	ケズリ
76	—	—	—	—	—	—	ハケ(7条/cm)	—	板ナデ	指オサエ→ナデ
77	—	—	—	—	—	—	ハケ(8条/cm)・ケズリ	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ
78	—	—	—	—	—	—	タタキ(2条/cm)→ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ	ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ
79	—	—	—	—	—	—	ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)
80	—	—	—	—	—	—	ハケ(16条/cm)	板ナデ	ナデ	板ナデ
81	ナデ	ハケ(6条/cm)→ナデ	ハケ(6条/cm)→ナデ	ハケ(6条/cm)→ナデ	ハケ(6条/cm)→ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ	タタキ(3条/cm)→ハケ(6条/cm)	ケズリ→指オサエ→ナデ	ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ
82	凹線状沈線1条	ナデ?	タタキ(3条/cm)→ナデ	ナデ?	—	—	—	—	—	—
83	凹線状沈線1条・ナデ	板ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—
84	ハケ(7条/cm)	ナデ	タタキ(2条/cm)→ハケ(7条/cm)	板ナデ	タタキ(2条/cm)→ハケ(7条/cm)	板ナデ	タタキ(2条/cm)	ケズリ	—	—
85	—	—	タタキ(2条/cm)→ハケ(10条/cm)→ナデ	指オサエ・ナデ	タタキ(2条/cm)→ハケ(10条/cm)→ナデ	ケズリ	タタキ(2条/cm)→ハケ(10条/cm)→ナデ	ケズリ	ナデ	ケズリ
86	—	—	タタキ(2条/cm)→ハケ(10条/cm)	ハケ(7条/cm)・指オサエ	タタキ(2条/cm)→ハケ(10条/cm)	ケズリ・指オサエ・ナデ	タタキ(2条/cm)→ハケ(10条/cm)	ケズリ・指オサエ・ナデ	—	—
87	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	タタキ(5条/2.0cm)→ハケ(8条/1.8cm)→ミガキ(2~3mm)	指オサエ→板ナデ(幅1.8cm)・ケズリ	タタキ(5条/2.0cm)→ハケ(8条/1.8cm)→ミガキ(2~3mm)	ケズリ	—	—
88	タタキ(3条/1.2cm以上)	ケズリ	タタキ(3条/1.2cm以上)	ケズリ	タタキ(3条/1.2cm以上)・タタキ(3条/1.0cm以上)→ハケ(5条/0.5cm)→ミガキ(2mm)	ケズリ	タタキ(3条/1.0cm以上)→ハケ(5条/0.5cm)→ミガキ(2mm)	ケズリ	—	—
89	—	—	タタキ(3条/1.0cm以上)→ハケ(5条/0.5cm)	板ナデ	タタキ(3条/1.0cm以上)→ハケ(5条/0.5cm)	指オサエ→ケズリ	タタキ(3条/1.0cm以上)→ハケ(5条/0.5cm)	指オサエ→ケズリ	—	—
90	ナデ	ナデ	ナデ	ケズリ→ナデ	ハケ(9条/cm)→ナデ	ケズリ	—	—	—	—
91	ナデ?	指オサエ→ケズリ	タタキ(3条/1.0cm以上)→ハケ(単位不明)	指オサエ→ケズリ	タタキ(3条/1.0cm以上)→ハケ(単位不明)	指オサエ→ケズリ	—	—	—	—
92	—	—	—	—	タタキ(2条/cm)→ハケ(9条/cm)	ケズリ	タタキ(2条/cm)→ハケ(9条/cm)	ケズリ	—	—
93	ナデ	ケズリ	タタキ(3条/0.8cm以上)→ハケ(11条/1.7cm)	ケズリ	タタキ(3条/0.8cm以上)→ハケ(11条/1.7cm)	ケズリ	—	—	—	—

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
94	W-IV	SD01	甗	16.5	12.6	17.4	-	9.6	1/3	5	中	石・長・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	外面に黒斑あり。P2。
95	W-IV	SD01	甗	-	-	18.4	-	9.4	1/6	1.5	中	石・雲・結・赤	7.5YR7/6	2.5YR5/6	外面磨滅のため調整不明。内面磨滅のため調整不明。体部片のため径・傾き不正確。上下も逆かも。P10・11。
96	W-IV	SD01	甗	-	13.2	-	-	7	1/3	2.5	中	石・雲・結・赤	5YR6/8	7.5YR7/6	体部片のため、径・傾き不正確。内外面ともに磨滅著しく調整不明。P9。
97	W-IV	SD01	甗	-	15	-	-	4	1/6	6.4	中	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	P10・11。
98	W-IV	SD01	甗(壺?)	-	-	-	4.4	2.6	1/3	4	中	石・雲・結	N5/0	10YR6/2	内面黒化している。外面煤付着。北方土器群SEブロック
99	W-IV	SD01	甗	-	-	-	3.8	3.2	1/3	3.4	少	石・雲・結・赤	2.5Y7/1	10YR8/2	北方土器群SWブロック。
100	W-IV	SD01	甗	-	-	-	6	4.9	2/5	5	中	石・雲・結	2.5Y2/1	7.5YR7/4	底部外面に黒斑あり。北方土器群SWブロック。
101	W-IV	SD01	甗	-	-	-	-	2.8	1/4	7.8	中	石・雲・結・赤	5YR6/4	5YR6/6	焼成時破裂痕あり。体部の可能性あり。破片のため、径・傾きに誤差の可能性あり。P9。
102	W-IV	SD01	鉢	32.6	-	-	-	8.1	1/19	3.8	少	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	径・傾きに誤差の可能性あり。P9。
103	W-IV	SD01	鉢	21	-	-	1.4	8.1	2/3	0.2	少	石・雲・結・赤	2.5YR6/6	5YR7/6	P9。
104	W-IV	SD01	鉢	17.3	-	-	-	8	1/4	1.8	中	石・雲・赤	7.5YR6/6	5YR6/6	P9。
105	W-IV	SD01	鉢	11.4	-	13.1	-	12.7	1/6	2.8	中	石・雲・赤	7.5YR6/6	7.5YR6/6	P9。
106	W-IV	SD01	鉢	19.2	-	-	1.3	6.9	1/3	9.2	中	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR7/6	内面剥離のため調整不明(ミガキらしき調整あり。)P2。
107	W-IV	SD01	鉢	-	-	-	2.3	6	1/2	1.5	中	石・長・雲・赤	5YR6/6	7.5YR6/6	外面に黒斑あり。P9。
108	W-IV	SD01	(有孔)鉢	-	-	-	2	6.2	1/3	2	中	石・長・雲・結・赤・黒	7.5YR6/4	5YR6/6	一部外面に黒斑あり。P9。
109	W-IV	SD01	鉢	11.3	-	-	2.9	6.4	1/4	2	少	石・雲・結・赤	5YR6/8	7.5YR6/6	一部P9。
110	W-IV	SD01	鉢(甗?)	-	-	-	-	6.7	1/4	2	中	石・雲・結・赤	7.5YR7/6	7.5YR7/6	磨滅・剥離のため、調整不明。P10・11。
111	W-IV	SD01	高杯	21.7	-	-	-	1.8	1/5	1.8	中	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	上下逆?高杯脚端部の可能性がある。P10・11。
112	W-IV	SD01	鉢	-	-	-	3	4.4	1	3.4	中	石・雲・結・赤	10YR7/3	5YR6/6	一部北方土器群NWブロック。
113	W	SM01	壺	20.9	10.7	30.8	7.3	37.7	9/10	3.5	少	石・長・雲・赤・黒	10YR4/2	5YR6/8	頸部内面磨滅のため調整不明。磨滅のため部分的に調整不明。体~底部外面に煤付着。器形にゆがみがあるため頸部径・胴部径に誤差あり。
114	W	SM01	壺	15.6	11.9	30.3	9.6	34.6	1/2	24	少	石・雲・結・赤	10YR3/1	5YR5/6	一部合成・外面底部付近と内面体部~底部に黒斑あり。P34・P34のへ・P34のト。
115	W	SM01	壺	12	6.6	-	-	8.9	1/5	1.5	中	石・雲・結・赤・黒	5YR6/6	5YR5/4	外面に煤付着。口径頸部径ともに小片のため誤差が大きいと思われる。P37の口。
116	W	SM01	壺(甗?)	14.3	-	-	-	2	1/5	5.8	少	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	外面煤付着。P31のト。
117	W	SM01	壺	16.2	-	-	-	3.5	1/12	2	中	石・長・雲	5YR6/4	2.5YR6/6	外面磨滅のため調整不明。P31の口。
118	W	SM01	壺	15.8	8.9	-	-	10.9	1/3	4	少	石・雲・結・赤	5YR3/3	7.5YR6/4	反転復元(一部合成)。外面黒斑あり。粘土紐痕あり。P31の口。
119	W	SM01	壺	12.6	-	-	-	3.2	1/5	1.5	少	石・雲・結	5YR6/6	5YR6/6	内外面ともに磨滅のため著しく調整不明。P34。
120	W	SM01	壺(甗?)	14.7	-	-	-	2.5	1/8	4.4	少	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	P31のル。
121	W	SM01	壺	14.3	8.8	-	-	6.6	2/5	1.5	中	石・雲・結・赤	5YR5/6	7.5YR6/6	内外面ともに磨滅のため調整不明。P35・P35のト。

番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
94	ナデ	板ナデ(単位不明)	タタキ(4条/cm)→ハケ(8条/cm)	指オサエ→ナデ	タタキ(4条/cm)→ハケ(8条/cm)	ケズリ(単位不明)→ナデ	-	-	-	-
95	-	-	-	-	-	-	タタキ(2条/cm)→ハケ(6条/cm)→ミガキ(3mm)	-	-	-
96	-	-	-	-	タタキ(2条/cm)→ハケ(7条/cm)	ナデ?	-	-	-	-
97	-	-	ハケ(4条/cm)	指オサエ・ナデ	タタキ(2条/cm)→ナデ	ケズリ	-	-	-	-
98	-	-	-	-	-	-	ハケ(5条/cm)	指オサエ→ケズリ	板ナデ(単位不明)	指オサエ→ケズリ
99	-	-	-	-	-	-	タタキ(3条/cm)→ハケ(6条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	ナデ	ケズリ→ナデ
100	-	-	-	-	-	-	ハケ(6条/cm)→板ナデ	ナデ	ハケ(6条/cm)	指オサエ
101	-	-	-	-	-	-	タタキ(2条/cm)→ナデ	ケズリ	-	-
102	ナデ	ハケ(8条/cm)→ナデ	-	-	タタキ(2条/cm)→ナデ	ハケ(8条/cm)→ナデ	ナデ	ハケ(8条/cm)→ナデ	-	-
103	ナデ	ナデ	-	-	タタキ(3条/cm)→板ナデ	ハケ(11条/cm)→ナデ	タタキ(3条/cm)→板ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
104	タタキ(2条/cm)→ハケ(7条/cm)	ナデ・板ナデ(幅1.2cm)	-	-	タタキ(2条/cm)→ハケ(7条/cm)	ナデ・板ナデ(幅1.2cm)	タタキ(2条/cm)→ハケ(7条/cm)	ナデ・板ナデ(幅1.2cm)	-	-
105	タタキ(3条/cm)→ナデ→ハケ(6条/cm)	ハケ(6条/cm)→指オサエ・ナデ	-	-	タタキ(3条/cm)→ナデ→ハケ(6条/cm)	ハケ(6条/cm)→指オサエ・ナデ	タタキ(3条/cm)→ナデ→ハケ(6条/cm)	ナデ	-	-
106	ナデ	ナデ	-	-	ケズリ→ハケ(8条/cm)→ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ(ミガキ?)	ケズリ→ハケ(8条/cm)→ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ(ミガキ?)	ナデ	ケズリ→指オサエ→ナデ(ミガキ?)
107	-	-	-	-	-	-	タタキ(3条/cm)	ハケ(8条/cm)→ナデ	ナデ	ナデ
108	-	-	-	-	-	-	ハケ(7条/1.2cm)・タタキ(3条/1.0cm以上)	板ナデ(幅1.2cm)	ミガキ(2.0~4.0mm)	板ナデ(幅1.2cm)
109	タタキ(3条/cm)→ナデ	ハケ(9条/cm)→指オサエ・ナデ	-	-	タタキ(3条/cm)→ナデ	ハケ(9条/cm)→指オサエ・ナデ	タタキ(3条/cm)→ナデ	ハケ(9条/cm)→指オサエ・ナデ	タタキ(3条/cm)→ナデ	ハケ(9条/cm)→指オサエ・ナデ
110	-	-	-	-	-	-	ハケ(9条/cm)	ハケ(5条/cm)	-	-
111	ハケ(8条/cm)→ミガキ?	ハケ(8条/cm)→ミガキ(3mm)	-	-	-	-	-	-	-	-
112	-	-	-	-	-	-	タタキ(3条/cm)→指オサエ・ナデ	ハケ(5条/cm)	タタキ(3条/cm)→指オサエ・ナデ	ハケ(5条/cm)
113	凹線状沈線3条	ナデ	ナデ・ハケ(条数不明)	ハケ(6条/cm)	貼付突帯刻み目文・ミガキ(3mm)	指オサエ→ケズリ・指オサエ→ケズリ→指オサエ・ナデ	指オサエ→ミガキ(3~4mm)	指オサエ→ケズリ	指オサエ→ナデ?	指オサエ→ケズリ
114	ナデ・凹線状沈線2条	板ナデ(幅1.5cm以上)	指オサエ→板ナデ(単位不明)・板ナデ(幅1.2cm以上)	板ナデ(幅1.5cm以上)・指オサエ→ナデ	タタキ(3条/cm)→板ナデ(単位不明)→ミガキ(2mm以上)	ナデ・ケズリ(幅2cm以上)	タタキ(3条/cm)→板ナデ(幅2cm以上)	ケズリ(幅2cm以上)	板ナデ(単位不明)	ケズリ(幅2cm以上)
115	ナデ・ハケ(条数不明)→ナデ	ナデ	ハケ(7条/cm)・ナデ→刻み目文	板ナデ・指オサエ→ナデ	-	-	-	-	-	-
116	ナデ	ナデ	ハケ(4条/cm)→ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	-
117	凹線状沈線2条	ナデ	ナデ・ハケ(7条/cm)	指オサエ→ナデ・板ナデ	-	-	-	-	-	-
118	ナデ	ナデ	指オサエ→ナデ・ハケ(14条/cm)→ナデ・ハケ(14条/cm)→圧痕?・(ヨコ)ナデ	指オサエ→ナデ・ケズリ→ナデ	-	-	-	-	-	-
119	ナデ	ナデ	ハケ(条数不明)	ハケ?	-	-	-	-	-	-
120	ナデ	板ナデ	ハケ(12条/cm)→ナデ	指オサエ→ナデ	-	-	-	-	-	-
121	ナデ・指オサエ	ナデ	ナデ・ハケ(4条/0.6cm)	ハケ(6条/cm)・指オサエ?	-	-	-	-	-	-

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
122	W	SM01	壺	15.1	8.8	—	—	4.4	1/8	4	中	石・雲・結	7.5YR6/4	7.5YR6/6	一部合成・外面頸部は磨滅のため調整不明。P37の口。
123	W	SM01	壺	16.5	13.6	30.1	—	29.5	1/5	5.8	多	石・雲・結・赤	2.5YR5/6	5YR5/6	一部合成・復元の歪みが大きく、体部最大径などの誤差は大きいと思われる。P7・P8・P12下層。
124	W	SM01	壺	19.1	—	—	—	3.7	1/5	2.8	少	石・雲・結・赤	5YR5/6	5YR6/6	P23。
125	W-II	SM01	壺	12.2	7.9	—	—	3.8	1/4	3	中	石・長・雲・結・赤	7.5YR6/6	7.5YR6/4	
126	W II	SM01	壺(甕?)	—	15.6	—	—	6.6	1/5	1.8	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/6	5YR6/6	外面黒斑あり。P23下層。
127	W	SM01	壺	—	13.5	11	—	19.8	1/4	4.5	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/6	5YR6/6	一部合成・体部下半に煤付着。歪みのため頸部径と胴部最大径には誤差あり。内外面ともに部分的に調整不明。P21。
128	W-II	SM01	壺	—	—	19.4	—	9.8	1/5	2	中	石・長・赤	10YR6/4	5YR4/6	外面磨滅・剥離のため調整不明、煤付着。
129	W	SM01	壺	—	—	—	—	8.8	1/5	3.2	少	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	P31のル。P31の口。
130	W	SM01	壺	—	—	14	—	7.6	1/2	4.8	少	石・雲・結	5YR5/8	5YR5/8	一部合成・胴下部内外面に煤付着。P23下層。
131	W	SM01	壺	—	—	21.3	—	11.6	9/10	2	中	石・雲・赤	5YR5/6	5YR6/6	一部体部外面に煤付着。P31のル・P34・P37の口。竹管文で蛇行させた紋様で龍を表現か？
132	W	SM01	壺	—	—	—	—	6.7	2/5	4	中	石・長・雲・結・赤・黒	10YR4/1	5YR6/6	一部合成・P34。
133	W	SM01	壺	—	—	—	—	5.7	1/8	4.4	少	石・雲・結・赤	2.5Y4/1	7.5YR5/4	内外面に黒斑あり。外面に煤付着。P37の口。
134	W	SM01	壺	—	—	—	5.3	1.9	3/5	3	中	雲・赤	7.5YR6/4	7.5YR5/6	P21。
135	W	SM01	壺	—	—	—	4.9	4.8	2/3	4	中	長・雲・結・赤	2.5YR6/8	2.5YR5/6	一部内面に黒斑あり。P12。
136	W-II	SM01	壺	—	—	22.2	—	11.5	1/4	6	中	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/4	137と同一個体？
137	W-II	SM01	壺	—	—	22.6	—	15.6	1/3	4	中	石・雲・結・赤	10YR6/4	7.5YR6/6	136と同一個体か？
138	W	SM01	壺	—	—	—	3.8	9.7	1/5	3.6	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/3	5YR6/6	外面体～底部にかけて煤付着。外面一部剥離のため調整不明。焼成時破裂痕あり。P31のト。
139	W	SM01	壺	—	—	—	2.4	9.1	1/4	4	中	石・雲・赤	2.5Y4/1	5YR5/6	外面に煤付着。焼成時破裂痕あり。P37の口。
140	W	SM01	壺	—	—	—	4	5.5	3/5	2.5	少	石・長・その他	10YR7/4	7.5YR6/6	チャートを含む？ P20。
141	W	SM01	壺	—	—	28.2	8	18.1	1/3	6.8	少	石・雲・結・赤・その他	5YR6/6	5YR6/6	一部内外面とも磨滅のため調整不明。砂岩を含む？ P20・P30。
142	W	SM01	壺	—	—	—	14.1	8.3	1/3	3.5	中	石・長・雲・結・赤・その他	5YR5/4	5YR6/6	底部ほぼ完形だがゆがみが酷いため磨滅のため調整不明。砂岩。P24、P31のト。
143	W	SM01	甕	13.9	11.9	—	—	17.9	1/5	3	少	石・長・雲・角・赤	2.5Y5/1	7.5YR7/4	外面部分的に煤付着。P35のト。
144	W	SM01	甕	14.7	12.5	18.3	—	16.5	1/4	2	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/4	5YR6/6	P21。
145	W	SM01	甕	10.5	9.5	12.6	3.6	15.4	1	8	少	石・長・雲	2.5YR5/8	5YR5/8	P13。
146	W	SM01	甕	13.3	12.2	—	—	9	1/5	3	少	石・雲・結・赤・黒	2.5Y4/2	7.5YR5/4	外面は磨滅のため調整不明。P37の口。
147	W	SM01	甕	11.7	10.7	15.9	—	12.2	1/2	2	少	長・雲・角・赤・黒	5YR5/4	5YR5/6	口縁部外面磨滅のため調整不明。内面工具痕・接合痕あり。外面煤付着。P31のル。P31の口。
148	W	SM01	甕	19.2	15.7	23.1	—	24.9	1/5	2.5	中	石・雲・結・赤	5YR5/6	5YR4/6	頸部・体部外面に煤付着。外面磨滅・剥離のため調整不明。P30のり。
149	W-II	SM01	甕	15.1	13.3	—	—	10.7	1/3	9.4	中	石・雲・赤	10YR7/4	7.5YR6/4	内外面とも煤付着。

番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
122	ナデ・凹線状沈線文2条	ナデ	—	指オサエ→ハケ(6条/cm)	—	—	—	—	—	—
123	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(4条/cm)→ナデ	ハケ(4条/cm)→ナデ	ケズリ	タタキ(2条/cm)→ハケ(4条/cm)→ナデ	ケズリ	タタキ(2条/cm)→ハケ(4条/cm)→ナデ	ケズリ
124	ナデ→刻み目文	ナデ	ハケ(11条/cm)→ナデ	ナデ	—	—	—	—	—	—
125	ナデ・凹線状沈線文2条	ナデ・板ナデ(1.3cm以上)	ミガキ(3mm)	指オサエ→ナデ・板ナデ(1.3cm以上)	—	—	—	—	—	—
126	—	—	ナデ→板ナデ	指オサエ→ナデ	タタキ(2条/cm)→板ナデ	ケズリ	—	—	—	—
127	—	—	ハケ(6条/1.2cm)	ハケ(6条/1.2cm)	ハケ(6条/1.2cm)・刻み目文	指オサエ→ナデ・ケズリ	ハケ(6条/1.2cm)→ミガキ(3mm)	ケズリ(1.5cm)	—	—
128	—	—	—	—	ミガキ(3mm)	ケズリ	—	—	—	—
129	—	—	—	—	ナデ・タタキ(2条/cm)→ハケ(12条/cm)→ナデ	ケズリ	タタキ(2条/cm)→ハケ(12条/cm)→ナデ	ケズリ	—	—
130	—	—	—	—	ミガキ(2mm)	指オサエ・板ナデ(1mm)	ミガキ(2mm)	指オサエ・板ナデ(1mm)・ハケ(8条/cm)	—	—
131	—	—	刺突文	指オサエ	タタキ→ハケ(5条/cm)→一部ミガキ・竹管文(2条)	ナデ・指オサエ→ハケ(5条/cm)	タタキ→ハケ(5条/cm)→一部ミガキ	指オサエ→ハケ(5条/cm)・ケズリ	—	—
132	—	—	ハケ(10条/1.5cm)→刻み目文	指オサエ→ケズリ	ハケ(10条/1.5cm)→ミガキ(3.5mm)	指オサエ→ケズリ	—	—	—	—
133	—	—	—	—	ハケ(7条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	ハケ(7条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	—	—
134	—	—	—	—	—	—	ミガキ(4mm)	ケズリ	ナデ	ケズリ
135	—	—	—	—	—	—	タタキ(2条/cm)→ハケ(8条/cm)	ケズリ	ナデ	ケズリ
136	—	—	—	—	ハケ(8条/1.5cm)→ミガキ(2.5mm)	指オサエ→ナデ	ハケ(8条/1.5cm)→ミガキ(2.5mm)	指オサエ→ケズリ	—	—
137	—	—	—	—	ハケ(5条/cm)→ミガキ(3mm)	ケズリ(単位不明)→指オサエ→ナデ	ハケ(5条/cm)→ミガキ(3mm)	ケズリ(単位不明)	—	—
138	—	—	—	—	タタキ(4条/cm)→ハケ(7条/cm)→ナデ	ケズリ→板ナデ	タタキ(4条/cm)→ナデ	ケズリ→板ナデ	ナデ	ケズリ
139	—	—	—	—	—	—	ハケ(4条/cm)	ケズリ→指オサエ	ハケ(4条/cm)	ケズリ→指オサエ
140	—	—	—	—	ハケ(9条/cm)→ミガキ(2.5mm)	ハケ(9条/cm)	ミガキ(2.5mm)	ナデ	ナデ	棒状工具によるオサエ
141	—	—	—	—	タタキ(3条/cm)→ハケ(7条/cm)	ケズリ→ナデ	タタキ(3条/cm)→ハケ(7条/cm)	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ
142	—	—	—	—	—	—	板ナデ・ハケ(9条/1.2cm)→板ナデ	指オサエ→板ナデ	指オサエ→板ナデ	指オサエ→板ナデ
143	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(8条/cm)→タタキ(2条/cm)	板ナデ・指オサエ→ケズリ	タタキ(2条/cm)→板ナデ	指オサエ→ケズリ	—	—
144	ナデ	板ナデ	ナデ	板ナデ	タタキ(3条/cm)→ハケ(10条/cm)→ナデ	ケズリ	タタキ(3条/cm)→ハケ(10条/cm)	指オサエ→ケズリ(1.2cm以上)→ナデ	—	—
145	ナデ	ナデ	ナデ	指オサエ	タタキ(2条/cm)→ハケ(8条/cm)	ナデ・ケズリ	ハケ(8条/cm)	ケズリ	ハケ(8条/cm)	指オサエ
146	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	板ナデ	ケズリ→指オサエ・ナデ	—	—	—	—
147	凹線状沈線2条?	ナデ	ナデ	指オサエ→ナデ・ケズリ	タタキ(3条/cm)→ナデ	指オサエ→ナデ・ケズリ	タタキ(3条/cm)→ナデ	指オサエ→ケズリ	—	—
148	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	タタキ(2条/cm)→ナデ・タタキ(2条/cm)→ハケ(5条/0.5cm)→ナデ	指オサエ・ケズリ	—	—	—	—
149	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(9条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	ハケ(9条/cm)→ナデ	ケズリ	—	—



番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
150	W	SM01	甗	17.4	13.4	—	—	5.2	1/3	3.2	少	石・雲・結・赤	5YR5/6	5YR5/6	P30のり。
151	W-II	SM01	甗	15.6	14.1	—	—	5.9	1/8	7.5	中	石・雲・結	7.5YR4/1	7.5YR5/4	内面磨滅のため調整不明。口縁・体部外面煤付着。
152	W	SM01	甗	5	13	19.4	—	9.9	4/5	1.5	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/6	5YR5/6	外面体部中位以下剥離。P30のり。
153	W	SM01	甗	15.1	13.4	—	—	9	1/3	5.5	中	石・長・赤・黒	10YR4/1	7.5YR6/4	体部外面煤付着。内面焦げにより変色、接合痕あり。P31の口。P31のり。P31のハ。
154	W	SM01	甗	6.7	13.1	—	—	6.2	1/4	2.8	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/6	5YR6/6	P21。
155	W	SM01	甗	15.7	13.6	—	—	6.8	1/8	5	中	石・長・結・赤	7.5YR6/6	7.5YR6/6	接合痕あり。外面に黒斑あり。内面に工具痕あり。P30のハ。
156	W	SM01	甗	14	12.7	—	—	6.6	1/5	2.5	中	石・雲・結・赤・黒	7.5YR5/4	7.5YR5/4	外面口縁～体部に煤付着。外面磨滅のため調整不明。(備後?)の模倣品?。P34。
157	W	SM01	甗	15.2	14.2	—	—	6.4	1/4	1.5	中	石・長・赤	10YR7/4	7.5YR7/6	搬入品? P31のハ。
158	W	SM01	甗	15.9	12.8	—	—	4.8	1/4	2.5	中	石・長・赤	7.5YR7/6	5YR6/8	磨滅により調整不明。口縁部外面煤付着。P31のハ。
159	W	SM01	甗	14	13.5	—	—	8.1	1/4	3.2	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/3	5YR6/6	体部外面に黒斑あり。P30のハ。
160	W	SM01	甗	15.4	12.5	—	—	8.9	1/5	4.2	中	石・雲・結・赤	5YR5/6	2.5YR5/6	口縁部～胴上部外面に煤付着。P30ハ。
161	W	SM01	甗	12	11.1	—	—	5.4	1/5	3.5	少	石・雲・結・赤	2.5Y3/1	7.5YR6/4	外面体部に煤付着。P37の口。
162	W	SM01	甗	15.4	13.6	—	—	2.4	1/10	9	中	石・雲・結・赤	5YR6/8	5YR6/6	外面口縁部に煤付着。9mm 大の礫(石英?)あり。P35のト。
163	W	SM01	甗(壺?)	15.4	—	—	—	1.8	1/5	1	少	石・長・雲・赤	7.5YR7/6	7.5YR7/6	外面煤付着。P31の口。
164	W	SM01	甗	26.8	24.7	—	—	6.1	1/14	1.5	中	石・雲・赤	5YR6/6	5YR5/6	内外面磨滅のため調整不明。P34。
165	W	SM01	甗	14	11.8	—	—	4.5	1/4	3	中	石・結・赤	5YR6/6	7.5YR6/6	P23。
166	W	SM01	甗	15.1	13	—	—	4.3	1/6	5	多	石・結・赤	5YR6/6	5YR6/8	P7。
167	W	SM01	甗	—	15.3	—	—	3.1	1/4	4.6	中	石・雲・結・赤	10YR4/3	7.5YR6/6	頸部径や傾きに誤差あり。内外面とも磨滅のため調整不明。P20。
168	W	SM01	甗	14.4	12.2	—	—	2.9	1/5	3	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/6	5YR6/6	内外面ともに磨滅激しく調整不明。P30のり。
169	W	SM01	甗	14.3	11.9	—	—	3.6	2/3	5	中	石・長・雲・赤	7.5YR7/4	10YR7/4	一部口縁部煤付着。体部内面接合痕あり。搬入品?。P31の口。P31のハ。
170	W	SM01	甗	13.4	12.6	—	—	3.5	1/7	3.5	中	石・長・雲・結・赤	5YR5/4	2.5YR5/6	一部合成・外面に煤付着。内外面ともに磨滅のため調整不明。P37の口。
171	W	SM01	甗	14.4	11.6	—	—	3	1/3	4	中	石・雲・結・赤	5YR6/6	2.5YR5/6	P23。
172	W	SM01	甗	14.4	11.8	—	—	4.9	1/2	4.6	少	石・雲・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	全体的に剥離のため調整不明。P12・P13。
173	W	SM01	甗	14.7	13.2	—	—	1.9	1/12	7.8	少	石・雲・結・赤	10YR6/3	7.5YR6/3	P12。
174	W	SM01	甗	16.5	14.6	19.4	—	10.6	3/5	1.5	中	石・長・雲・赤	5YR6/6	5YR6/8	内面お焦げあり。外面に煤付着。P13。
175	W	SM01	甗	—	10.4	—	—	5.5	1/13	1	中	石・長・結・赤	7.5YR7/6	5YR7/6	P35のト。
176	W	SM01	甗	—	—	21.3	5.5	20.9	2/3	3	中	石・長・角	2.5Y4/1	7.5YR3/1	一部体～底部外面煤付着。内面お焦げ付着。外面接合痕あり、磨滅により部分的に調整不明。讃岐? P30のり。P30のハ。
177	W	SM01	甗	—	—	15.4	—	14	1/3	4.5	多	石・雲・結・赤	5Y4/2	5YR5/6	外面に煤付着。P20。
178	W	SM01	甗	—	—	18.6	4.3	20.7	2/3	4	中	石・雲・赤	10YR6/3	2.5YR5/6	外面磨滅のため部分的に調整不明。体部外面煤付着。体部下部に一カ所孔あり(焼成後あけた孔か?)。接合痕あり。P31のル。
179	W	SM01	甗	—	—	16.6	—	11.7	1/5	2	中	石・長・赤	10YR6/3	7.5YR7/4	外面に煤付着。外面は磨滅のため調整不明。体部片を計測のため径不正確。P34のト。
180	W	SM01	甗	—	—	—	6.1	19.8	1/2	5.1	少	石・雲・結・赤	7.5YR5/4	5YR4/3	外面体部に黒斑あり。内面体～底部にかけて黒斑あり。P31のハ。
181	W	SM01	甗	—	13	19.6	—	16.9	1/8	7	多	石・雲・結・赤	5YR7/6	5YR3/1	体部外面ほぼ煤付着。体部上位内面に一カ所へこみあり(成形時に工具があたった痕か)。内外面接合痕あり。P31のハ。P31のル。

番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
150	ナデ	ナデ	ハケ(5条/cm) →ナデ	ナデ	ハケ(5条/cm)	ケズリ	-	-	-	-
151	凹線状沈線1 条	ナデ	指オサエ→板 ナデ・ハケ(5 条/1.1cm)	ナデ	ハケ(5条/1.1 cm)	ケズリ	-	-	-	-
152	ナデ	指オサエ→ナ デ	タタキ→ナデ	指オサエ→ナ デ	タタキ→ミガ キ(5mm)	指オサエ→ケ ズリ	-	-	-	-
153	ナデ	ナデ→一部板 ナデ	ハケ(10条 /1.4cm)	ナデ	ハケ(10条/1.4 cm)→ナデ・ハ ケ(10条/1.4 cm)	指オサエ→板 ナデ・指オサ エ→ケズリ	-	-	-	-
154	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(5条/cm)	ケズリ	-	-	-	-
155	板ナデ(単位 不明)	ハケ(13条 /cm)	ナデ	ナデ	タタキ(2条 /cm)→板ナデ (幅1cm以上)・ タタキ(2条 /cm)→ハケ(13 条/cm)	板ナデ(単位 不明)→指オ サエ→ナデ	-	-	-	-
156	ナデ	ナデ	ナデ(ハケの 工具痕あり)	ナデ	ハケ(条数不明) →ナデ・ハケ(条 数不明)	指オサエ→ナ デ・ケズリ	-	-	-	-
157	ナデ・凹線状 沈線2条	ナデ	ナデ	ハケ(6条/cm)	ハケ(6条/cm)	指オサエ→ケ ズリ	-	-	-	-
158	ナデ	ナデ・ハケ(9 条/cm)	ナデ	ナデ	ハケ(9条・11条 /cm)	ケズリ	-	-	-	-
159	ナデ	ハケ(6条/cm)	ハケ(10条 /cm)	指オサエ・ナ デ	ハケ(10条・16 条/cm)	指オサエ・ナ デ・ケズリ	-	-	-	-
160	ナデ	ハケ(7条/cm)	ナデ	ナデ	タタキ→ハケ (14条/cm)→ナ デ	ケズリ→指オ サエ・ナデ	-	-	-	-
161	ナデ・凹線状 沈線文1条	ナデ	指オサエ→板 ナデ	ナデ	板ナデ	指オサエ→ケ ズリ(工具痕 あり)	-	-	-	-
162	ナデ	ハケ(7条/cm)	ナデ	ナデ・ケズリ	-	-	-	-	-	-
163	凹線状沈線2 条	ナデ	ナデ	ケズリ	-	-	-	-	-	-
164	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(6条/cm)	板ナデ?	-	-	-	-
165	ナデ・ハケ(8 条/cm)	ナデ・ハケ(7 条/cm)	ハケ(8条/cm)	指オサエ→ナ デ	ハケ(8条/cm)	ケズリ	-	-	-	-
166	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	タタキ(3条 /cm)→板ナデ (幅1.1cm以上)	ケズリ	-	-	-	-
167	-	-	ナデ	ナデ	ハケ(単位不明) →ナデ	指オサエ→ナ デ	-	-	-	-
168	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	-
169	ナデ・凹線状 沈線1条	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(9条/1.4 cm)	ナデ・ケズリ	-	-	-	-
170	凹線状沈線文 1条	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(4条/0.5 cm)	ケズリ	-	-	-	-
171	ナデ	ナデ	ハケ(6条/cm) →ナデ	指オサエ・ナ デ	ハケ(6条/cm) →ナデ	ケズリ	-	-	-	-
172	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ(12条/cm) →ナデ	ケズリ→ナデ	-	-	-	-
173	ナデ	ナデ	ハケ(14条 /cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	-	-	-	-	-	-
174	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	タタキ→ハケ (8条/cm)	ケズリ	-	-	-	-
175	-	-	ナデ	ナデ	ハケ→ナデ・ハ ケ(7条/cm)	ケズリ	-	-	-	-
176	-	-	-	-	ハケ(6条/0.5 cm)(9条/0.9cm) (12条/1.6cm)・ 板ナデ	指オサエ→ケ ズリ	ハケ(6条/0.5 cm)(9条/0.9cm) (12条/1.6cm)・ 板ナデ	指オサエ→ケ ズリ	ハケ(9条/0.9 cm)	指オサエ→ケ ズリ
177	-	-	-	-	指オサエ→ハ ケ(10条/cm)	指オサエ→ケ ズリ	-	指オサエ→ケ ズリ	-	-
178	-	-	-	-	ハケ(11条/1.7 cm)	指オサエ→ケ ズリ	ハケ(11条/1.7 cm)	指オサエ→ケ ズリ	指オサエ→ハ ケ?	指オサエ→ナ デ
179	-	-	ナデ	ケズリ	ハケ(5条/cm)	ケズリ	ハケ(5条/cm)	ケズリ	-	-
180	-	-	-	-	タタキ(2条 /cm)→ナデ	ケズリ→指オ サエ→ナデ	板ナデ	ケズリ→指オ サエ→ナデ	ナデ	ケズリ→指オ サエ→ナデ
181	-	-	ナデ	ナデ	ハケ(6条・8条 /0.8cm)	ナデ・指オサ エ→ケズリ	ハケ(6条・8条 /0.8cm)	指オサエ→ケ ズリ	-	-

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
182	W	SM01	甗	-	-	18.4	-	19.3	1/5	4	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/4	5YR6/6	破片のため傾きおよび径に誤差あり。外面上～下部にかけて黒斑・煤付着。内面下部に黒斑あり。P31のル。
183	W	SM01	甗	-	-	21.2	-	17.5	1/5	3.2	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/6	7.5YR5/4	傾き・体部最大径に誤差あり。外面黒斑・煤付着。内面黒斑あり。
184	W-II	SM01	甗	-	-	21.5	-	18.2	1/3	3	中	石・雲・結・赤	10YR5/4	5YR5/4	内外面煤付着。外面部分的に磨滅のためタタキ・ハケの単位不明。接合痕あり。P23下層。
185	W	SM01	甗	-	-	-	-	10.4	体部片	2	中	石・雲・結・赤	7.5YR5/4	5YR5/6	残存少ないため上下逆の可能性あり。体部径も誤差が大きいと思われる。外面大部分剥離・煤付着。内面磨滅のため一部調整不明、お焦げあり。P30のり。
186	W	SM01	甗	-	-	-	-	10	1/8	2	中	石・長・赤	5YR6/6	7.5YR4/2	胴下部下半は器壁剥離のため調整不明。外面の器壁が残存しているところは煤付着。P13。
187	W-II	SM01	甗	-	-	-	4.5	7.6	1/3	2	中	石・雲・結・赤	10YR4/3	10YR6/4	外面磨滅のため調整不明。畦出土出土。
188	W	SM01	甗	-	-	-	4.2	3.4	1/2	2	少	石・雲・角・結・赤	5YR5/4	5YR4/3	外面に煤付着。P37の口。
189	W-II	SM01	甗	-	-	-	5.2	4.9	1/4	4.2	少	石・長・雲・赤	5YR4/1	5YR5/3	外面(体～底部)に煤付着。畦出土出土。
190	W	SM01	甗	-	-	-	6	2.9	7/10	6.5	中	長・雲・結・赤	10YR4/1	7.5YR4/3	胴下部外面黒斑あり。P31のト。
191	W	SM01	甗	-	-	-	3.2	2.5	1	3	中	長・雲・結・赤	10YR6/3	5YR5/6	一部内面は磨滅のため調整不明。胴下部外面に煤付着。P12。
192	W	SM01	甗	-	-	-	4.8	4.8	1/3	4	少	長・雲・赤	7.5YR6/4	10YR6/3	P34のト。
193	W	SM01	甗	-	-	-	5	6.2	1	6	少	長・雲・赤	7.5YR3/1	10YR4/2	外面に煤付着。P37の口。
194	W	SM01	甗	-	-	-	5.4	6.5	1/4	14	少	石・長・結・赤	10YR5/3	7.5YR5/4	外面に煤付着。P20。
195	W	SM01	甗	-	-	-	4.7	9.8	1	1.5	中	石・長・雲・結・赤	10YR6/4	7.5YR6/6	底部完形だが歪みあり。内面お焦げ・外面煤付着。P31のル。P31のハ。
196	W	SM01	鉢	35.8	35.2	-	-	16.3	1/5	6.8	中	石・雲・結・赤	7.5YR6/4	7.5YR6/4	体部外面に黒斑あり。P20。
197	W	SM01	鉢	21.7	-	-	-	7.4	1/5	5	中	石・長・雲・結・赤・黒	7.5YR6/4	10YR7/4	外面に煤付着。内外面ともに磨滅のため部分的に調整不明。器形に歪みがあるため口径に誤差あり。P34・P37の口。
198	W	SM01	鉢	12.9	-	13.8	3.6	9.1	1/3	3.4	中	石・雲・結・赤	2.5YR4/1	2.5Y6/6	P23。
199	W	SM01	鉢	12.5	-	-	3.3	5.8	4/5	2	少	石・長・雲	5YR6/6	5YR6/4	内外面煤付着(全体の1/3ぐらい)。P21石組下層。
200	W	SM01	鉢	11.5	-	-	2.5	4.3	1	4.2	中	石・長・雲・結・黒	2.5Y6/6	5YR6/6	外面に黒斑あり。吉野川下流域からの搬入品。P13。
201	W-II	SM01	鉢	-	-	-	3.9	5.4	3/4	3.4	少	石・長・雲・赤	7.5YR6/2	7.5YR6/3	外面黒斑あり。畦出土出土。
202	W	SM01	脚台付鉢	13.6	-	-	6.1	9.9	4/5	3.8	少	石・雲・結・赤	7.5YR6/4	7.5YR6/4	内面は磨滅のため調整不明。P7? →SD01出土?
203	W-II	SM01	鉢	-	-	-	3.1	1.9	1/4	4	中	石・長・結・赤	5YR6/6	5YR6/6	内外面に黒斑あり。
204	W	SM01	脚台付鉢	-	-	-	3.5	4.2	1	5	少	長・その他	10YR7/3	10YR6/4	吉備からの搬入品?花崗岩? P22。
205	W	SM01	高杯	24.6	脚4.6	-	17.8	17.9	4/5	3.2	少	石・雲・結・赤	2.5YR6/6	5YR6/6	杯部磨滅・剥離のため調整不明。杯上部外面に黒斑あり。脚部穿孔4カ所。絞り痕あり。
206	W	SM01	高杯	-	-	-	-	10.6	1/4	3.4	少	石・雲・結・赤	2.5YR6/8	5YR6/6	一部合成。一部P13。
207	W	SM01	高杯	26.1	3.5	-	18.1	16.7	2/3	3.1	少	石・長・雲・結・赤	7.5YR7/6	7.5YR7/3	一部合成・穿孔4カ所。P34のト。
208	W	SM01	高杯	23.4	-	-	-	4.6	1/5	3	多	石・雲・赤・黒	2.5YR6/6	2.5YR6/6	内外面ともに磨滅のため調整不明。P12。
209	W	SM01	高杯	29.8	-	-	-	3.5	1/10	3.2	少	石・雲・結・赤	7.5YR7/4	2.5YR6/6	P13。
210	W	SM01	高杯	-	-	-	18.5	12.6	3/7	6	多	石・長・雲・結・赤	10YR7/4	10YR7/4	一部焼成前穿孔0.8cm対角に4カ所?(欠損のため不確定)。P31の口。
211	W	SM01	高杯	-	-	-	14.3	9.4	1/3	3.6	少	石・長・雲・赤	10YR6/4	10YR6/3	P21石組下層。
212	W	SM01	高杯	25.1	-	-	20.1	(杯部)3.6 (脚部)2.7	(杯部)1/8 (脚部)1/6	3.4	少	石・長・雲・結・赤	(杯部)7.5YR7/4 (脚部)10YR7/3	(杯部)5YR6/4 (脚部)7.5YR7/4	外面部分的に煤付着。P12。

番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
182	-	-	-	-	タタキ(2条/cm)→ハケ(6条/cm)	ケズリ→ナデ	タタキ(2条/cm)→ハケ(6条/cm)	ケズリ→ナデ	-	-
183	-	-	-	-	ハケ(5条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	ハケ(5条/cm)→ナデ	ケズリ	-	-
184	-	-	-	-	ハケ(7条/cm)	指オサエ→ケズリ	タタキ(2条/cm)→ハケ(7条/cm)	指オサエ→ケズリ	-	-
185	-	-	-	-	-	-	ミガキ(3mm)	ケズリ	-	-
186	-	-	-	-	-	-	ハケ(9条/cm)	ケズリ(1.4cm以上)	板ナデ	ケズリ(1.4cm以上)
187	-	-	-	-	-	-	ミガキ(2.5mm)	ケズリ	ナデ	ケズリ
188	-	-	-	-	-	-	ハケ(7条/cm)→ミガキ(1~2mm)	指オサエ→ケズリ	ナデ	指オサエ→ケズリ
189	-	-	-	-	-	-	ハケ(7条/cm)→ナデ	ケズリ→ナデ	板ナデ	ケズリ→ナデ
190	-	-	-	-	-	-	ミガキ?→ハケ(8条/cm)	板ナデ	板ナデ→ハケ工具によるナデ	指オサエ・ナデ
191	-	-	-	-	-	-	タタキ(3条/cm)→ハケ(11条/cm)	-	タタキ(3条/cm)	-
192	-	-	-	-	-	-	板ナデ	ケズリ	ハケ(6条/cm)	指オサエ
193	-	-	-	-	-	-	ハケ(16条/cm)	ケズリ	ハケ	ケズリ
194	-	-	-	-	ハケ(6条/cm)	ケズリ・ナデ	ハケ(6条/cm)	ケズリ・ナデ	ナデ	ナデ
195	-	-	-	-	-	-	ハケ(6条/cm)	ケズリ	ナデ	ケズリ
196	ナデ	ナデ	ナデ	ケズリ→ミガキ(3mm)	ケズリ→ミガキ(3~5mm)	ケズリ→ミガキ(3mm)	ケズリ→ミガキ(3~5mm)	ケズリ→ミガキ(3mm)	-	-
197	ナデ	ナデ	-	-	ハケ(8条/cm)→タタキ	ハケ(5条/0.8cm)	ハケ(8条/cm)→タタキ	ハケ(5条/0.8cm)	-	-
198	指オサエ・ナデ→ハケ(6条/cm)	ハケ(6条/cm)	-	-	指オサエ・ナデ→ハケ(6条/cm)	ハケ(6条/cm)	タタキ→指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	ナデ	指オサエ・ナデ
199	ハケ→ナデ	ハケ(6条/7mm)→ナデ	-	-	ハケ→ナデ	ハケ(6条/7mm)→ナデ	指オサエ	ハケ(6条/7mm)	ナデ→ケズリ	ハケ(6条/7mm)
200	ナデ	ナデ	-	-	ハケ(6条/cm)	ナデ	ハケ(6条/cm)	ナデ	ナデ	ナデ
201	-	-	-	-	磨滅・剥離不明	ミガキ(3mm)→ナデ	ハケ(7条/cm)→ナデ	ミガキ(3mm)→ナデ	磨滅不明	ミガキ(3mm)→ナデ
202	ナデ	ナデ	-	-	タタキ(2条/cm)→ナデ	板ナデ→ミガキ(3mm)	タタキ(2条/cm)→ナデ	板ナデ→ミガキ(3mm)	指オサエ→ナデ	板ナデ→ミガキ(3mm)
203	-	-	-	-	-	-	板ナデ(単位不明)	ハケ(9条/cm)	ナデ	ハケ(9条/cm)
204	-	-	-	-	ミガキ(3mm)	ハケ(10条/cm)→ナデ	指オサエ	ハケ(10条/cm)→ナデ	指オサエ	指オサエ
205	指オサエ→ナデ	ナデ	指オサエ→ナデ	ナデ	ハケ(4条/cm)→ナデ	ハケ→ミガキ?	ミガキ(3mm)→ナデ	縦方向のナデ	ナデ	ハケ(4条/cm)・ナデ
206	-	-	-	-	タタキ?→ミガキ(3mm)・タタキ?→ハケ(7条/cm)	指オサエ・ナデ	ミガキ(3mm)	ハケ(7条/cm)→ナデ	-	-
207	ナデ・ミガキ(2mm)→ナデ	ナデ	-	-	ハケ(9条/cm)→ナデ	ハケ(9条/cm)→ミガキ(2mm)	ナデ・ミガキ(2mm)→ナデ	ケズリ→ナデ・絞り痕あり	ナデ	板ナデ
208	ミガキ(2~3mm)	ミガキ(2~3mm)	-	-	ミガキ(2~3mm)	ハケ(条数不明)→ミガキ(幅不明)	-	-	-	-
209	ナデ→ミガキ(2.5mm)	ナデ→ミガキ(2.5mm)	-	-	指オサエ→ナデ	ナデ→ミガキ(2.5mm)	-	-	-	-
210	-	-	-	-	ミガキ(3mm)	ナデ	ハケ(8条/0.7cm)→穿孔(0.8cm)	ナデ・ケズリ	ナデ	ナデ
211	-	-	-	-	ナデ→ミガキ(2mm)	指オサエ・ナデ	ナデ→ミガキ(2mm)	指オサエ・ナデ	ナデ→ミガキ(2mm)	ナデ
212	ナデ	ナデ→ミガキ(3mm)	-	-	ナデ→ミガキ(1.5mm)・ミガキ(2mm)	ナデ→ミガキ(3mm)・指オサエ→ナデ・ハケ(条数不明)→ナデ	ミガキ(2mm)	板ナデ	ナデ・凹線状沈線2条	ナデ

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
213	W-II	P17	甕	14.9	12.7	-	-	2.7	1/6	3.5	中	石・長・雲・結・赤	7.5YR5/4	2.5YR5/6	外面磨滅のため調整不明。P17。SM01出土？
214	W-II	P22	高杯	-	-	-	-	2.8	1/12	1.8	少	石・長・雲・結・赤	5YR6/6	7.5YR6/4	SM01出土？
215	W-II	P21	土師質土器 皿	-	-	-	6.4	1.2	1/3	1	少	雲・赤	10YR6/4	7.5YR6/4	
216	W-II	SK01	土師質土器 羽釜	5.1	-	-	-	14.5	-	2	中	石・長・雲・赤	-	10YR7/4	体部との接合部下半と脚部上部側面に煤付着。
217	W-II	SK2	鉢	28.9	27.2	-	-	3.5	1/8	2	少	石・雲・結・赤	5YR5/4	5YR5/4	外面黒斑あり。小片のため口径には誤差あり。 No.24。
218	W-II	SK2	甕	14.6	-	-	-	2	1/7	3.4	中	石・雲・結・赤	5YR7/6	5YR6/6	
219	W-II	土坑25 (SK3)	土師質土器 杯	-	-	-	5.8	1.2	1/3	2	少	雲・赤	10YR8/4	10YR8/6	外面底部調整不明。
220	W-II	Pit25 (SK3)	土師質土器 杯	-	-	-	6.4	1.7	2/5	4	少	雲・赤・その他	10YR7/4	5YR7/6	チャートを含む？
221	W-II	土坑25 (SK3)	須恵器 壺	-	-	-	7.3	3.4	1/3	3	中	長・雲・結・黒	2.5Y6/3	2.5Y6/3	
222	W-I	土坑101 (中世墓)	土師質土器 杯	13.2	-	-	-	2.4	1/13	2	少	石・長・雲・赤・黒	7.5YR6/6	7.5YR6/6	畦出土下。
223	W-I	土坑101	土師質土器 皿	5.3	-	-	4.8	1.2	1	4	中	石・長・雲・赤	5YR5/8	5YR5/8	底部内面黒斑あり。
224	W-I	土坑101	土師質土器 杯	13	-	-	6.3	4.2	7/10	0.5	少	石・長・雲	7.5YR6/6	10YR6/4	底部外面黒斑あり。
225	W-I	土坑101	土師質土器 羽釜	22	鏝27	-	-	9.1	1/6	3	中	石・長・赤	7.5YR5/4	5YR5/4	外面(鏝端部より下)に煤付着。
226	W-I	Pit14	土師質土器 杯	-	-	-	8.3	3.2	1/5	5	少	赤	7.5YR7/4	7.5YR7/6	
227	W-I	Pit14	土師質土器 杯	-	-	-	5.4	1.3	1/3	1	少	長・雲・赤	7.5YR6/8	7.5YR6/6	
228	W-II	Pit21	土師質土器 杯	11.6	-	-	4.9	3.8	2/5	2	少	長・雲・赤	5YR6/6	5YR6/6	
229	W-II	Pit21	土師質土器 杯	-	-	-	6.1	2.2	1/2	1.5	中	長・雲・結・赤・黒	5YR7/8	7.5YR6/6	
230	W-II	Pit21	土師質土器 杯	-	-	-	6.6	0.6	1/8	2	中	石・長・赤	5YR7/6	7.5YR7/6	
231	W-I	Pit28	土師質土器 皿	5.3	-	-	4.5	1.1	1/5	1	少	石・長・雲	5YR6/6	5YR6/6	
232	W-II	Pit5	壺(甕?)	-	-	-	-	7.6	1/17	3.8	少	石・雲・角・結・赤	7.5YR7/4	7.5YR7/3	外面体上部にかけて二次焼成。外面剥離と磨滅のため調整不明。
233	W-II	Pit23	土師質土器 杯	12.2	-	-	6.7	3.4	1/5	2.5	中	石・長・雲	10YR7/3	10YR7/4	底部・胴下部内部煤付着。
234	W-II	Pit36	土師質土器 杯	14.4	-	-	9	2.7	1/8	3.5	少	石・長・雲	10YR6/3	10YR8/3	胴下部外部煤付着。
235	W-II	Pit36	土師質土器 杯	-	-	-	6	0.8	1/4	2	中	雲・結・赤	7.5YR7/6	5YR7/8	
236	W-I	Pit31	土師質土器 杯	-	-	-	5.3	0.8	1/4	1	中	長・雲	7.5YR7/4	7.5YR7/4	内面磨滅のため調整不明。
237	W-I	Pit56	土師質土器 杯	-	-	-	5.4	1.6	9/10	2	少	長・雲	5YR5/6	5YR5/6	
238	W-I	Pit56	土師質土器 杯	-	-	-	5.6	2.4	1/10	2	中	長・雲・赤・その他	7.5YR7/6	7.5YR7/6	チャートを含む？
239	W-I	Pit67	土師質土器 杯	11.9	-	-	6.2	3	1	2	少	石・長	2.5Y7/4	10YR8/4	
240	W-II	Pit10 2	土師質土器 皿	6.9	-	-	6	1	1/8	1.5	少	雲	10YR7/2	10YR3/1	底部内面調整不明。
241	W-II	Pit10 5	土師質土器 杯	11.4	-	-	7.4	3.9	2/5	2	少	石・長・赤	5YR7/6	5YR6/6	
242	W-II	Pit10 5	土師質土器 皿	6.1	-	-	5.4	1.1	1/5	3	少	雲・赤	7.5YR6/6	5YR6/6	
243	W-II	Pit10 5	土師質土器 皿	7.2	-	-	5.5	1.2	1/10	1	少	長・雲・赤	5YR7/6	5YR6/6	
244	W-II	Pit10 5	土師質土器 皿	7.3	-	-	6	2	1/6	2	少	雲・赤	5YR7/6	5YR7/6	
245	W-I	Pit27	土師質土器 皿	6.4	-	-	5.4	0.8	1/5	3.5	少	長・雲・結・赤	10YR8/4	10YR8/3	
246	W-I	Pit27	土師質土器 羽釜	厚さ 2.1	-	-	-	高さ 4.8	-	2	中	石・長・雲・その他	-	7.5Y6/6	煤付着。チャートを含む？
247	W-I	Pit27	土師質土器 羽釜	25.6	-	鏝 29.3	-	10.4	1/5	2.8	中	石・雲・角・赤	7.5YR4/2	5YR5/4	外面全体に煤付着。格子タタキのため在地と思われるが、角閃石が多いように思われる。
248	W-I		須恵器 捏鉢	26.5	-	-	-	3.6	1/13	0.8	中	石・長・雲・赤・黒	2.5Y6/1	N6/0	東播系須恵質土器こね鉢。小片のため口径には誤差あり。表面削平中。
249	W-I		土師質土器 羽釜?	23.7	-	-	-	5.3	1/10	2	中	石・長・雲・角・赤	7.5YR4/3	5YR5/4	外面体部煤付着。表面削平中。



番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胸上部外面	胸上部内面	胸下部外面	胸下部内面	底部外面	底部内面
213	ナデ	ケズリ	ナデ	ケズリ	ハケ(条数不明)	ケズリ	-	-	-	-
214	杯部外面ミガキ(2mm)→ナデ	杯部内面ミガキ(2mm)→ナデ	-	-	-	-	-	-	-	-
215	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
216	-	-	-	-	-	-	-	-	脚部 指オサエ→ナデ	-
217	凹線状沈線2条	板ナデ(幅1.2cm)	ハケ(5条/0.5cm)→ナデ	板ナデ(幅1.2cm)	ハケ(5条/0.5cm)→板ナデ(幅1.2cm)	板ナデ(幅1.2cm)	-	-	-	-
218	指オサエ・ナデ	ハケ(6条/cm)	-	-	-	-	-	-	-	-
219	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	回転ナデ
220	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	板ナデ	回転ナデ
221	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切	回転ナデ
222	回転ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	-
223	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	-	ケズリ→ナデ	板ナデ→指オサエ
224	回転ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	板ナデ	ナデ
225	指オサエ→ナデ	ナデ	鏝部 指オサエ→ナデ	-	指オサエ→ナデ	指オサエ→板ナデ(2.3cm以上)	-	-	-	-
226	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
227	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
228	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
229	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
230	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	静止ヘラ切	回転ナデ
231	回転ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	板ナデ	回転ナデ
232	-	-	-	-	-	ケズリ	-	ケズリ	-	-
233	回転ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切→板ナデ	回転ナデ
234	ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
235	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
236	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	-	板ナデ	-
237	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	板ナデ	回転ナデ
238	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
239	回転ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切→回転ナデ	回転ナデ
240	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	-
241	回転ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	静止ヘラ切	回転ナデ
242	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
243	回転ナデ	回転ナデ	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
244	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
245	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
246	-	-	-	-	-	-	-	-	脚部 ナデ	-
247	ナデ	ナデ	-	-	指オサエ・ナデ	板ナデ	タタキ	ハケ(5条/cm)	-	-
248	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	-
249	ナデ	ナデ	-	-	指オサエ	ナデ	-	-	-	-

番号	調査区	出土遺構	器種	口径	頸径	体径	底径	器高	残存率	粒径最大	胎土密度	胎土組成	内面色調	外面色調	備考
250	W-Ⅲ		土師質土器 土鉢	口径 0.45	-	-	-	長さ 4.8	9/10	0.8	少	石・長・雲・赤・黒	10YR7/3	10YR7/3	外面磨滅のため調整不明。
251	-	No.8ト レンチ 3層	土師質土器 土鉢	厚さ 1.5	-	-	口径 0.45	長さ 4.55	1	1	少	石・長・雲・角・ 結・赤・黒・そ の	5YR6/6	-	
252	-	No.8ト レンチ 3層	須恵質土器 土鉢	-	-	-	6.8	1.4	3/5	1	中	石・長・その他	2.5Y7/2	2.5Y8/2	脚台部外面黒斑あり。チャートを含む？
253	-	No.8ト レンチ 3層	土師質土器 土杯	-	-	-	7	2	1/2	3.5	少	石・長・結・赤	2.5Y5/1	10YR8/4	
254	-	No.8ト レンチ 3層	土師質土器 土杯	16.2	-	-	9.6	3.4	1/5	2	少	長・雲・結・赤	10YR8/2	10YR8/2	
255	-	No.8ト レンチ	須恵器 皿	16.8	-	-	13.8	1.4	1/13	2	少	石・長・雲・そ の	N5/	N6/	チャートを含む？上下逆で蓋？
256	-	No.1ト レンチ 1層	甕	14.2	-	-	-	1.2	1/10	1.4	中	石・長・雲	7.5YR3/1	7.5YR4/6	外面に煤付着。小破片のため口径に誤差あり。
257	-	No.5ト レンチ 5層	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	2.5	-	1.6	多	石・雲・赤	5Y3/1	10YR7/3	破片実測。拓本あり。
258	-	No.4ト レンチ 4層	縄文土器 深鉢	24.2	-	-	-	3	1/37	2.8	多	石・雲・結・赤	5Y3/1	10YR7/4	拓本2面あり。突帯文土器。小破片のため傾きの誤差が大きいと思われる。
259	-	No.4ト レンチ 3層	土師質土器 土羽釜	23.6	25.9	-	-	4	1/18	5	多	石・長・雲・赤・黒	10YR6/4	10YR7/6	外面煤付着。小片のため口径に誤差あり。
260	-	No.4ト レンチ 3層	土師質土器 土杯	-	-	-	7.3	1.4	1/5	4	少	長・赤	10YR8/6	10YR8/4	
261	-	No.10ト レンチ 3層	瓦質土器 土鉢	-	-	-	5.4	0.7	1/2	1	中	石・長・その他	2.5Y7/1	2.5Y6/1	チャートを含む？
262	-	No.6ト レンチ 3層	高杯	-	-	-	-	-	1	4	少	長・雲・赤	5YR6/6	5YR6/6	一部
263	-	No.6ト レンチ	甕	15.5	12.6	-	-	5.3	2/5	3	中	石・雲・結・赤	7.5YR7/4	7.5YR7/4	内外面ともに磨滅のため調整不明。
264	-	No.6ト レンチ	甕	16.2	13.1	-	-	2.7	1/9	1	少	石・長・雲・黒	7.5YR6/4	2.5Y6/6	口縁内外面煤付着。
265	-	No.7ト レンチ	甕	16.3	12.6	-	-	5.2	1/6	3	多	石・雲・結・赤・黒	5YR6/6	5YR6/6	内面剥離のため調整不明。外面黒斑あり。
266	-	No.9ト レンチ 4層	土師質土器 皿	7.6	-	-	6.4	0.9	1/3	2	中	長・雲・赤	7.5YR6/6	7.5YR6/6	外面口縁部・底部磨滅のため調整不明。内面磨滅のため調整不明。
267	-	No.9ト レンチ 4層	須恵質土器 (瓦器?)	15.8	-	-	-	3.7	1/18	0.4	少	長・雲・黒	5Y6/1	2.5Y6/1	小片のため口径に誤差あり。西村窯系？

第6表 出土石器観察表(1)

番号	調査区	出土遺構	種類・材質	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	残存率
60	W-Ⅳ	SB01	緑泥片岩	敲石?	17.6	6.3	4.5	866.2	上部縁辺にわずかに敲打したと思われる部分がある。	1
63	W-Ⅳ	SB01	砂質片岩	敲石	19.5	8.8	3.6	1052.6	両側面・下部にも敲打痕あり。	1
62	W-Ⅳ	SB01	砂質片岩	敲石	15.4	9.1	5.7	1216	表面被熱か?上部・下部に敲打痕が見られる。	1
56	W-Ⅳ	SB01	サヌカイト	剥片(楔形石器?)	3.8	5.7	0.6	17.4		1
58	W-Ⅳ	SB01	結晶片岩	石庖丁	9.1	5.4	1.2	92.8	下縁部にコーングロス付着。	1
61	W-Ⅳ	SB01	砂質片岩	敲石・磨石	7.1	6.8	2.9	226.2	上下・両側面にも敲打痕がかなり見られる	1
57	W-Ⅳ	SB01	サヌカイト	剥片	2.1	2.4	0.3	1.6		1
59	W-Ⅳ	SB01	結晶片岩	石庖丁	4.2	5.7	0.8	26.5	下縁部にわずかにコーングロス付着が認められる。	1/2
59	W-Ⅳ	SB01	結晶片岩	石庖丁	4.2	5.7	0.8	26.5	下縁部にわずかにコーングロス付着が認められる。	1/2

番号	口縁部外面	口縁部内面	頸部外面	頸部内面	胴上部外面	胴上部内面	胴下部外面	胴下部内面	底部外面	底部内面
250	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
251	—	—	指オサエ・ナデ	—	—	—	—	—	—	—
252	—	—	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ→ミガキ(4~6mm)	板ナデ	回転ナデ→ミガキ(4~6mm)
253	—	—	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	回転ナデ
254	—	—	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
255	回転ナデ	ナデ	—	—	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
256	ナデ	ナデ・ハケ(8条/cm)	—	—	—	—	—	—	—	—
257	刻み目文	ケズリ→ナデ	ミガキ?	—	—	—	—	—	—	—
258	ナデ	ナデ	貼付突帯文・ナデ	ナデ	—	—	—	—	—	—
259	回転ナデ→鏝貼付→指オサエ→ナデ	回転ナデ	回転ナデ→鏝貼付→指オサエ→ナデ	回転ナデ	回転ナデ→鏝貼付→指オサエ→ナデ	回転ナデ	—	—	—	—
260	—	—	—	—	—	—	回転ナデ	—	回転ヘラ切	—
261	—	—	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	板ナデ	回転ナデ
262	—	—	—	—	—	—	ミガキ(4~6mm)	絞り	—	—
263	タタキ(3条/cm)→ナデ	ナデ	タタキ(3条/cm)→ナデ	指オサエ	タタキ(3条/cm)→ハケ(5条/cm)	ナデ	—	—	—	—
264	凹線状沈線1条・ナデ	ハケ(6条/0.8cm)	ナデ	ナデ	ハケ(条数不明)→ナデ	ナデ→ケズリ	—	—	—	—
265	ハケ(5条/0.5cm)	ナデ?	ハケ(5条/0.5cm)→ナデ	ナデ?	タタキ(2条/0.5cm)→ハケ(10条/1.4cm)→ナデ	ケズリ	—	—	—	—
266	—	—	—	—	—	—	回転ナデ	—	—	—
267	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ(2mm)	—	—	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ(4mm)	—	—	—	—

第7表 出土石器観察表(2)

番号	調査区	出土遺構	種類・材質	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	残存率
268	W- II		結晶片岩	砥石	25.9	6.9	4.2	1301.4		3/4
270	W- I		サヌカイト	スクレイパー	3	4	0.6	9.5		1
269	W- I		サヌカイト	剥片	2.8	2.2	0.4	2		1
272	—	No.1トレンチ	サヌカイト	楔形石器	3.7	4	0.6	7.6	石包丁の製作途中の欠損品か?	1
271	—	No.1トレンチ	サヌカイト	剥片	2.4	3.4	0.7	4.2		1
273	—	No.1トレンチ	サヌカイト	石核	5.4	7.5	1.9	93.4	両極打法による階段状剥離が顕著である。石鏃や石剣などの製作途中の欠損品か?	1
274	—	No.7トレンチ	閃緑岩	敲石・磨石	11.9	6.6	5.1	710.3	表面は上下端を除いて滑らか。	1

## 写真図版



写真1 調査地遠景（三好大橋から）

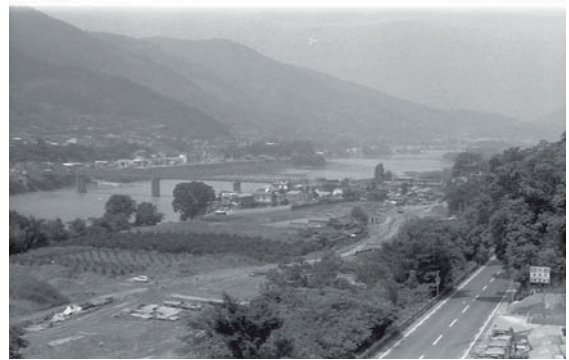


写真2 三好高校（旧三好農林）から三好大橋を望む



写真3 調査地遠景（吉野川南岸井川町から）



写真4 池森神社前の1974年6月調査区周辺現況（北から）



写真5 池森神社前の1974年6月調査区（南から）



写真6 池森神社前の1974年6月調査区（西から）



写真7 吉野川南岸河原から調査地周辺を望む



写真8 池森神社前の1974年6月調査区周辺現況（西から）





写真9 E区掘削状況（西から）



写真10 W・E区現況（西から）



写真11 E区掘削状況（東から）



写真12 E区現況（西から）



写真13 E区掘削状況（北から）



写真14 W・E区現況（東から）



写真15 E区遠景（北東から）



写真16 E区現況遠景（北東から）





写真 17 W区遠景（北から）



写真 18 W区完掘状況（北から）



写真 19 W-I区遠景（西から）



写真 20 W区完掘状況（西から）



写真 21 W-I区完掘遠景（北から）



写真 22 W-III・IV区遠景（北から）



写真 23 W-I区周辺現況



写真 24 W-III・IV区周辺現況





写真 25 SB01 掘削状況



写真 26 SB01 掘削状況



写真 27 SB01 完掘状況

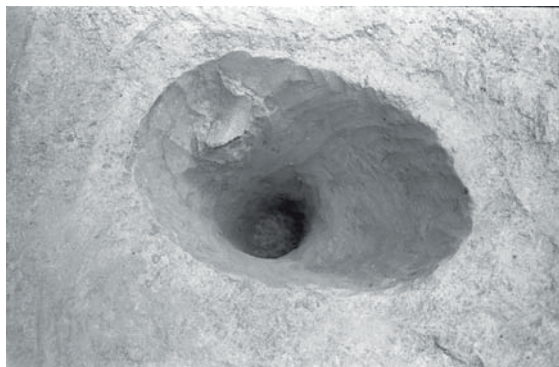


写真 28 SB01 柱穴



写真 29 SB01 掘削状況



写真 30 SB01 石器出土状況



写真 31 SB01 掘削状況



写真 32 SB01 掘削状況



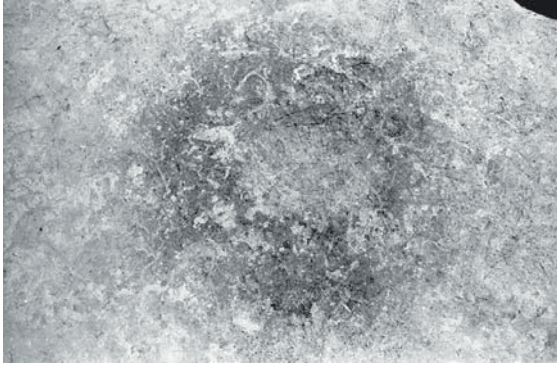


写真 33 SB01 炉跡検出状況



写真 34 SB02 掘削状況

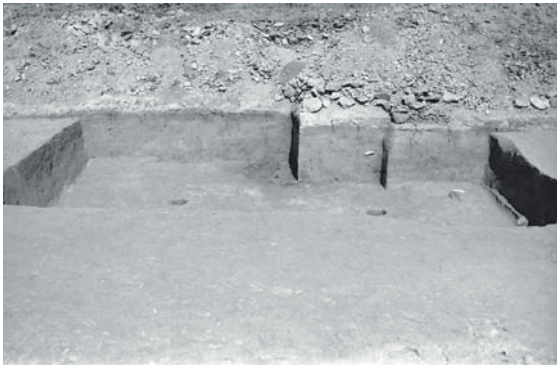


写真 35 SB02 完掘状況



写真 36 SB02 完掘状況



写真 37 SB01・02、SM01 完掘状況（東から）

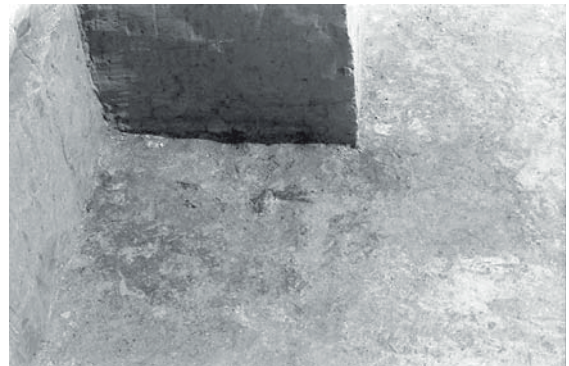


写真 38 SB02 炉跡検出状況



写真 39 東州津遺跡遠景と吉野川対岸井川町を望む 1（現況北から）



写真 40 東州津遺跡遠景と吉野川対岸井川町を望む 2（現況北から）





写真 41 SD01 遺物出土状況



写真 42 SD01 完掘状況 (南から)



写真 43 SD01 P2 地点遺物出土状況

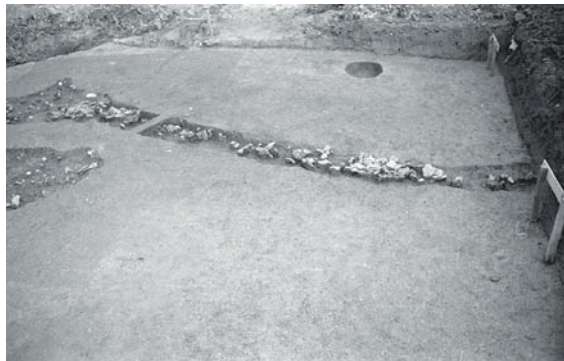


写真 44 SD01 遺物出土状況 (西から)

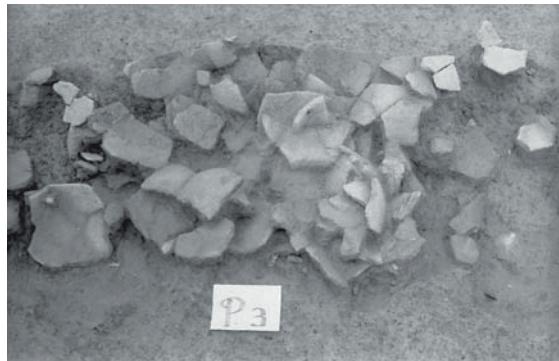


写真 45 SD01 P3 地点遺物出土状況

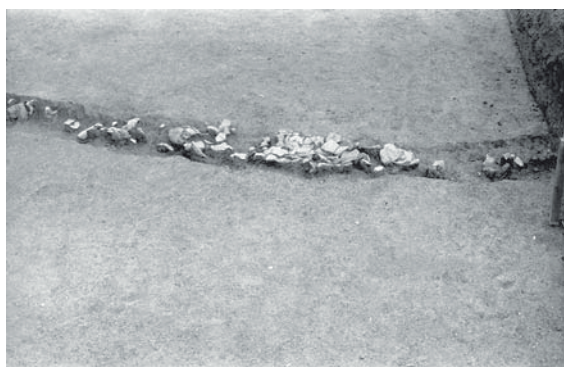


写真 46 SD01 遺物出土状況



写真 47 SD01 P4 地点遺物出土状況





写真 48 SD02 遺物出土状況



写真 49 SM01 遺物出土状況遠景(北から)



写真 50 SM01 遺物出土状況(南から)



写真 51 SM01 遺物出土状況(北から)



写真 52 SM01 遺物出土状況(西から)



写真 53 SM01 遺物出土状況(東から)



写真 54 SM01 遺物出土状況





写真 55 SM01 完掘状況 (北西から)



写真 56 SM01 南北溝完掘状況 (南から)



写真 57 SM01 完掘状況 (北から)



写真 58 SM01 東西溝完掘状況 (東から)



写真 59 SM01 ほか完掘状況 (南西から)



写真 60 SM01 周溝断面



写真 61 SM01 完掘状況 (東から)



写真 62 SM01 周溝断面



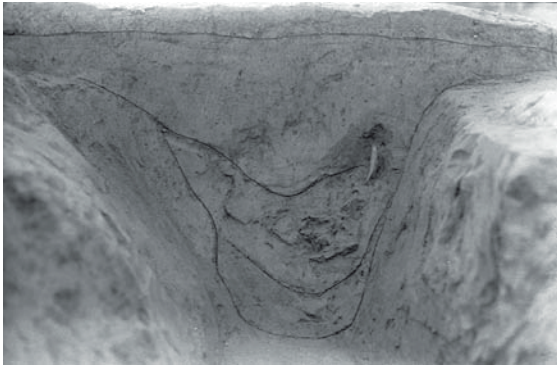


写真 63 SM01 周溝断面



写真 64 SM01 下層遺物出土状況 (東から)



写真 65 SM01 遺物出土状況



写真 66 SM01 東西溝完掘状況 (西から)



写真 67 SM01 遠景 (西から)

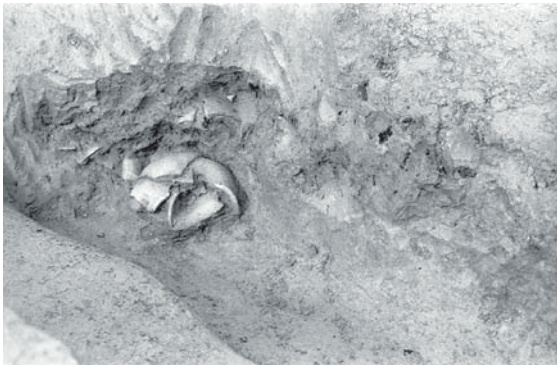


写真 68 SM01 遺物出土状況



写真 69 土坑遺物出土状況





写真 70 土坑遺物出土状況



写真 71 土坑断面



写真 72 土坑遺物出土状況



写真 73 土坑断面



写真 74 三好高校から東州津遺跡を望む 1 (現況北から)



写真 75 三好高校から東州津遺跡を望む 2 (現況北から)

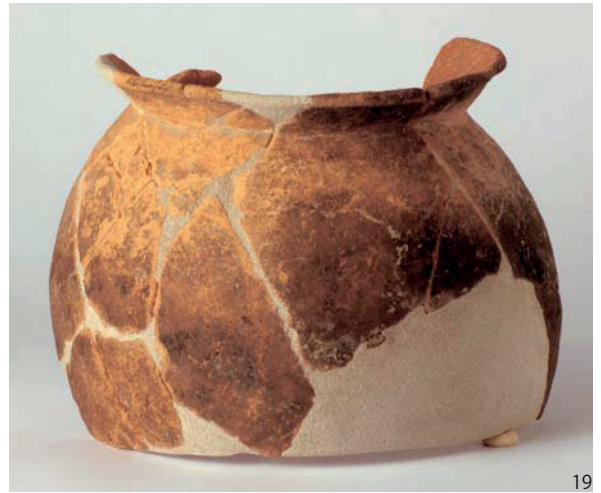


写真 76 箸蔵ロープウェイから東州津遺跡を望む  
(現況北から)



写真 77 三好大橋から東州津遺跡を望む  
(現況南西から)





遺物写真1 SB01 出土土器（壺・甕・鉢・高杯）





69



70



81



87



85



88



103

遺物写真2 SD01 出土土器（壺・甕・鉢）



遺物写真3 SM01 出土土器（壺）





遺物写真 4 SM01 出土土器 (壺・甕)

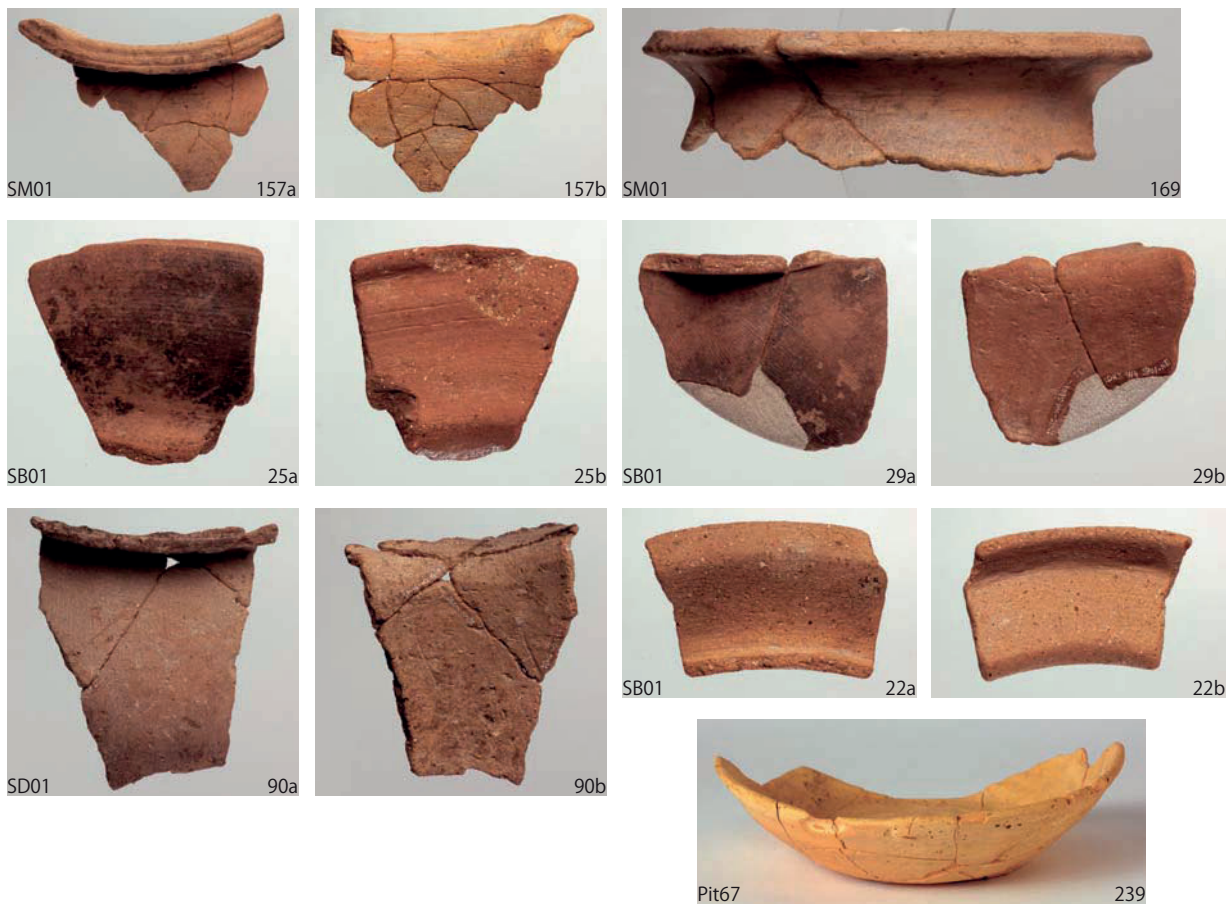


遺物写真5 SM01 出土土器（甕・鉢）





遺物写真6 SM01 出土土器（鉢・高杯）



遺物写真7 遺構出土土器





W-I区 248a



248b



No.8 トレンチ 252a



252b



No.9 トレンチ 267a



267b



No.4 トレンチ 258a



258b



W-I区 270a



270b



W-III区 250



SB01 59a



59b



No.8 トレンチ 251



SB01

61a



61b

遺物写真 8 包含層出土土器・石器



SB01

62a



62b



W-II 区

268a



268b



268c

遺物写真9 遺構・包含層出土石器

## 報告書抄録

ふりがな	ひがししゅうづいせき						
書名	東州津遺跡						
副書名	吉野川北岸農業水利事業関連埋蔵文化財発掘調査						
巻次							
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 82 集						
編著者名	菅原康夫、近藤玲、楠元哲夫、福家清司、森本嘉訓						
編集機関	公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター						
所在地	〒 779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山 86 番 2 TEL088-672-4545						
発行年月日	2011 年 3 月 25 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	(世界測地系) 北緯	(世界測地系) 東経	調査期間	調査 面積	調査原因
ひがししゅうづいせき 東州津遺跡	とくしまけん みよしし 徳島県三好市 ひな 池田町州津籬 た田	36482 208-63	34° 2' 15"	133° 51' 7"	昭和49年度 1974年12月16日 ～ 1975年 3月26日	600㎡	吉野川北岸農 業水利事業
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
東州津遺跡	集落遺跡 墳墓遺跡	弥生時代から古墳 時代前期初頭  中世	方形周溝墓 竪穴住居 土坑 柱穴 溝状遺構	土器（弥生土器、古式土師 器、須恵器、土師器、須恵 質土器、土師質土器など） 土製品（土錘） 石製品（石庖丁、砥石、磨 石など）		弥生時代後期 後半の方形周 溝墓が 1 基、 古墳時代前期 初頭の竪穴住 居が 2 棟確認 された。	
要約	吉野川北岸の河岸段丘上に形成された縄文時代から中世までの遺跡である。とくに、弥生時代後期後半の方形周溝墓が県内で初めて確認された学史的意義は大きい。その他、中世の柱穴、土坑が見つかっている。						

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集

東州津遺跡

—吉野川北岸農業水利事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成23(2011)年 3月25日

編集 公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2  
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会  
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 長町美術印刷有限公司